
しゃくでば！

レルバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しゃくでば！

【Nコード】
N2021P

【作者名】
レルバル

【あらすじ】
俺の名前は永久波音。
大塔高校一年D組、一六才。
ただ平和に毎日過ごしていたい。
それだけだった。
でもそんな日々は唐突に終わりを告げる。
そう……あいつだ。

あいつが来てからだ。

壊れる日常。
崩れる普遍。

さて……。

あなたはこのハードな日常。
体験したいですか？

それとも……やめておきますか？

`http://ncode.syosetu.com/n33330`
1 /

↑ 本編です。

こちらは外伝となっております。

別にこちら単体で読んでもokですが

本編に比べてのキャラ崩壊が楽しいと思いますので……。

第零話（前書き）

この物語、『しゃくでば!』は

『怪盗な季節』

<http://ncode.syosetu.com/n33330>

1 /

の外伝的立ち居地にあります。

このままでも楽しめますが本編を読んでいるとギャップでさらに楽しめると思います。

本編では出来なかったこと

普段ははっちゃけないあのキャラまでがはっちゃけちゃいます。

それではちょっと違う『怪盗な季節』をお楽しみください。

もう一回宣伝ですが本編は

こちらです。

<http://ncode.syosetu.com/n33330>

1 /

それでは……この世界の幕を開けちゃってくださいな！

第零話

俺の名前は永久波音。

え？知らない？

一見様は本編を見ろい！

これからお送りする一回だけで完結ほのぼのギャグコメディ「しゃくでば！」は

長編「怪盗な季節」とは一切関係ありません（たぶんな！）

ので、キャラが壊れていても気にしないコト。

そう例え俺が女になっていたとしてもな！

ではいきます。

後戻りは出来ません、準備はいいか？

よくなくても行くけど。

大塔高校一年D組みちよー平和（当社比）

俺ももちろんちょー平和にすごしていたんだけど……

「おはようしゃく波音〜！」

こいつのせいで平和が壊れました。

「あゝのど乾いたしゃく〜。

波音、一緒に買いに行くしゃく〜」

これで最近知り合ったばかりである。

なれなれしいにも程がある。

伏せていた顔を上げるとシルクハット、長髪、細い目そしてもつとも特徴的な部分。

こいつのまがまがしく太陽光を反射しているとっっても長いアゴ。
一言で言うならキ・モ・イ。

おいアゴでつつくなキモサ五〇％UPだ。
ってか何でこんなになれなれしいんだよ。
あっち行けよ、こっち見んな。

「早く行くしゃくよ、僕はもう死にそうしゃくよ!!」

どんだんだん!!

どたばた暴れる。

ウザイ、あと人の机叩くな。

このウゼエ男の名前は灼場山美鶴。

しゃくを語尾につける変で変でもう臨界点突破寸前まで一瞬でかつ
飛ばせるほどの男だ。

「こら! そのアゴ! 波音にからむな!」

シエラが俺を助けようと助け舟を出してくれた。

「うるさいしゃく!! 僕が何をしようが女のお前には関係ないしゃく!
く!

あっち行つた! しっしっ!! あっかんべーしゃく!!」

あー、こいつ馬鹿だ。

死んだな。

しかもこの歳でアッカンベーかよ。

シエラが何か知らないで(ベルカ世界連邦帝国の最終兵器です)

そんなことを言う男: いや漢、美鶴。

お前は今輝いているぞ! 今だけ!

さあこの勇者をたたえようではないか!

第零話（後書き）

ありがとうございました。

本編と比べてどうでしたか？

こんなのも悪くないなーと。

そう思っていたけるとありがたいのですが・・・

本編の世界観が壊れた！死ね！

って思われたらスイマセン。

謝ります、ごめんなさい。

（ツンデレだということを祈ります）

でも一度はやってみたかったです、外伝。

なんだかねでココまで読んでいただきありがとうございます。

愛してます
↑

しゃくでば！ アゴとなみおと

あー数学って何でこんなに暇なんだろうな。

つんつん

ん？

なんだ、美鶴か。

アゴでつつくな。

「なんだよ……

アゴでつつくなつつただろうが」

ばちん！ばちん！

こいつっ！！

知り合ったばかりの俺にウインクで伝えてきているだ！？

ひょっとしてこいつはギャグでやっているのか！？

と、とりあえず無視しよう。

うん、それがいい、そうしよう。

つんつんつん

「……………」

つんっ！つんっ！

「……………」

つんつんつんつんつんつん！！！

「こら！そこ二人！何してる！？」

「しゃくつ！？」

「僕あ被害者ですつ！！」

怒られた><

○第二幕○

つん TUN つん TUN

「わかつたからつつくなよ！
何だよ？」

ばちん！ばちん！
ウインクきめえ。

「いや、全然わかんねえから」

「……………」

ムカツク。

なんだよ、その

『何こいつ？んなこともわかんねえのかよ、ちっ』
『見たいな顔は。』

「ちゃんと言葉で言えよ」

「耳貸すしゃく」

「お前の口臭いからそこで言え」

すると美鶴は俺にずずいっと近づいてきて

「消しゴムしゃく」

一言放った。

「……………は？」

「け・し・ゴ・ム・しゃくつー!」

「そこおー!!またかあー!!」

「しゃくつー!？」

「僕は違っんです！」

僕は!」

また怒られた>>。

○第三幕○

つつつつつつつつ

イラって来た。

「いい加減やめろよ！消しゴムだろ！？」

消しゴム出せばいいんだろ！？ちょっと待ってる！！」

あの野朗……マジでむかついた。

「ほれ」

「わーいしゃく！」

「……………ん？」

> i 1 7 2 0 3 — 2 3 4 0 <

「何しゃくつ！？

これはっ！？」

「うつせえー……お前が悪いんだよ」

つつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ
つつ

「先生ー！

灼場山君が勉強の邪魔をしまーす」

「しゃくつー！？」

END
つづくかもー

しゃくでば！ アゴとなみおと（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

かつ飛ばしていきましたが大丈夫でしょうか（何が

本編読まなくとも分かるように話は構成してありますが……。
読まれたほうが面白いと思われます（推測です

では、ありがとうございます！

「パンツ見せるしゃくー!」

ああ、今日も美鶴の野郎が猛威を奮ってやがる。

なんていうか、もう大丈夫とかそんな問題じゃないと思い始めた。

「ほれほれー!

しゃくー!」

いつもならここでシエラかメイナが美鶴をぶち殺すのだが

あいにく今日は二人とも今流行のインフルエンザでダウンしている。

なんか代わりの人物が来るとか言っていたが、こいつを止めれるのはお前らぐらいだろ常識的に考えて。

「ペロリンしゃくー!」

しゃくふふふうふふ!」

うっは、ウゼエ。

く上空二万メートルく

「うん、一目でわかりました。

アレがキモくてウザくてアゴがとんがりコーンで存在自体がセクハラ以外の何者でもない

妖怪モドキ——ですか。

シエラ姉様に消せと言われても仕方ないですね……」

少女はそういつてスクリーンをチラ見した。

「これ以上見たらおかしくなりそうなので面倒ですが私が消し去ります」

く地上く

「今日はむかつく二人もないし、僕の時代しゃくう」

「おい、その辺でやめておいたほうが……」

「うるさいしゃく!!」

僕の邪魔をするなしゃく!!」

いらつ。

「おー！」

楽しそうなことやってるデッパねえく!!

俺も混ぜるデッパ!!」

げえ、出刃先輩!?

美鶴と双壁をなす(いい意味で)人物が来やがったかつ!!
そうこのお方は出刃^{ではたける}猛。

美鶴と(以下略

「さあ、スカートしゃくうく」

「でっぱっぱぱぱ!!」(不憫すぎる笑い声)

「ターゲット二人を攻撃軸線に捕捉。

自動光学追尾装置にリンク開始……完了。

下部三番砲台に超光エネルギーの移行を開始』

「ピンクしゃくうー!!!」

「キャー!!」

「おおー、でつぱあー!!」

だめだ、こいつら早く何とかしないと。

『光波共震砲発射体制に移行。

機関停止、自動照準装置起動。

目標への精密計測開始。

右六八・二五度、俯角四八・一九五度。自動照準装置にリンク完了。

発射装置オールグリーン、超光エネルギー充填率八十%……八十
二%』

「今日はブルーしゃくねえ!?!」

「いい色、センスでつぱ!」

「しくしくしく……」

女の子泣いてるし……。

いくらなんでもやりすぎじゃ……。

『九十……九十二……九十四……

最終安全装置解除。

超光エネルギー第三砲塔第一、第二砲身への移行を開始』

「スカートをめくるのが男の本能しゃくう!!」

いや、それを仁王立ちで言うなよ。
仁王に失礼だろ。

『消え去ってください』

「次にいくs……………」

その光景はすさまじいものだった。
上からオレンジの光りが降ってきたと思ったら美鶴と出刃先輩が吹き飛んだ。

「しゃくしゃいきーん!!」

アンパン野郎にやられたバイキン男みたいな悲鳴をあげて。
うん、文字通り跡形も無く。

自分でも何を言っているのか意味が分からないんだが……。
ん?なんか暗いな。

空を見上げた俺の目が点になるのが自分でもわかった。
でっかい、戦艦が浮いていた。

赤い色に塗られた艦底。

下しか見えないがとにかくすごい数の砲台が並んでいる。

かぞえきれねえし、ハリネズミだぜ、あれ。

ふっと頬に風を感じ頭を下げると俺の目の前には十四歳ほどの女の子が立ってた。

きゃしゃでくりつとした青い目。

少し赤みを帯びたほつぺた、茶色の腰まである長い髪。

中学校二年生に見えるほど幼い顔立ち。

びつくりした。

ってか何者だよこいつ。

身長低いし。

パツと見百四五センチぐらいだ。

「ターゲットの破壊を確認しました」

いや、お前誰だよ。

「あなたが永久波音君ですね、はじめまして。

私は空月・N・「蒼。詳しくは↓<http://unsungtwilight.blogspot.fc2.com/blog-entry-225.html>

蒼とよんでください」

> i 1 7 2 0 6 — 2 3 4 0 <

「シエラが言っていたのはこの人だったのか」

なるほどな。

「まだだ……まだ終わってないしゃ……く……」

パチン！（蒼が指を鳴らした音）

ズギャア！！（レーザーが降ってきて美鶴が再び消し飛んだ音）

蒼が俺に微笑む。

につこりと、無垢で無邪気な笑顔で。

こいつには勝てねえなあと思わされた瞬間だった。

〈後日談〉

「ま……だ終わってない……………し……………」

パチン！

ドガガガガガ！！！！！！

びゅー（地下から水が噴出してきた）

シエラよりもこいつ鬼かもしれないねえ……

「でっp……………」

ズガン！！

容赦なさすぎるだろ、おい。

ってか、コレって「しゃくでは！」なのか？
大丈夫、ちゃんと続くよっ！！

美鶴復活完了した様子だ。

「僕は……………僕達は……………こんなガキに負けてられないんしゃくううう
うううう……………！！！！」

「（カチーン）」

ああ、蒼からなにやらオーラが……。

だがそれに勝るほどのオーラが美鶴からにじみ出ているだど！？

「出刃先輩、僕は……僕はまだ戦えるしゃくっ！……！」

「ではあ……！」

「全国のスカートメクラーに届けるしゃくっ！……この思いをつ……！」

「そして全国のパンツ好きに届けるデッパ……！」

俺達の……熱きこの魂……！血潮……！

そして後世に伝えるデッパ……！

俺達のこの終焉の世を駆けめぐった戦記を……！」

（元ネタ不明）

いや、それらは届けちゃ駄目だろ。

「僕は……しゃくでばしゃくっ……！」

二人合わせてしゃくでばしゃくっ……！」

意味分かん。

「しゃくでば究極奥技……！」

東にミニスカがあればめくりいいいい……！」

「西にビキニがあれば網膜に焼きつけええ……！」

(翌日)

生徒指導部の先生、桐梨が出席表を読み上げる。

「灼場山」。

「ん？今日も休みか？」

俺の隣の席は今日も空いたままだ。

シエラやメイナがどこかと自らの教科書などをおいて植民地化しているが……。

「そうか、コレだったんだね。」

あいつの価値は……。」

シエラが美鶴の机をぽんと叩いて言う。

そんな子供を慰めるような目で言わないでください。

一方蒼の方と言えば……

「詩乃姉様、テレビ見てもいい？」

「んー？全然構わんよー」

『いきなり出てきてゴメン♪
まことにスイマメン♪』

「あ、まだこの芸人いたんだ……」

「いたねえ、こんなやつも。」

もうほとんどみないけどねえ。

あ、ご飯だぞそろそろ。

テレビ消しな、蒼」

「はい、詩乃姉様っ！」

詩乃の家に住まわせてもらっているようだ。

なぜか蒼は詩乃によくなついている。

なぜなんだろうな、不思議。

妹的存在が出来た詩乃もまんざらではない様子。

ほほえましいぞ、この野郎っ！

蒼の頭を詩乃がなでなでしてにつこりと蒼が嬉しそうに笑うところとか超絵になるしな。

二人の笑顔がまぶしいのである。

俺も妹的存在が欲しいといえば欲しいが

さすがに家の真上に戦艦がこられては迷惑だな、うん。

詩乃の寛大さに拍手！

オマケとして美鶴も見ておこうか。

「……………」

ピクッ……ピクッ……

絶対安静状態らしい。

ちなみに出刃先輩も隣でピクピクしている。

結果は見てのとおり、HENTAI×HENTAIの完敗。

あなおそろしや、蒼よ……。

まあ、こればしゃくでは！なんだなあ。

そうだ、これぞいつものしゃくでは！だ、と実感しながら

俺は臭い保健のおっさんの授業中に眠りについた。

END つづくかも

P・S

！マークが多いのは仕様ですっ！！！！↑こらw

本編にも出ていない、新キャラ。

空月・N・蒼です。

彼女、可愛いでしょ？

正直一番好きなキャラです。

（個人的にですが）

それではありがとうございました。
しーゆーねくすとふらいでーい！

しゃくでば！ けーたいでんわ

「波音！波音！！」

つつつつつつつつ！！

まあたつついてきやがる、アゴで。
うぜえ！。

「ツてえな！！」

だからなんだよそのつつき方は！！
やめろって言ってるんだろぅが！！」

「しゃくぅ……」

「んな顔すんなよ、きもいッから。
で、何？」

疲れる。

「フッフッフ……しゃくぅ……」

うぜえー！ーっ。

「さっさと言えよ、うっとおしい」

「じゃじゃあゝん！」

そういうと美鶴はポッケから四角い何かを取り出した。
何だアレ？

「携帯しゃくよく、波音遅れてるしゃくう」

「携帯つて……ブツ!!」

「しゃく?」

「ブハハハハ!! な、なんだよその携帯!!
いまだきアンテナがついてるとかお前は明治かってえの!!」

「何しゃく? 何もおかしくないしゃく!! しかも!!
これにはカメラがついてるんしゃくよ!! すごいしゃく!!!! あ
りえないしゃく!!」

「ナハハハハハ!! はっ、腹がツ!!」

「何しゃく? 信じられないしゃく?
だったら証拠見せてやるしゃくよ!!?
ためしにシエラとか蒼とかを……」

あーまたこのオチか。
しかしいまだにこんなもの売ってんだなあ。
アンテナですって、奥さん。
まあー古いわねえ。

「おっ!
あの娘きやわいいしゃくう」

パシャッ!!

「おっ！！

あの娘もしかくよ?」

パシャッ！！

「あのメガネもいいしゃくねえ〜!」

パシャパシャ！！

とりまくる美鶴。

狂ったように。

それはもうなんと言えいいのか。

カメラを持って白鳥の舞でも披露しているみたいだっただぜ。

「お、おいそろそろやめておいたほうが……
って、聞いてねえ。

目がハートマークだ、新しいなその表情」

パシャパシャパシャパシャ！！

ん、あの制服は……。

俺逃げとこつと。

「しゃく?

おまわりさんしゃく。

今日もお仕事ごくらうさま」

「君、ちよつと署まで来てくれるかね?

その女子高校生から通報があつたんだ」

「しゃく!?!しゃくつ!?!?

波音、助け……っていないしゃくよお！……！

じゃああああああつあああ！……！！

〈第二幕〉

「というわけでしゃくほうされたしゃく……！」

変なところ強調するな。

ギャグだとしても全然面白くない。

「と、いうわけでメールしようしゃく……！！」

どういうわけだよ。

嫌だよ、めんどくせえ。

ありえないぐらいにめんどくせえ。

「なにがというわけなのかは知らんがメールなんてしたくねえ。
メール返すのだりいんだよ」

「じゃあ一応メアドって言うのだけでも交換するしゃくよ？」

.....。

あ、いいこと思いついた。

「あー！

やっべえ、やっべえー！

俺携帯わすれたわー！ー！

あっはっは、すまん！ーじゃまた明日な！ー！」

よし。

「.....」

う.....。

なんだろ、この目つき。

いやだ、怖いわ。

「持つてるしゃくね.....。

尻ポケット.....」

びくつ。

「いただきしゃくつ！」

「ちょ、おま！ー！

取るなよ！ー！」

パパピピパピパピパピ！ー！

「超はええー！

何だこいつは！？

まさか一晩でマスターしたというのかよ!？」

ってかかせえええ!!

「完了しゃく」

ああ……。

最悪だ。

おめでとう!

波音は美鶴のメアド・電話番号を入手した!!

体力が五十下がった!!

やる気が一万二千下がった!!

鬱が百二十上がった!!

「チャンスXしゃくっ!!」が身についた!!

そして――

こんばんわしゃく」

波音は元気しゃく?

僕は元気しゃくよお。

じゃばいばいしゃく」。

(+うざい&カラーで動く顔文字)

こんなメールが一日に五十通も送られてくるのである。

着信拒否が効かない、しかも。

正直死にたい。

受信フォルダがこいつのメールで一杯だ。

ってか、メールでも語尾に「しゃく」「つけるのかよ……」。

つづくかも

しゃくでば！ けーたいでんわ（後書き）

ありがとうございました。

全国的美鶴さんすいません。

正直もっとうんことがそういつ名前にしとけばよかったと思ってます。

しゃくでば！ 独眼龍は伊達じゃねえよ

ある日の午後お、一人の少年の断末魔がこだまする。

「ぎにゝゃあゝあゝあゝあゝ ああああ！……！
じゃぐふつううつうつ………」

まーたやってるよ。
こりないねえ。

「うう……
最近のシエラはやりすぎしゃくう……。
どうにかできないしゃくか………」

お前が行動を自重すれば言いだけの話なんだがな。
一生懸命に考えていた美鶴の頭の上に！マークが浮かぶ。

「そうしゃく！
シエラを洗脳して僕に服従させればいいんしゃく！
そうすればもう僕に暴力をふるわなくなるし
あわよくば……ふふふ……しゃくう………」

あの顔きめえ。
一体全体何を考えたらそんな顔になるんだ。

「ぐへへへ……
しゃくうううつ………」

だらだらだと何か顎から出てるし。

『説明しよう！』

この液体は美鶴汁と言って、美鶴の顎の先端部から興奮時に放出されるのである！

あと臭い！かなり臭い！！』

「よーし！

さっそくあの人にシエラを洗脳する方法を聞くしゃくよ！！
きつと何かを知っているしゃく！！」

〓〓翌日〓〓

「と、いうわけでシエラを洗脳する方法を教えて欲しいしゃく」

美鶴が頼み込むその相手は……

「（えーと、それって本人の僕に聞いてもいいものなのかなあ……。

あ、いいこと思いついた。）

ずばり、好感度だね！

好感度をMAXにして彼女にして油断している隙にああん……

となるワケ！」

ああんの所詳しく頼んでもいいですかね？

つと、いかんいかん。

このままでは美鶴と同じ思考回路だ。

それだけは控えねばっ！

「なーるほどしゃくつ！

流石シエラしゃくううう！！……ん？

シエラにシエラ……？」

「ほら！はやく好感度上げないと！

とりあえずジュースでも買ってきんしゃい！！」

「わ、わかったしゃく！」

・ ・ ・ ・ ・

「買ってきたしゃく！」

「こんなクソ暑い日にお汁粉なんて飲めるかああ！！」

ゴッ！（ジュースが美鶴の顎に衝突した音）

「ひでぶつ！！しゃくつ！！」

教室にすげえ響いたな今の音。

見ている側としてもかなりシュールな感じだったぞ。

・ ・ ・

・

「買ってきたしゃく!」

「よしチャントミンティアサイダー期間限定うすしお味だな。
好感度×0.1%UPだ!」

下がってる、下がってる。

かなりすごい勢いで下がってるそれ。

「わーい!しゃく!」

うは、気がつけよ。

「次!

靴磨き!」

「はいしゃく!」

それを見ていた俺——波音は親友の仁に話しかける。

「なあ、仁……」

あれどっ思っよ?」

「犬」

「だよなあ」

やっぱりそうだな、うん。

わんころ美鶴だな。

『宿題丸写し!』

『代わりに掃除!』

『三回回ってワン!』

『ハトのモノマネ! (元。山総理乙)』

『桐梨(生徒指導部所属)になれなれしく接する!』

「お前……灼場山……後で生徒指導室こいやああ……!
その脳みそに刻み込んでやる……
真の規則つてもんをなあああ!……!」

「ひiiiiiiiiii!!
しゃあああああくううう!!……!」

『堂々と男子トイレの個室を使う!』

『校長室に入って校長に「はげざまあwww」と言っ
て帰る!』

『女子更衣室に乱入!』

「きゃあああああ!……!」

おー女子の悲鳴だ。

また美鶴何かしたんだろうな。

アホだな。

真性のアホだな。

直しようが無いほどのアホだな。

「ちっ……違うんしゃく!!」

「コレにはワケがのぶおッ!!」

誰だよ。

のぶお？

そして警察へ。

「僕は無実しゃくうううううう!!!!!!!!!!」

「あー楽しかった。

やっぱりこやって楽しむのは大切だね」

満面の笑みを浮かべるシエラ。

「お前……」

それはやりすぎなんじゃ……と思うが反論することが出来ない俺がいた。

だって美鶴だし？

！

つづけええええええ！！！！
だめにきまってるだろうがああ！！

しゃくでは！ 独眼龍は伊達じゃねえよ（後書き）

メリークリスマス！

聖なる夜にこんなもん見せてすいません！

美鶴なぐつてさっぱりしてください！

それでは！

しゃくでば！ 君の顔になにかついてるとってやらない脂でてかっててきもいか

ある日俺はシエラに良いことを教えてやった。
ウィキ。ディアで駄洒落と調べてみると。
そこで見つけたものが案外面白かったらしく

「明日学校で試す！」

とって笑顔になっていた。

最高の笑顔だった。

マジで最高の笑顔だった。

そして次の日の一年D組。

シエラがつかつかと美鶴につめよった。

「な、何しゃく？」

ぼ、ぼ、僕は何もしてないしゃくよ！？

女子のスカートもまだめくってないし縦笛に泥をつけたり
事故を装って胸をもんだり……

ま、まだそんなことはしてないしゃくよ！？」

「私の縦笛に泥を塗ったのはてめえだったのかあ！！」

メイナが切れた。

（しばらくお待ちください）

「ぎゃあああ！！」

痛いしゃくうふあああああ！！

あ”あ”あああああ！！！！」

(しばらくお待ちください)(汗)

「この野郎っ!!」

死ね、おら、ボケ!! 蛆虫!!」

(重ね重ねお待ちください)

「ひ、ひどいしゃく……」

「もう二度とするなよ、この障害が」

「うう……」

(OKです)

「で、シエラは僕に何の用しゃく?

あ、もしかして奴隷にしてほしいしゃく?

なら全然いいしゃくよぉ!!

あふふしゃくふふふうふ~~~~!

さあ、さっそく僕をあが……」

「君の顔なんかいもみたい」

!?

ざわ……ざわ……

クラス中に動揺が広がった。

「ぼ、僕の顔を何回も見たいしゃくか!?

シエラが僕にそんなことを言ってくれるなんて……

僕は今、人生で最高潮の嬉しさしゃく!!」

「君の顔なんかいもみたい」

「ああ、心に響くようしゃく〜！
ときめくしゃく〜！

へっへー、僕はリア充しゃく〜!!」

「君の顔なんかいもみたい」

「けへへー

もっと言って欲しいしゃくよ〜〜！
ほれほれ〜〜!!」

「君の顔……」

壊れたレコーダーかお前は。

わざと声のトーン変えてないだろ。

ようやくメイナがココで気がついたようだ。

「ねえ、波音、これって……」

「ああ、お前の思ってるとおりだ」

〈解説〉

×「君の顔何回も見たい」

○「君の顔なんか芋みたい」

以上、かなりIQが高い問題でした。
正解者はいるかな？

「な、なあ、美鶴……
ちよつと聞くでつぱ」

出刃先輩乙。

眞実を伝えてやってくれ。

「何しゃくう！？

非リア充の出刃先輩？」

僕は今最高の幸せを噛み締めてるんしゃくよ？
邪魔をしないでほしいしゃくふううう」

きめえ顔だ。

「くっ……

た、正しくは君の顔なんか芋みたい……じゃないでつぱ？」

「そ、そんなわけないしゃく！

さてはねたんでいるんしゃくね！？

そんな嫌な男だとは思わなかったしゃく！！

ね、シエラ？」

「出刃君正解だ。

誰がてめえのきたねえ顔を何回も見たがるんだよ、ボケ」

「そ、そんな……しゃく」

絶望の美鶴の背中はずかしく見えた。
あやしゅうがどよと漂っている。

「ははっ！さつまいも美鶴ってわけね。
シエラがそんなこと言うわけナイト思ったよ！」

メイナが美鶴の心をえぐるようにせせら笑う。

「うわああんしゃくうう！！
シエラの馬鹿しゃくっ！！！！」

美鶴がシエラに殴りかかった！

「僕の必殺技をくらうしゃく！！
トルネードアゴリアルクロス　グゲア”ア”――！！！！
ア”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”……」

今日も良い天気だなあ。
お、カラス。

アホーアホー

つづくかも

ギリギリギリ……

「言えよ……言ってみろよオ
トルネードアゴリアルクロス……何だってえ？」

「クロ……シュ……マテ……リア……ルガン……」

メキッ！

「あうううううん……じゃくう……」

つづくかも

しゃくでば！ 君の顔になにかついてるとってやらない脂でてかっててきもいか

あけましておめでとつございます！

本年もこのアホな作品をよろしくお願いします。

ん・・・？

あれ？

明けてない？

しゃくでば！ 隠密機動部隊（笑）

「そうしゃく！

シエラの暴力をやめさせるかつ僕のしもべにさせる方法を思いついたしゃく！

しゃくふふふう〜〜。

シエラの部屋に侵入して奴の弱みを握ってやるしゃく〜〜）
↑
エロ同人誌の見すぎ）」

……はじまつたか。

・ ・ ・

P L L P L L

「こちら美鶴しゃく！

出刃先輩、聞えてるしゃく？」

「ああ、ばつちりでつぱ！

そつちの状況は常にこつちの世界地図でマークしてるから大丈夫でつぱ！」

「よし、早速侵入しゃく〜」

そろりそろりとドアを開ける美鶴。
バイオかよ、こええよ。

「お前のやることは一つ。
その部屋から某最終兵器シエラ・F・Dの弱みを握ることだつぱ。
まず左スティックで移動、それから――」

ゲームかよ。

「ふむふむ、なるほどしゃく〜」

うなずいている場合かよ。
後ろ、後ろ！

「貴様あ……
こんな所で長々と何をしてる……？」

ラスボス出てきたー！
ゲーム初版なのにラスボス出てきたー！

「！」

「鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬかどちらか選べ侵入者」
シエラの究極の選択！

「しゃああああああ………」

0・2秒後時間切れにより美鶴死亡。

せめて選ぶ時間ぐらい与えてやれよ……。

つづくかもー

つづきますー

「蒼……僕は疲れたから今日は任せて良いか？」

「はい、分かりました、シエラ姉様」

いつのまにやらそばに立っていた蒼にバトンタッチしたシエラ。
ゆっくり休んでくれよな。

「ちよおま！

待つしゃくよー！！

僕はシエラと戦う（？）ために来たのに何で蒼が出て来るしゃくか！？」

首をかしげて考える蒼。

しばらく考えて出した答えは

「大自然の摂理……ですかね」

超不確定的要素じゃねえか。

でもよかつたな美鶴！

ラスボスから一つ繰り下がったぞ！
シエラとあまり大差はないけど！

「あなたの死に場所はココです！
ココです、ここなんですっ！」

「しゃうううう！？」

「一瞬で終わります、耐えないほうが身のためですよ……？」

「ひ、ひとまず逃げるしゃくっ……！」

逃げられない……

「今死んでください！
すぐに死んでください！
骨まで碎けてくださいっ！」

ドズギヤ！！ザジュ！！ズガガガ！！！！

あ、屋根……。

屋根壊すなよ……。

穴から見える超空要塞戦艦。
美鶴を見事に射抜く光の矢。

「じゃあ”ああ”ああ！！
痛い、痛いじゃぐうううっ！！」

「死ぬのか！！」

ズゴッ！

「消えるのか！！」

ガゴギッ！！

「土下座してまで生き延びるのかっ！！
選んでくださいっ！！！！」

「——ッ！！！！」

美鶴は体中に風穴を作って倒れた。
不思議なことに血は出なかった。
これもギャグがなしえる業なのか……。

「き、今日の……あ、蒼……はシ……エラ並に……よ……う……し
やが……な……い……し……く」

「どうしたんですか……？
シエラ姉様の弱みを握るんじゃないかなかったですか……？」

腕を組んでため息を出す、超空要塞戦艦少女——空月・N・蒼。
実際彼女暇してたらしい。
その暇つぶしになると喜んでいたのだが思っていた以上に手ごたえ
がなかったようだ。

「き、聞いてたしゃくっ！？
くっならば死んでもらうしかないしゃくっ！！！！」

どこから取り出したのか美鶴の右腕にはRPGがつ！
噴煙を残して美鶴の痛恨の一撃が蒼へと向かう！

「……邪魔です」

空から降ってきた機銃の赤い矢がRPGの弾頭をぶち抜き爆発させる！

なんだあの命中率。

そして部屋の中がめちゃくちゃだよ、もう！

「うわああもう駄目しゃくつー！！」

せめてレーション（食い物、超まずい）で体力回復を――」

ごそごそとポケットを探る美鶴。

「アイテムなんて使うんじゃないですー！！」

あ、阻止された。

「しゃくうつ！？」

「アイテム使うなんて人間……いや屑の中の屑ですね。

光波共震機銃発射準備……

出力320%——目標指定、五秒後に攻撃開始。

自動追尾装置にセット完了——発射！」

ネメシエルの下部から火を吹いた沢山の機銃が美鶴に突き刺さりまくった。

顎に穴が開く、開く、開く。

見てるこっちが痛い。

「しゃくううううづづづ……」

GAME OVER

「美鶴、どうしたでっば!？」

応答するでっば!!

美鶴!!美鶴うううづづ……」

・ ・ ・

「うわぁ、死にたくないしゃくつ!!」

何やってんだ、あいつ。

桐梨の社会の時間に立ち上がるなよ。

授業中だったのに大声で叫びやがって……。

「……………」

生徒全員が美鶴に痛い視線を送る。

「……………」

桐梨が美鶴に自分の授業を邪魔された怒りと憎しみの視線を送る。

「あれ……夢だったしゃく……？
よかったしゃく……」

「よくないな。」

さあ、これから悪夢の始まりだ」

がっちりと桐梨に腕を掴まれる美鶴。

「しゃくっ!？」

「さあ、生徒指導室に行こうか……？
みんなは自習な。」

灼場山は今から……ふふっ……」

しゃあああああああ~~~~~

つづくかもー

しゃくでば！ 隠密機動部隊（笑）（後書き）

改めてあけましておめでとうございます。

今年もどうかよろしくお願い申し上げます。

さて、どうでしょうか、この元ねたお分かりになったお方いらっしゃるでしょうか？

メタルギアなんですが・・・どうでしょうか？

それでは、よんでいただきありがとうございます。

しゃくでば！ お見舞い日和

桐梨が言う。

「灼場山々？

あ今日はインフルエンザで休みか。

てめえらクソガキも気をつけるよ〜？」

ああ、あいつ休みか。

今日は良い日になりそうだな。

シエラがこれ以上ない満面の笑みを浮かべているよ。
幸せなんだな、俺もだ。

（帰宅後）

「あーあ。

この時間おもしれえ番組やってねえなあ。
最近TVカスばかりだ」

番組表をぺらぺらめくりながら呟く。

『止めて、恋の抑止力！（コール音）』

「ん？メールか……。

げっ、美鶴からかよ！？」

液晶には『顎』と書かれた差出人の名称が。

《お見舞いにくるしゃく！》

何で命令形なんだよ。

ってかお見舞いは命令されていくもんじゃないだろ。
そしてめんどくさいからヤダ。

「だが、断る……っと」

はい送信。

『止めて、恋の抑止力！（コール音）』

《もういいしゃくもん！
ぶうーだ！》

だから可愛くないって。
ってかいつもより素直で安心した。
インフルエンザすげえ。

「あつ、今日は

『探偵ミチコ 妻強奪殺人事件 〽血塗られた婚姻届〽』がやる
日じゃん！

絶対に見なきゃ！！」

俺が今面白くない番組ばっか、TVカスって言ったそばからシエラが
どう考えてもドロドロな気配の番組を見ようと思いついたようだ。
やめとけて。

「おおっと、私のズウンビ無双？タイムの邪魔をする気なのかい？」
メイナがゲーム機を持って配線始めていた。

それをシエラが見て

「姉さんもうそれクリアしたじゃんか」

と一言。

「ナイフだけでやるのよ、ナイフだけで。
最高難易度エクセレントでやるのよ」

「でも僕はTVが……」

「やるっての？」

「ええ、いいぞ？
かかってこいよ、プロトタイプ」

「ばっ、馬鹿にしたわね!？」

最終兵器が意外な事で喧嘩してるぞ。
でもこの二人が喧嘩すると地球がやばいからこの辺で止めておくか。

「おいおいお前ら……。
んなことでいちいち喧嘩するなよ……」

ガチャ……。
ギイイイイイ……。

「!？」

俺達三人の頭の上にビクリマークとなんかうねうねマークが浮か

ぶ。

クオーテンションマークだっけ、忘れた。

ヒタッヒタッヒタッ……。

「お、お見舞いされにきたしゃくうつう……。
じゅるるっ……ずずーっ！

ウヴェックシャッ！ーしゃくう……」

俺達三人ポカーンとしているしか出来なかった。

・ ・ ・

「えっといいか？

それお見舞いもクソもないんだぞ？

ただ単にウィルスばら撒きに来ただけなんだぞ？

犯罪なんだぞ？

バイオテロなんだぞ？

分かる？意味分かるかな？」

「じゅるっ！じゅるるっ！！

う”う”……げほっ……。

ちよっと何言ってるのかわからないじゃくう……」

今俺日本語で言っただよな？

全部日本語だったよな？

「嫌しゃくっ！！

僕はお見舞いしてもらうつまで帰らないしゃくつ!!」

「はぁ……」

シエラが両腕を前に組んでため息をつく。

美鶴がぶるぶると鼻水などを飛ばしながら顔を振る。

「うわっ！ちよっと!!鼻水とか唾飛ばさないでよ!!
移ったらどうするつもりなの!？」

メイナが目の前にイージスを張ってガードする。

俺にはしてくれなかった。

唾液がメイナをそして後ろの壁を直撃する。

イージスは物体の軌道を逸らして自分を守るといふ盾なんだが
後でそこを消毒しなきゃいけないだろ、手間を増やすな。

「ってかお前さ……」。

お見舞いってどういう意味か分かってるわけ？」

俺は半ば呆れながら美鶴に尋ねる。

「もちろんのもちもちろんしゃくつ!!」

きやうわいいおにゃのこが特盛りのフルーツを持ってきてずうー
っと

つきつきりで看病してくれるんしゃくつ♪

つういどうにい♪

熱を出すために僕の（ああんっ……／／／）を（ああんっ……／
／／）して

さらには（ああんっ……／／／）で（ああんっ……／／／）され

ちゃって

拳句のはてには（ああんっ……／＼／＼の（ああんっ……／＼／
して（ああんっ……／＼／＼）

なーんてことをしてもらうんしゃくう、
じゆるるっ……ずずーっ……しゃくう……」

念のためにモザイク↓（ああんっ……／＼／＼）をかけておきました。
ね、モザイク↓（ああんっ……／＼／＼）の部分に何か言葉を入れて
ね。

美鶴にきもいことを言わせて見るって遊びもできると思っからね。
暇だと思う人は一度やってみるといいと思っぜ。

両腕を前に組んでそれを聞いていたシエラ。

いい加減に我慢ができなくなったらしく……

「ねえ波音……」。

僕もう限界なんけれど」

再びため息交じりでこう呟いた。

「ああ……やっちゃっていいぞ。

手袋ちゃんとつけてアルコール消毒しろよ？」

（しばらくお待ちください）

「やめてしゃくー！

お願いしゃグシャッ

「僕は病人しゃメシヨ

「じゃぐっ！！ドゴッ

シエラの鉄槌が美鶴を射抜く。

「二度とくんない！」

俺達は三人で美鶴のケツを蹴って家から追い出した。
めでたしだな。

i n u e s .

T h i s s t o r y c o n t

しゃくでは！ お見舞い日和（後書き）

いいですか、バイオテロだけは駄目ですよ＜＜
リアルバイオハザードですからね。

インフルエンザにかかった場合はおとなしくお家で寝ていてください。

そして早く治してたくさん遊んでください。

以上です！

しゃくでば！ お見舞い日和後日談

キンコーンカーンコーン……

「顎が休んで今日で七日目か……」

シエラが空の実鶴の机を肘を付いてみながらぼやく。

「もつとながびかねえかな……」

平和な日々すばらしいし。

人の不幸を祈っているのもどうかと思うがそれぐらい美鶴はうぜえ。
ぼーっと教室のドアを眺めるとガラツと勢いよくドアが放たれ
例の細長い顎を持つシユルエットが入ってきた。

「あー来ちまったか……」

・
・
・

なんだか今日の実鶴はとっても不機嫌の様子。

鞆を机に放り投げた後おれの席の上に……

そう机の上にだぜ？

机の上にう。こ座り——もといヤンキー座り（本人は少なくともそのつもりらしい）。

もうアホかと、馬鹿かと。

なんなのかと、死ぬのかと。

そして独り言を言うように呟く。

「あー……インフルエンザだったしゃくう……。誰かさんがお見舞いに来てくれればもおっと早くもおっつと早く治ったかもしれないんしゃくがねえ……。」

キツ（笑）！！と俺達をにらみつける美鶴。
やめろ。

リアルで怖いからってかシエラ寝てるよ？
てか何でにらむんだよ。

悪いのは明らかにそっちだっただろ？と言いたかったが
美鶴が言えない、いや言わせない空気をかもし出していた。
早く俺の机からどけ。

あーもう後で薄く切ってもらおう、シエラに。

「あーあの時誰かさんが優しく看病でもしてくれれば
もうすうぐに治ったかもしれないしゃくがねえ。ま
あ誰かとはあえていわないしゃくけどお。」

といいながらメイナに顔をぐりぐりと押し付ける美鶴。

「あう……近い、近い……」

メイナはかろうじてノートでガードしている。
誰がどう見てもセクハラだろ、これ。

そして美鶴はそんな最終兵器の片割れを見て調子に乗ったのか

「おい起きろしゃく」

ガンッ！

あのシエラの机を――。

シエラが寝ているのにもかかわらずに下から上へと蹴り上げたのだ。

「痛っ!？」

な……何？」

そして二人の目が合う。

「お前も悪いんしゃくよ？」

いやいつつちばんつ悪いしゃく!!

か弱い病人を殴ったり蹴ったり……。

少しは人情つてもんがないんしゃくか!？」

大体お前はいつもいつも――」

ガッ!!

美鶴の襟首を掴むシエラ。

にっこり笑った顔が怖い。

「あのね……ここじゃちよつとアレだからね……？」

屋上で話そ？ね？いいよね？」

オーラが……。

物凄い殺気をまとったオーラが……。

シエラから……シエラから……。

そのオーラを読み取れないKY（もはや死語）美鶴。
強気でシエラに挑みかかる。

「はあ!？」

今すぐココで土下座して僕の下僕にゲボアッ!!

「え？

ホント？いいの！？やった♪ホラ！早く行こう！」

ずるずるずるずる……。

あー美鶴死んだな。

ここから先は皆さんの思ったとおりさ。

「あまり調子にのってつと俺のレーザーでてめえのケツにファックしてやるぞ？

ああ！？」

「しゃくっ……」

しゃあああああああああああああああ………

END つづくかもー

しゃくでは！ お見舞い日和後日談（後書き）

ありがとうございました。

もし、今宵、「皆様の夢の中に美鶴が出てきたら
ぼこぼこにしてあげるとよろしいですよ。

美鶴もきつと喜びます。

しゃくでは！ ちよつとエツチなしゃくでは

「しゃくふふふう〜♪しゃくふふふう〜♪」

ゴキンッ！！

「頼むから静かにしてくれ……」

シエラが美鶴を殴った後頭を抑える。

「だってしゃく〜♪待ちきれないんしゃくよあ〜♪」

殴られた痛みを感じないほど興奮してんのか。
この馬鹿は。

「何が？」

シエラが覚悟を決めたように美鶴に話しかける。
早く黙って欲しくてたまらないようだ。

「もうこのしゃくでは！もネットに公開されているしゃくね！
ということはもうすぐエロ同人誌が出てもおかしくないはずしゃく〜♪」

「でるわけないでしょ……」。

全然有名じゃないんだしさ……」

「出るしゃくっ！！絶対！！！！コレまでの作品でエロ同人誌が出なかった作品はないんしゃくっ！！！！」

「人の話聞け……」

「というわけで!!」

エロ同人誌を描く人が困らないようにカップリングを決めておく
しゃくうっ」

そんなもん描く人の自由だろうが。

ちなみに今回俺——波音の順番はないようだ。
な、泣いてなんかいないんだからなっ!!

「というわけでシエラ!!!!」

するとシエラは死ぬ直前のヒロインが主人公に優しく……
優しく話しかけるような笑みで

「僕が良いっていうと思う……?」

「もちろんのろんしゃ——」

「ねえよ!!!!」

「ひひひひひひひひひひ!!」

しゃくつうつうつう!!!!!!!!!!

美鶴大脱走。

・ ・ ・

・

「メイナー……！」

「……何よ？」

「（省略）というわけなんしゃく……！
お願いしゃ——」

「チッ」

「……しゃく……？」

「……」

「……しゃ……」

「……」

沈黙が痛い。

「……と、とりあえず……
逃げるしゃく……！」

「詩乃……！」

「なんだよ、うつせえなあ、クソ顎」

詩乃怖い。

「お願いしゃくううつう！……！」

「っていうか……私まだ十四歳なんですけど……」

ロリコンだな。

これでOKとかいったら完璧なまでにロリコンだな。

「全然OKしゃくよ……！」

ちよつと今から来て欲しいしゃくううつう！……！」

「分かりましたよー。」

だるいですが仕方ないですねえ……」

え………。

ま、まじで………？

蒼や……こんな奴にやられていいのか………？

「しゃくつゝしゃくつゝ」

うぜえ。

ん………？

空が暗い………というか………紫の光が………。

「しゃくつ？

おー！！蒼ー！！こっちしゃ——」

バキバキバキッ！……！！

ズズズグシャッ！……！！……！！……！！

うわっ!?

校舎がつ!!!

ネメシエルが校舎の上に降りてきて美鶴がつ!!

美鶴がつ!!

「じゃ」

しゃああああ すら言えずに終わった!!

美鶴が二千五百万トンの重さの戦艦に潰されて終わった!!
久しぶりじゃないか、このすがすがしい終わり方。

「こちらベルカ第一超空制圧艦隊旗艦ネメシエル所属の蒼中将です。
作戦完了。

ターゲットの削除に成功しました。

これより帰還します」

こうして今回も無事に平和が守られたのであった。

—— アフターストーリー ——

「エロ同人誌でたぞーお前の」

お、俺の出番あった!

それはおいといて俺の右手の先で異様なオーラを出している一冊の本がある。

「やったしゃくっ!!!早くみせるしゃくっ!!!」

・

「出刃先輩とのBL同人誌だ」

「しかも顎超美形……」

シエラとメイナが笑いをこらえながらパラパラと同人誌をめくる。

「つまりはお前の容貌を誰も認めてないってことだな」

俺のとどめの言葉。

「うううう……」。

しゃあ嗚呼アアアああああああああああ……！！！！
「！！！！」

END つづくかも

←ちなみに美鶴はこんな感じです。

> i 1 7 3 9 1 — 2 3 4 0 <

しゃくでは！ ちょっとエツチなしゃくでは (後書き)

ありがとうございました。

美鶴はじめて顔を出しますかね。

どうです？

とんがっているでしょう？

ふふふつ。

しゃくでば！ スコーンで頭をスコーン

「あー、数学の時間はあいからわずねみいなあ……」

うつらうつらと睡魔と格闘する今日この頃。

隣の実鶴は既に睡魔に完敗している。

「しかも下敷き敷いて寝るなよ。

……なんか俺の机への橋みたいになってるし……。

気味が悪いったらありやしない」

しかしこのとき永久波音はさらに気味の悪いことに遭遇することになるとは……。

このときまだ誰も気がついていなかった。

「しゃくううん……」

でろでろでろ……

「うつげ……よだれたらしてやがる……。

ん？よだれが下敷きを伝って……」

俺の机に領海侵犯。

「——ッ！……！！！」（声にならない声）

そしてことごとく美鶴のよだれに侵食される俺の教科書たち。

「て……てんめえ……」

怒りをこめたシャーペンで美鶴の顎におもつきりブツ刺した。

「んにいいいいいいいいいしゃあああつ!!!!!!!!!!」

• • •

「えー？僕が悪いんしゃくう……？」

余計に腹がたつ。

「わかったしゃくよう……んもう……」

80

唾液を……

——ッ！！

「ホラ、これでいいしゃくね」

仕上げにペロペロと俺の机と教科書とノートを舐め回す美鶴。

「おい、シエラ。

俺の机うすく切ってくれ」

「え？

ここで兵器の力使っていいの？」

「非常事態だ。

早くしろ」

「わかったよ……ってこの机臭い！

何があつたの！？」

「このクソおろかでう。こな馬鹿顎のせいだよ」

「またお前か。

つてう”……」

目は半分白目。

口はポカーン。

そしてよだれがだらあり。

R18規制の実鶴の顔がそこにあつた。

「今切るよ。」

薄くね」

シエラの右腕が光の刀になり机をうすーく切断する。

「よし、この切れ端で目を覚ましてやるしよつ。

お前の罪はこの板ですべて裁いてやる!」

スコーン!!

「じゃぐつ!!」

殴ってやった。

角で。

微妙に丸いこの角で。

すると

「もうゝいたいなあ。

何するんだよ、波音」

「「しゃくじゃなくなつた!?!」」

あ、俺とシエラ被つた。

「んぐう……」

そしてまた眠りやがった。

ワレリアヌス。

好奇心って大事だと思うんだ。

だ・か・らもう一回殴ってみた。

スコーン!!

「SHAW!!」

変な鳴き声。

「……つてえなあ。

おい波音、俺がお前に何かしたか？
つてしたなあーすまんな！」

「「性格まで変わってる!？」」

また被った。

もう一回……ぐらいいいよね？

スコーン!!

「痛いではないかでござるか!!」

はいイミフ。

スコーン!!

「やっぱり痛いにやあー……」

きめえ。

スコーン!!

「その辺にしときなあ!!」

傭兵みたいでなんかイイ。

スコーン!!

「……………」

無言の実鶴も……………また……………。
ふむ。

スコーン!!

「……………」

スコーン!!

「……………」

スコーン!!

もうやめて!!

美鶴のライフはゼロよっ!!!!

T
S
U

D
U

K
U
?

しゃくでば！ スコーンで頭をスコーン（後書き）

ありがとうございました。

今回美鶴ちよつとばかりキモかったですね。

なぐっていいですよ、許可します！
それでは

しゃくでは！ ぼーやーよいこだねんねしな〜♪

「うう〜ん……」

駄目だ。

眠れない。

夕方コーヒーを飲みすぎたのがいけなかったのか？
何度寝返りをうっても

ゴロンゴロンゴロンゴロンゴロンゴロン……

ガチャッ

「うるさい」

扉が半開きになってシエラが顔をのぞかせた。

「き、聞えてたのかよ。」

……寝れないんだよ、仕方ないだろう？」

「え？そうなの？なら僕が一肌脱いであげるよ（性的な意味ではない）

とりあえず電気消すよ」

「へ？」

疑問に思っている俺を横目に電気をパチッと消すシエラ。
そしてシエラは俺の枕元の隣で何か囁いた。

「ジェットストリーム……」

「へ？」

「ジェットストリーム……」

まさかこの展開は……。

「ジェットストリーム……キイイイイン……」

チャラーチャラチャラー」

遠い地平線が消えて深々とした夜の闇に心を休めるとき……。

はるか雲海の上を音も無く……」

飛び起きた。

「なんでジェットストリームなんだよ！」

（ジェットストリームって何？と思った方はFMラジオで夜の十二時になるまでお待ちください。

ニコニコなどで探してみたのですがなかったので……。
すいません。）

「こら波音、おとなしく寝てなさい！」

「あ、すまん。」

なんかツツコミ癖が付いてしまつてな。

あの美鶴のせいで……。・・（ノム）……。・・」

「はるか雲海の（中略）皆様の夜間飛行のお相手のパイロットは私、F・D・シエラです」

はいよく出来ました。

「えーとどれにしようかな……」

そして流すCDをあさるシエラ。
ちゃんと眠気を誘うのを頼む。

ピッ！

『Help!! Help!! (ビートルズのアレ)』

「あ、間違えた」

「寝れるかあああああああああああああつ！……！……！……！」

・
・
・

「やっぱり絵本だよ、絵本！！」

絵本読むの聞いていれば寝れるはず……！」

「じ、じゃあ頼むぜ？」

「任せろb(ぐっ」

ああ女の子(最終兵器だけど)に絵本を読んでもらいながら寝れるなんて……。

結構幸せ者なんだなあ、俺。

「むかーしむかし、あるところにシンデレラという少女がいました」
シンデレラか。
なつかしいなあ……。

「（中略）」

この中にガラスの靴をはける人はおりませんか？
すると長女が『あたしよ、あたし！』といいながら勢いよくガラスの靴をはきました。

しかしかかが入りません。

『ちよつと待ってください』とお母さん。

長女をつれて奥へ……。

『あんたはガラスの靴をはいてあの王子と結婚するんだよ！
そんなかかと切り落としちまいな！』

ザシュッ……。

『ぎゃああああああっ！！』

「おいちよつと色々と待てや」

「えー？」

「ココから良い所なのにー！」

「大体それシンデレラじゃねエだろうが！！
何？『本当は怖いグリム童話』ですか？」

「僕はこういうほうが寝れるかとおもつて、お前に合わせるなああ

「ああああ！！！！」

・ ・ ・

「ゲームしてやる！」

「あーそれバイオ……」

「ぎゃあああああつ！！！」

・ ・ ・

「DVDだ、DVD！！！」

「バカ殿が入ってるよ」

「余計に寝れんわ！」

・ ・ ・

「運動してつかれて寝てやる！」

「そーれえいつ！」

「バキッ！」

「ちょ……そこ……ちが……。」

関節……か……か……バキッて……イッタヨ……」

・ ・ ・

チュンチュン……チチチ……

「あ……朝だ……」

「朝だね……」

「なんか良い感じに眠気が……」

「ぼ、僕も……」

ガクッ……。

——あふたーすとーりー——

「二人とも？」

今日は学校なんだけど……」

「今日は休む……」

「僕も……」

「な、何があつたの？」

部屋といい……目の下の隈といい……」

メイナ意味が分からず混乱。

つぶつぶ

しゃくでば！ ぼーやーよいこだねんねしな〜 ♪（後書き）

ありがとうございました。

ジェットストリームしってるお方いますか？

夜十二時からやるラジオなのですが・・・。

分からなかったらごめんなさい。

それでは

しゃくでば！ 羞恥心 〱 鬼灯家の場合〱

『太郎さん……わたし……妊娠しちゃってるの……』

『嘘よっ！！』

このクソ尼！！いつ私の太郎さんを……』

こういうのは俺苦手なんだがな……。

ナレーションとして一応の役目だけは果たしておかないと。

「やっぱりローマの夜よりこういうドロドロした昼ドラがいいですよねー」

蒼がテレビをつつきながら隣にいる詩乃に笑顔で振り向く。

「ああ、イケメンだけじゃさっぱり売れないからなー」

詩乃はポッキー片手にマンガを読破中。

周りにベルリンの壁のようにマンガがつまれている。

「というか詩乃姉様、この部屋冷房効いてくないですか……？」

「そういえば何か暑いなあって思ってたんだよね。

壊れてんのかなあ……？」

そして詩乃はヴィンヴィン怪しい音を上げているエアコンの元へと近づいた。

しかし……

「あづいじゃぐう〜……」

もうこの語尾で分かるだろう。
そう我らが美鶴である。

「わわっ！！どうしてここにいるんですか！？」

「おっと、ストップ蒼落ち着け。

ネメシエルの砲台をこの部屋に向けるのだけはやめろ」

「——ッ！

うっかりしてました……」

窓の外には『超空要塞戦艦ネメシエル』の莫大な数の砲門がこちらをにらみつけていた。

蒼……お前……もしかして力制御できてないのか？

そんなことはどうでもいいとして

蒼の隣にいきなりテレポーテーションしてきたかのように美鶴がいた。

「どうしてって前回僕の出番がなかったからしゃく！！
全然なかったからしゃく！！」

「もしかして、前回と全然かけました？」

「違うしゃくよ！！もう！！

それはさておき、もう僕は決めたんしゃく。

無理にでも登場して出番を増やしてやるしゃく！！」

美鶴は唾を飛ばして猛主張。

顔がウザイ。

「こんな出番に必死な主人公見たことないですよ……」

「出て行けって言っても無理しゃくよっ!!
意地でも出て行かないしゃくっ!!」

ぶんぶんしゃくつとか言いながらドスンと部屋の真ん中に胡坐をかいて座る顎。

「あー……こりゃ修理屋呼ばないとだめかなあ……。
蒼ー、電話しといてくれる?」

「あ、はい」

とことこと電話のところに歩いていく。
その後ろに

「大体この作品の主人公は僕なんしゃくよ?
僕を出さないほうがそもそもこの作品に対する冒涇だとおもっん
しゃくよ!」

あとお前らガードが固すぎなんしゃく!!
少しはパンチラだのブラだの読者サービスを……」

「ちょっと!!」「しゃくっ!?!」

「電話するから静かにしててくださいませんか?」

「あ……はいしゃく」

あまりの迫力に押し黙ってしまった。
珍しいな。

「あ、すいません。

えあーこんでんしよな？の修理を頼みたいんですが……」

エアークンディショナーっていえないんだな、蒼。

まあ仕方ないっちゃ仕方ないか。

戦艦として生きてきたんだもんな。（ほろり）

「……………」

「はい、はい、分かりました」

「……………しゃくつ……………」

「ああ、それで構わないです。

はい、ではお願いしまーす」

ガチャツ。

蒼が電話機を静かにおいた瞬間再び美鶴が口をしゃくしゃくと開いた。

「終わったしゃく？

なら続きを——」

意気揚々としている美鶴を蹴り上げるかのようにしゃべろつとする
美鶴を無視して

蒼はポッキーをかじっている詩乃の元へ全速前進。

「詩乃姉様、修理の人が来るまで一時間はかかるそうですよー…」

「あちゃー困ったな。」

これは最終兵器の扇風機を使うしかないみたいだね」

「あ、私取って来ますね♪」

「え？いいの？

じゃあよろしく頼むわ。

場所は……」

「な、何か気まづくなってきたしゃくう……。
で、でも！

僕はそれでもめげないしゃくよおー！」

そして鼻歌を歌っている蒼の元へと駆けた。

・
・
・

「えーっと、この下の……」

「そもそも主人公というものは作品の中で中心的存在で……」

「あーあった！」

ごそごそしている蒼に後ろから話しかけているが華麗にスルーされている。

「毎回必ず登場していなくてはいけないものなんしゃくよ!」

それはちよつと違うんじゃないかなろうか。

「ちよつと!」

そこ邪魔です!」

蒼が右手を鉄砲の形にして美鶴に向けると壁に小さな穴を開けて赤いレーザーが美鶴の額をぶち抜いた。

「じゃがつ!」

でこからぴゅーと血を吹いてどさつと倒れる。

「まったくもうッ……」

そして扇風機をもって押入れを後にする蒼を見て美鶴は額にバツテンの絆創膏を貼りながら考えた。

「なんだか……すごいむなしいし恥ずかしいし気まづくなってきたしゃくう……」

そして脳裏によみがえる彼女の言葉。

『ちよつと!』

そこ邪魔です!』

「うう……うううう……」

しやあああああああああ………

たっ たっ たっ たっ (走り去る音)

ちゅぢゅきゅかも

しゃくでは！ 羞恥心 〱 鬼灯家の場合〱（後書き）

別に続きません（キリッ

ご愛読感謝感謝です。

ありがとうございました。

しゃくでば！ 羞恥心 〱 永久家の場合〱

「あゝ、メイナ。

ご飯お代わりよろしく」

「はい」

「おゝさんきゅ」

ここ俺、永久家ではいつもどおりの夕食をとっていた。
肉を頬張り、TVを眺める。

「僕もお代わりしゃくっ！」

「ブフオ！？」

いつもどおりじゃなかった。

美鶴だよ……おいおいおいおいおいおいおい。

「な……なんで……ゲホッ！

お前が……ゲホゲホッ！！

ここにいるんだってゲフホアッ！」

水！

水！！

「僕、この頃出番がないしゃく……。
だからっ……！」

バンッと机を叩く。

「ちよつと！」

机叩かないでよ！

壊れやすいんだから」

シエラが美鶴を睨みつける。

「あ、ごめんしゃく……じゃなくてっ！！

僕は決めたんしゃくっ！！

無理にでも登場して出番を増やしてやるしゃくッ！！」

「……………は？」

何言ってるんだこいつ。

「とめても無駄しゃくよ？

僕のこの硬い硬い決心は誰にもまけないしゃくっ！！」

「……………は？」

マジで大丈夫かこいつ。

それにそんなこと言ってるってシエラ辺りが……。

『フ。タクくん、どうだいい、今夜あ？

や・ら・な・い・か？』

『ええっ！？

ア。ゴクーン？

そ……それはボクに妻子がいることを知っていてのことかい！？』

「ナハハハハッ！！！」

「っておい！」

美鶴を追い出すなり蹴りだすなりぶっ飛ばすなり
レーザーで蒲焼にするなりなんかしろよ！」

「もう、僕今日疲れちった」

「ホラホラ、波音も一緒に見ようよ！」

サ。エさんVSA。ゴさんだよ！！！」

What?

なんだよそれ最近のサ。エさんおかしくね？

『マ。オさんは……渡さないっ！！』

『フハハハハハ！！おもしろおい！！』

何秒間耐えられるか数えてやるおう………』

『サ。エスパーク！！』 『ぬうるいわああああ！！！！！！』

「「おおおおおお！！」

最終兵器姉妹の趣味がだんだん分からなくなってきた。
というかココまで突っ込みどころ満載だと
逆にどこから突っ込めば良いのか分からない。
俺もう突っ込み放棄してもいいだろうか。

「あ、あのーしゃく……」

『ぶるあああああああ！！！』

『これが……愛の力よっ！！』

「あー！今週のサ。エさんも面白かったー！」

メイナが目には涙をためながら欠伸をして伸びる。

「終わったしやく？

なら話を――」

「あ！そだ！

お隣の田所さんからとうもろこし御裾分けしてもらったんだ」

「ごそごそと倉庫から沢山のとうもろこしを引っ張り出してきて新聞紙を「ごそごそする。

「え？まじ？」

とうもろこしかあ。

久方だな。

「わー」

はやく蒸かそうよ！」

メイナの目が既にとうもろこしな件。

「（くっ……今回はそうは行かないしやくっ！！

奴らの行動に溶け込んでやるしやくッ！！）」

とうもろこしは醤油をつけて焼くのが定番だ。
まあ蒸かしてもいいんだが。
甘いしうまい。

最高だよな、とうもろこし。

「僕も欲しいしゃくー」

「……………は？
ないよ？」

シエラの声つめたっ！

「……………え？しゃく……………」

「当たり前じゃん。」

これは僕と姉さんと波音にくれたものなんだから。
部外者であるお前にはなくて当然」

「しゃ……………しゃ……………」

お。

泣くぞ、泣くぞ。

しゃあああああああ……………

タッタッタツ……………

ってかこの落ち久しぶりだな。
やっぱりこの落ち最高。

「ホント綺麗に涙流れるねえ……」

メイナ、とうもろこしはまだ焼けてないぞ。
置け。

「あふたーすとーりー」

「あ、一個あまった」

「あ、私はいないから」

シエラのとうもろこしをじっと見つめる俺。

「…………やるか？」

マンガの悪役のような顔をして捨て台詞を吐く。

「……………いいよ？」

バカめ、承諾したときがお前の運のつきだ。

「「せーのっ！」

「じゃんけん！ー！」

「ぼん！ー！」

「ひゃあああ!!」

「負けたああっ!!」

「僕がっ……負けたッ……!」

「ノリが悪かったなあ……(キラーン)」

「うう……なんでチヨキなんて出したんだろう……」

『来週もまた見てくださいねー♪
じゃん!けん!ぽん!!!』

「あ、波音!

「サ。エさんに勝ったからそれ僕の!!」

「なんでそうなる!!」

『うふふふふふ♪』

「シエラとサ。エさんの声が重なって……」

「こえええよっ!!」

続くかも

しゃくでば！ 羞恥心 〱 永久家の場合〱（後書き）

あじゃしたー！

いやねえ。

ご飯中にどうなの、美鶴って。

頭痛くなるわ、ほんと。

なんだろうな、あいつは。

しゃくでは！ は？至高はブルマだろ」K

ふと疑問に思ふ。

「お前って体操服もってんのか？」

「フッ！

持ってるしゃくよ？」

えっ。

「な、なんだ。

いつものその変な紳士服着てるから持っていないかと思ったぜ。
次は都合よく体育だし」

えっと三時間目……。

うん体育だ。

だりいなあおい。

「ちなみにしゃく。

この紳士服は僕のポウリスイーしゃくっ……！」

「るっさい……！」

唾こつちに飛ばすな、カス！」

おお、レーザーが頭を正確に射抜いたぞ。
流石だな、シエラ。

「死ぬ……しゃく……」

「人として死んどけ」

・ ・ ・

ピン！

「ヤバイ、なんだこの気配は。
波音気をつけて！」

俺の前に右腕を張るシエラ。
なんだ、何があるってんだ？

「シエラ落ち着け。
なんだ、何があるんだ？」

「あ……この方向はグラウンド……。
次の波音達の体育の場所だ」

なん……だと？

「は？

んな所にヤバイ気配のやつが？」

「大丈夫。

あなたは死なないわ。
僕が守るもの」

「それ本物に言われてみたかったわ」

ペチィン！

「いっつつっ！」

背中に完璧に跡できたはず……。
赤い跡が……。

・ ・ ・

「！？

人が倒れてる！？

おい！！大丈夫か！！」

シエラと玄関で別れたのはいいとして
一人になった瞬間とつても不安になってきた。
あーやだなー。

ネメシエルとかあつたらそれに乗りたい気分だ。
そう思いながら倒れている男子生徒に駆け寄る。

「おい！

しっかりしろ！！

おいっ！！」

「あ……ああ……」

声かすれてるじゃんよー。

なんなんだよー。

「……すまねえ……。」

俺はもう……ここまでのようだ……」

おう。

「いや、いやあんた初対面ですよね？
同じクラスだとしても」

「くっ……娘に……人目だけでも……。
あ、会いたかつ……た……ガハッ……！」

「いや、あんた高校生だしその歳で子供いたら問題だよ！
ってか何血い吐いてんだよ……！」

持ち前のつつこみ気質が……。

「ヤツは……やべえ。
に、人間を……超越……してやがっ……ハアハア……るぜっ……！」

「何？」

そんなにやばいの？」

「腕がなるぜえ……」

うわっシエラいつのまに湧き出てきた。
気がつかなかったぞい。

「愛国者……は……らりるれ……る……」

わけわからん。
特に最後。

最後の言葉を娘にするべきだったんとちゃいまっか。

「とりあえず行けば分かるでしょ！
ほら行くよ！」

「胃が……重い……」

・ ・ ・

「な……！？
あれは……？」

そうヤバイ気配……。
その中心に美鶴が立っていた。
体操服の姿で。
体操服の姿で。
体操服の姿で！？

「ってその体操服は違っだろおおおお！！！！」

そう美鶴の体操服は学校のものではない。
美鶴の半袖のシャツには『1-D 灼場山』と書かれており
下半身はブルマで『1-D みつる』と書かれていた。

「あかん。」

もう突っ込みきれん。

シエラ！

なんとかならな……」

振り向いた俺は目を疑った。

俺の脳はおかしくなっちゃったというのか。

なんとシエラの頭から湯気とパイプのポッポという音が出ていた。そしてそのままの姿勢で……。

「ガガガ………初期化を実行しています………」

ボタン。

「Nooooooooo!!」

シメ役が倒れたあああ!?

ってか美鶴!!

なんだよ、その変態的コスプレ!!

キモ男の女装を超えてるぞ!!!!」

「何しゃく!!」

これは僕のポリシーしゃくつ!!

それに見ろしゃくつ!!

こいつらは僕の魅力に耐え切れずに倒れたしゃくツ!!
どうしゃく?

これが僕の力なんしゃくよお?」

ガンジーでも助走つけて蹴りいれるレベル。

きめえの領域を超えている。

そうだな。

牛乳とオレンジジュース混ぜるだろ?

そしたら玉が出来るんだ。
それなんでか知ってるか？
それは牛乳の蛋白質が……。

「波音聞いてるしゃく？」

牛乳の蛋白質が……。

「波音？」

おーいしゃくっ！

ほれほれ、ブルマしゃくよ？」

ぎ、牛乳の……。

「波音も僕の魅力に耐え切れずに倒れるしゃくかあ？
そのおにゃのこのように？」

ぎ、ぎゅ……。

チッ（舌打ち）

「今回ばかりはもう無理。
俺限界」

「しゃく？」

「行くぞ？」

お祈りは終わったか？」

「しゃくっ……！」

何するしゃ……………」

しゃあああああああああ……………」

「よっわっ！」

俺、五秒でパーフェクト勝利。

続くかもー

しゃくでは！ は？至高はブルマだろJK（後書き）

お食事中の方がいらっしゃったらごめんなさい。
ええ、本当に。

ね、気持ち悪いのをお見せしてしまいましたね。
愛国者はらりるれろは某ステルスゲームです。
金属の歯車さんです。

それでは、どうもありがとうございました。

しゃくでば！ れっつにゃんにゃん大作戦！

とある日の放課後……。

「シエラッ！！

コレをよく見るしゃくっ！！」

美鶴が手にコインを持ってまたまた仁王立ちをしていた。

「ん？」

もすもすとパンをかじっていたシエラが仕方無しに美鶴を見る。
そのシエラをドヤ顔で見下ろした後

ピーン……、くるくる……、パシッ！！

「裏しゃく？

表しゃく？」

拳を突き出してふんぬと鼻息を吐いた。

「表」

再びもすもすとパンをかじりだすシエラに一言。
お前今見てなかっただろ、やる気ないだろ。

「ざあんねえんでしたっ♪

裏しゃああくっ♪」

「わかったからその دونالد がキチガイになったみたいなの顔やめて」

「しゃくう……」

うわ落ち込んだ。

こいつも落ち込むのか。

・ ・ ・

「とゆーわけで、シエラには罰げえむをつけてもらっしゃくう」

何この立ち直りの早さ。

→では・三つで表してたけど目の前だと約2秒で立ち直ったからな、こいつ。

「はあ？」

「今から語尾に じゃあをつけるしゃくう」
さっそくスタートしゃくうっ」

うわーひくわーみたいな顔をしてかじり終えたパンのゴミを放り投げる。

そのままため息を一つついて

「あ……あー……やればいいんだろ？」

やれば……【じゃあ】」

!??

教室が静まり返った。

「おい……いま猫の鳴き声しなかったか？」

同級生が次第に騒ぎ始める。

「えー！？どこどこ！？」

「学校の中に入ってきたんじゃないか？」

俺猫アレルギーだから意味ないけど」

「探そ探そ！」

ねこちゃーん」

「おい、波音！」

手伝えよ、探すの」

「眠いから却下」

こいつ……こんなに猫の鳴き声うまかったのか？

俺も目の前にシエラがいなかったら完璧に同級生と一緒に探してるぞ、猫。

「んんんもうっ！！！」

そんなんじゃないしゃくよっ！！

今から僕がお手本みせたるしゃくっ！！」

すると美鶴はポケットから猫耳を取り出しつけた。
猫のような座り方をした後

「んにゃ〜んしゃくうんにゃあ〜んしゃくう」
ご主人様あ私に何か出来ることはありますかにゃあしゃくう？
にゃあんしゃくう
あつ、そ、そんなところ触っちゃだめですにゃあしゃくう」
あ……あんしゃ（ピーーーーーー）
（ピーーーーーー）
（ピーーーーーー）」

おうふつ。

ナレーターの俺でもこれは無理逃げる。
じゃ！

「どうしゃく？

これがお手本しゃくつ！！

さあシエラも……」

和気藹々として振り返った美鶴の目には誰一人いない教室が残っていた。

みんなさつさと帰ったようだ。（一部トイレ）

しかも教室の隅には哀愁漂うBGMを流しているラジカセが……。誰かがセットしたようだ。

このクラスの奴ら段々分かってきたな。

「ううっ……ううう……しゃくつ……しゃくううう……。

うう……ううう……」

えーと、とりあえずこれ以上続けても何もなさそうなので……。

つづくかも

バリッ（紙が破れた音）

「まだおわってないしゃくつ！！」

まだオチてないしゃくつ！！！！」

しつけえwww

十分にオチついてる。

大丈夫、心配するな。

「とにかく……今回は何とかしてこの僕がこの話をオチさせてやるしゃくつ！！」

まだ無駄なことを……。

「うゝん……しゃくう……」

手を組んで目をつぶって考え始める美鶴。
無駄だろ、絶対に。

・ ・ ・

（二十分後）

「んぐおおおお……」

もしもし。

「ハッ!!」

ね、寝てなんてないしゃくよっ!!
今ひらめいたしゃくっ!!」

ほう……なら見せてもらうか？

「了解しゃくっ!!」

アンテナ付き携帯を取り出して通話ボタンを押した。

P L L …… P L L …… P L L ……

「蒼ー！実はつづくかもー（強制終了）

「ん……？」

今何か聞えたような……」

しゃくでば！ れっつにゃんにゃん大作戦！（後書き）

なあボブ、教えてくれよ

HAHAHAどうしたんだい、ねしゃ君

どうして美鶴はこうきもいんだい？

HAHAHAHAそんなことも分からないのかい？

そうなんだ、分からないんだ。

俺もしらねエよ。

ですよね。

ありがとうございます。

しゃくでば！ 家族っていいね、いいねっ！！

「波音」！

いっしょに帰ろうしゃくー」

だりい。

「だが断る。

悪いな」

鞆を持ち上げさっさと帰る——もとい逃げる準備をする俺。
その俺の後ろでなにやら金属音が……。

「？」

なんだ、なんかどこからか悲しい音楽が……。

『あーああーるーるーるー』

「しゃくしゃくしゃくしゃく……」

な、泣いてる……。

泣いてるぞ、美鶴が。

仕方ねエな。

「だー！分かった、分かった。

一緒に帰るから教室の隅で哀愁誘う曲流しながら体操座りで落ち込むなっ！

ようは一緒に帰ればいいんだろう？

分かった、帰る、帰るよ
「

「ホントしゃくっ!？」

わーいしゃくっ」

わーいしゃくっ」

うぜえ……。

・
・
・

「……………」

視線を感じる。

「……………しゃく……………」

「……………」

「……………しゃくっ……………」

「な、何見てんだよ……………」

熱い（暑い？）視線に耐えることが出来ずにとつとつ話しかけてしまっ俺。

なんと哀れな俺。

「うふっ」

しゃくっ」

ぞくつとした。

近年稀に見るぞくつとくるレベルMAXだ。

「ひいつ！」

声も漏れた。

これは仕方ないだろう。

「波音が隣にいてくれるだけでし・あ・わ・せしゃくつ」

帰りたい！！

マジで帰りたい！！

ダッシュさせろ、ダッシュで帰らせろ！！

かえってあいつらの顔が拝みたい！！

・ ・ ・

「おつ♪俺の家こつちだからな！じあなー♪」

やった！！

帰れる！！

この拷問的時間からようやく開放されるっ！！
きやつほうっ！！

がしっ。

「なん……だと？」

美鶴が俺の……。

俺の制服を掴んで……る……。うわああつ。

「僕の家に来るしゃくつ!!」

「は？何言つてんだ。

もう夕方だし宿題もしなきゃいk」

『るーるーあーあーああー』

「わかったわかった……」

何、俺何か悪いことしましたか神様。

昨日柿ピーのピリ辛の方のヤツだけくってピーナッツだけ残してシエラ半泣きにさせたからか？

・
・
・

「ついたしゃくつ!!」

あーうん。
なるほど。

河原に黄色い色が剥げ落ちたテントがそこにあった。
中をちらっと覗くと

「くさっ！

「コノヘヤニオウヨ!？」

美鶴汁の臭いだ。

美鶴汁って説明しましたよね、そういえば。

したっけ？

してないか。

仕方ない、説明しようかな。

美鶴汁ってのはな、あれだ。

分かるだろ？

何か美鶴が興奮すると顎からにゅるにゅると噴出される謎の液体Xだ。

分かる？

その臭いがするんだ、このテント。

つまり美鶴がこのテントで興奮してたってことに……。

「ってかなんだこのエロ本の山は……」

そこら辺に捨ててある昔のエロ本の山がそこにあつた。
どれもずいぶんぬれて……ん？

「そうか、美鶴汁は読みどおりこのためか。

ッておい、美鶴。

なんで布団二つも引いてるんだよ」

「今日は二人で泊まるしゃくっ」

は？

え……。

「い、いやだあああっ!?!?!」

俺は走った。

ひたすら走った。

待つしゃくつ!!とか聞えてきたけど無視した!

なんだよあいつ。

だんだんホモになってきてないか?

「友達つてのはお泊り会とかするもんじゃないんしゃくかあああああ
あ!？」

・ ・ ・

家のドアを思いっきりキックして転がり込んだ。
外れたドアを立て直して鍵をかける。

「はあ……はあ……」

夏というのもあつてか体中から汗が。

「あ、お帰りー波音。

どしたの?

汗だくだくでぜえぜえ言ってるし」

し、シエラだ。

我が家だ!

「お……おお……」

我が家だ。

家族だ……みんながいる……。

「やっぱり我が家は最高だよー！！
うえーん！！」

涙が出てきた。

シエラに抱きついた。

「ふえっ！？

ホント何があつたの！？

と、とりあえずよーしょーし……」

・ ・ ・

河原に焚き火の音が響く。

「今日も一人で焼き魚しゃくか……。
はあ……」

美鶴は魚の内臓を取らずにかじりついた。
ただ取り方が分からないかららしい。

「今日の魚はしょっぱいしゃくう……。
な、泣いてなんか……っ！
泣いてなんかいないんしゃくからねっ！……」

『あーあーあああゝ
♪

るーるーるーるーるーるー
♪
♩

つづくかも

しゃくでば！ 家族っていいね、いいねっ！！（後書き）

美鶴っ！

がんばれっ（ぐっ

ありがとうございました。

しゃくでば！ お誕生日

「三月二十六日は何の日かわかるしゃく？」

のんびりしたお昼休み。

美鶴が教壇の上でクラス全員に呼び掛けた。
クラス中が静まる。

「帝国憲法記念日？」

シエラがメロンパンの空き袋、ゴミ箱に
丸め捨てながら答えた。

「違うしゃくっ！」

「じゃああれ？」

あれでしょ、あれ」

「そうそう。

よく考えるしゃく」

三月二十六日って明日だよな？
何の日？

「海の日？」

「そんだけ考えてそれしゃくかあ！？
三月って言ってるしゃく！」

え、海の日違うのか。
じゃあわかんね。

「だああれもわからないしゃくかぁ!？」

ふんぬと鼻の穴を広げつつ美鶴はクラスを見下ろした。
知らんもんは知らんもん。

「仕方ない、答えしゃく……」。

三月二十六日。

326。

美鶴しゃく」

はあ。

「で?」

シエラはどーでもいいと言ったように
野菜ジュースをすすった。
俺はお茶でご飯を流し込んだ。

「つまり明日は僕の誕生日なんしゃくよ!」

はあ。

「……で?」

俺は美鶴に次を言うように促した。
どうぞ。

次、どうぞ。

「だから僕の家でお誕生日おめでとうパーティーを開くしゃくつ！是非来てほしいしゃくつ！特に波音は絶対に」

持ってたアリル特性お弁当を落としそうになった。
な、なんだってー！

クラス全員のドンマイという目衰れみの目が痛い。
名指しかよ。

「パーティーに参加するのは自由しゃく！
ただし条件があるしゃく！」

条件？

どーせろくでもないんだろ。
パンツ見せろとか。

美鶴がまともな条件を提示するわけがない。

「プレゼントを持って来てほしいしゃく！
波音はいいしゃくよ？」
いつもお世話になってるからしゃくつ！」

はあそりやありがとうね。
それに思った以上に当然の条件だった。
ほう。

いつに無く本気だというアピールか。

「明日は土曜日で学校は休み。
絶好のパーティー日和しゃく！
パーティーは夕方四時から始めるしゃくからそれまでに集まって

ほしいしゃくつ！
以上しゃくつ！」

・ ・ ・

「マジかよ……」

とぼとぼと坂道を歩いて帰る。

「ドンマイだねえ」

詩乃が笑いながら俺の背中を叩いた。

「なあ詩乃。

お前、行く？」

「面白そうだし行くこうかな」

詩乃はやりわり髪をいじりながら答えた。

「シエラとメイナは？」

俺と詩乃の後ろを歩く最終兵器姉妹に尋ねた。こいつらが行くわけ
ない。

わけない。

わけないよ。

「私達は行くことにするわ」

メイナが頷きながら答えた。

「え？」

なんだ聞き間違いか。
うん、きっとそうだ。

「シエラ行くの？」

「行く」

シエラがこくとメイナと同じように頷いた。
なんやねんもー！
いくんかい。

「わかった。

俺も覚悟決めた。
行くわ」

ため息のネタがまたひとつ増えた。

「なら私の家で会議だね」

詩乃が夕日に目を細目ながら言う。
何か企んでやがるなこいつ。

・ ・ ・

「蒼、ただいま」

詩乃が玄関で靴を脱ぎ捨てる。

「詩乃姉様！」

おかえりなさいっ！」

白いワンピースに身を包んだ蒼が詩乃に飛び付いた。
ワンコみたいで可愛い。

「ただいま、ただいま」

詩乃は蒼の頭を撫でながら俺達に

「入って入って」

そう言った。

「遠慮なく。」

邪魔するぜー」

綺麗に靴を脱いで居間まで歩く。

ドアを開けるとなんとまあ広い居間があった。

「皆さんお揃いでどうしたんですか？」

蒼が頭に？を浮かべながら聞いてくる。

とりあえず頭をなでなでしてこたつに入った。

「うー、やっぱりこれだねえ」

メイナはこたつで丸くなる。
猫かって。

ぱたぱたとキッチンから人数分の紅茶とお菓子を持って来た蒼にな
んで来たのか説明する。

「なるほど。」

つまり明日はクソ顎の誕生日なんですね」

「そそ」

少量の砂糖を入れ紅茶を啜る。
おいし。

「で、美鶴のプレゼントを考えるために集まったわけ」

シエラは紅茶の中にどばどば砂糖を突っ込みながら付け足した。
入れすぎだおまえ色変わってんじゃんほらもー。

「さって会議といきますか！」

詩乃はどこからかホワイトボードを引っ張り出してくるとマジック
ででかでかと

『美鶴をなんとしてでも喜ばしたる企画』

とでっかく書いた。

「スペースなくなね？」

「うん、私も今書いてから思った。
とにかく誕生日ぐらいはあ的美鶴といえど祝ったらなきや可哀想。
いつものスカート捲りとかの悪事は許して真剣にプレゼントを考えようと思う次第。
議長であり最終決定者、そして最高権力者は私鬼灯詩乃が承ります」

色々と総舐めすんな。
まあとりあえず俺はプレゼントいらしいからお前からでがんばって考えてくれたまえ。
俺は机に突っ伏した。
眠い。
ほつぺたを肘に乗せてだらけた姿勢で会議を眺める。

「喜ばす……ねえ。
私あんまりいい思い出ないんだよねえ……」

メイナが頭に手を押さえながらぼやく。
俺もない。

「で——」

お、議長にして最高権力者の意見か。

「——何から話す？」

ちよ、おま。
考えとけ。

「シエラ何か意見ない？」

「ぼ、僕！？

えーと……ない」

「メイナは？」

「ないわ」

「あ、蒼……」

「私……えーと……。
ごめんなさい姉様」

「……………」

難航してますな。

「は、波音！

あんたはないわけ！？」

「何で俺に降るんだよそこで。

えー？

プレゼントだろ？

喜ばすには美鶴の好きな物あげればいいんじゃない？
心を込めたもの渡せば美鶴も喜んでくれるだろ。
別に美鶴が好きなものじゃないとしても」

「ということだ。

各自行動開始！」

会議短つ！！

「美鶴の好きな物……。

エロ本？」

シエラ落ち着け、落ち着くんだ。
そっち方向に広げるのはまずい。

「私何にしようかなっ ♪」

メイナは案外余裕なんだな。
期待だ。

「カップヌードルとかでいいか」

ひでえ。

詩乃さんそれはひでえっす。

「ミサイル？」

蒼……。

お前もっ……。

なんていえばいいんだよ……。

この後俺達は詩乃の家に泊まりこみ
明日のプレゼントを考えたのであった。

ついでに愚痴らしてもらう。

俺寝るとき廊下だった。

寒い中毛布一枚しか貰えずいくら床暖房だからってひどすぎる。

「何か危なくない？」

メイナめえ……。

「あー確かに。

昔からの付き合いから考えると

こいつこんな顔して案外すけべえだからね」

詩乃も詩乃だ。

ひどい。

「蒼もいることだし。

波音ごめんね

今日は廊下で寝てね」

うううっ……。

これも美鶴のせいだっ！

・ ・ ・

（翌日午後四時）

「今日は集まってくれてありがとうしゃくっ！……」

マイクを握り小指を立てながら美鶴がはしゃぐ。

頭には変なキラキラした帽子を被ってるし

『俺が主演』と書いてあるたすきをかけている。
のりのりじゃな。

美鶴のお義母さんが

「皆プレゼントを持ってきてくれるし……。
本当にごめんなさいね、みなさん。
美鶴がわがまま言っただけで……」

俺達に頭を下げた。

「いえいえ。」

美鶴君の誕生日なので。

だいじょうぶですよ、おばさん」

「じゃあ私は引っこみます。」

美鶴をどうかよろしくお願いするわね」

「はい」

美鶴のお義母さんは目にきらりと嬉し涙を光らせながら部屋から出て行った。

「今日は……」

波音とシエラとメイナと詩乃と蒼と出刃先輩があつまってくれた
しゃくね!?

本当に本当にありがとうしゃくつ!!

早速プレゼントを開けようと思うしゃくつ!!」

美鶴は目の前に積まれた俺達のプレゼントに手を伸ばした。
俺達って言ったけど俺のは入ってないぞ。

「この赤色の箱は誰しゃく?」

「あ、それ僕だ」

「シエラしゃくか!!」

「うわぁありがとうしゃくつ!!」

美鶴は本当に満面の笑みでシエラのプレゼントのリボンを解いた。

「案外軽いしゃくねえ……」

「おーぶんざせさみーしゃくつ!!」

赤い箱が美鶴の手により開けられる。
中にはきらつと輝く……百円玉が……。

「な、なあんしゃくかこれ……」

「ん？」

「百円。」

「ジュースでも買つて」

美鶴の笑み率がぐんと下がった。

「百円つて……」

「だ、だいじょうぶしゃく！」

「まだたくさんプレゼントは残っているしゃくからね！
シエラありがとうしゃくつ！」

「次行くしゃくつ!!」

「別にいい、お礼なんて」

確かにお礼に値することなんてお前してないもんな、シエラさんや。
ちなみに俺が寝ている間に詩乃達はプレゼントを包んだみたいで
中身は一切知らないんだ。

だから俺も少しわくわくしてたりする。

美鶴はシエラからのプレゼントを横に奥と
白い長方形の箱に手を伸ばした。

「あ、それ私のだ」

メイナだ。

結構でかいな。

「おつ、重たいしゃくつ！

これは期待できそうしゃくつ！！

ではおーぶんざせさみーしゃくつ！！」

包み紙をビリビリと破り中をのぞく。

おお、ロールケーキか。

「うわあつ、おいしそうしゃくつ！！

メイナありがとうしゃくつ！！」

「メイナさん特製のスーパーあまあまロールケーキだよ。
賞味期限近いから早く食べてね」

おい今何つつた。

メイナさん『特製』って言わなかったか？

「め、メイナが作ったんしゃくか？」

「そうだよ？」

がんばったんだからちゃんと食べてね」

満面の笑み。

「そ、そうしゃく……か。」

あ、ありがとうしゃく……」

美鶴死亡のお知らせ。

メイナ、お前はそろそろ自分の料理が

殺人兵器だということを自覚したほうが良いかもしれない。

「つ、次は……」

「あ、私のだ」

紫の箱。

そこに綺麗な色のリボンが付いている。

「詩乃しゃくか！」

よかったしゃくつ……！」

「なにそれ、どういう意味？」

シエラが食いつく。

「い、いや深い意味は……」

とにかくおぶせさしゃくつ……！」

美鶴はわくわくした顔でリボンを解く。

そして箱の蓋を開けた。

「な……」

そして箱を見て絶句してしまった。

何何？

何が入ってたんだ？

俺は横から覗き見た。

「ぶふっ！」

草ってお前、石ってお前。

そして落ち込みまくる美鶴。

気の毒すぎてかける言葉が見つからない。

「美鶴が喜ぶかなーって。

悪意はないよ。」

いや嘘付け！

お前悪意の塊じゃねーかよこれ！！

「まあ美鶴落ち込むなでっば。

俺のプレゼントを開けてみるでっば」

出刃先輩ちーす。

久しぶりの出番おめでとうございます。

「せ、先輩っ——！

おーぶんざせさ——おおおおおおしゃく！……！……！……！」

「最高峰のものでっば。
喜んでもらえると嬉しいでっば」

美鶴が神々しい光とともにケバイピンクの箱から取り出したもの。
十八歳にならないと買えない薄くて高い本だ。

『堕ちた巨乳美人教師』

oh……。

「先輩……」

「美鶴……」

きらきらきらきらきら。
薔薇ぶわわっ。

「本当にありがとうしゃくっ……」

キラキラシャボン追加。

「全然いいでっば……」。

喜んでくれてうれしいでっば……」

あははうふふモード突入。

「蒼、見ちゃ駄目だからね」

目をつぶった詩乃が蒼の目を後ろから押さえる。
シエラとメイナも目と耳を塞いでいる。

俺も目をつぶりたいけど物語のナレーション的立ち居地だから見なきゃいけない。
誰か代われこるあ。

「先輩――！！」

大好きしゃくううううっ！！！！」

うつぶ、はきそう。

美鶴抱きつくし、先輩に。

先輩は先輩で美鶴受け入れるし。

もうやだこいつら二人。

もうプレゼントは全部か……ん？

「おい、美鶴後一個残ってるぞ」

あはつぶモードの美鶴を蹴っ飛ばして現実に引き戻す。

「本当しゃくね？

青色だし蒼からのプレゼントしゃくね」

腰を抑えながら美鶴は蒼のプレゼントに手をかけた。

「さ、開けるしゃくよ。

蒼ありがとうしゃく！」

「けっこう作るの大変でした。

大事にしてくださいね？」

詩乃に目を塞がれながら蒼が美鶴に言った。

「オイお前らもういいぞ」

「あ、終わった？」

「おう」

「いづくしゃくよーっ――」

「おぶせさっしゃくっ――！！」

「……………」

どしたの、美鶴。
固まって。

「あ、蒼何しゃくかコレ」

「何って…………」。

「見て分かりませんか？」

どら。

横から覗く。

「ほーいいじゃん、美鶴。」

「よかったじゃん」

「ずええんずえんよくないしゃくっ――！！
なんしゃくかこれええっ――！！」

美鶴は箱から蒼のプレゼントを引っ張り出すと
高々と掲げた。

「何って百万円程度たまる貯金箱ですよ。
ダンボールから作った」

「ちょ、貯金……。
しゃ……………」

しゃああああああああああ……………。

「さいころよりもこっちの方が良いと思ったんですが……………」

蒼、お前……。
でも手作りじゃん。
よかったな、美鶴。

「僕はもっと……………もっと……………」

しゃあああんしゃああああ……！！！！

とりあえずお誕生日おめでと美鶴。

つづくかも

しゃくでば！ お誕生日（後書き）

お誕生日おめでとです、美鶴。
いつもいちめてごめんね

しゃくでば！ ゆでたまごの点数

キーン、コーン、カーン、コーン……。

「こないだの中間査査の結果を配布する。

赤点（四十点以下）なぞ取る不届き者は生徒指導室に来るように」

そう、確かに担任の桐梨は美鶴を見ながら行っていた。
だが本人は……。

「……………」ボケー

だめだ、こいつ。

まったく次元が違ふところにいつてやがる。

「鈴木……杉田……高森……永久……」

桐梨から受け取ったテスト。

65というなんともいかめしい文字が……。

まあ赤点じゃないからよしとしようか。

ん、なんで美鶴あんなに喜んでるんだ？

「おい、美鶴、お前なんてんだつて！？」

「波音、波音ー！！

。がついてるしゃくよー！！」

ああ……名前の隣の。は……。

・
（数分後）

「しゃくしゃくしゃくしゃく……」

「おい、こいつ人間やめたの？」

大きく82と書かれた成績表を隠すそぶりも無く美鶴を指差すシエラは

心なしか唇の横にうつすらとした笑いを貼り付けている気がした。

「いや、普通に泣いてるんだろ？」

しくしくの所をしゃくしゃく言ってるだけで」

てかなんだよこのテンションのギャップ。

「何？」

テストで悪い点でも取ったの？

お前が泣くなんて珍しいこともあるもんだね。
見せてみな」

ほれと手を突き出すシエラに

「しゃくうん」

美鶴変な声で拒否。

「あー変な声出すな、きもいから」

おお！

紙だ、ただの。

「コレに覚えたいことを書き込んで食べればどんなことも覚えらるんだ！

（ボソツ）気持ちだけ」

「わーいしゃくー！！」

早速やってみるしゃくー！！」

おい、お前最後の一言聞えてなかったのか？

「しゃむしゃむしゃむしゃむ……」

「むしゃむしゃだろ……」

呆れて突っ込む気力もうせた。

・
・
・

（翌日）

ぎゅるる〜。

「ううう……おなか壊したしゃくうう……。
一体何がいけなかったんしゃくう？

Test Sierra paper……。

It was Anki Paper!!!!
AHHHHHHHHH!!!!

「いきなり英語しゃべりだした……」

効果は下痢にならないと分からないのね、きっと。

「も、もう駄目駄目しやく……。
トイレに……」

ソレをにやにや見ながら

「よかったね、トイレとお友達になれて」

ひづい、ひづもゆるよ、シヒル。

「じゃああああああ……」

ぎゅるるるう……。
ジャーゴボゴボ……。

ヒューロー

「おい、うんこしてるやつがいるぜ!」

「ギャハハハハ！！」

小学生かつての。

「おい、なんか騒がしくなってきたぞ？」

「ん？」

別にいいんじゃないの？

僕に被害はないわけだし」

「……とりあえず言っておこう。

平和だなー」

「おいっ！ー！

出て来いやゴラァ！ー！」

「ひいひいっ！ー！

やめてしゃくううつ……！ー！」

「おいっ、１０円貸せよ」

「ほらよ、汚すなよ？」

「おっし！ー！」

ガチャガチャ……。

「ひいっ！ー！

な、何してるしゃくつ……！ー？」

カチッ（鍵が開いた音）

ギィィィィィ………！

しやああああああああああああああ………

つづくかもー

しゃくでは！ ゆでたまごの点数（後書き）

どうもありがとうございました。

いやはやね。

ゆでたまごの点数ね。

ありますよ、僕も。

数学で。

ええ、あれは勘弁して欲しいです。

特にベクトルらへん。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

しゃくでば！ こんぱくとでいすく

「波音、波音！！」

つんつんと後ろから突付いてくる男。

正直言つて毎回の事ながら感情が高ぶるのは紛れもない事実。
触つて欲しくない。

「突付くなつて！

で、何？」

「付き合つてほしいしゃく」

……は？

……は？

……はあ？

「……………」

「んもう♪違うしゃくよぉん♪

「冗談しゃくうん♪」

こいつに冗談を言われるとバカにされた気になる。
というかバカにされてる。
絶対そうだ。

「ちょっと殴らせろ」

「しゃく？」

めきっ

・ ・ ・

「なんだよ、買い物かよ……。
それならそうと早く言えよな。
てつきり……まったく……」

「ひゃふう……」

美鶴が痛むであろう赤くはれたほっぺたを撫でながら鳴く。
バカにした代償だ。

「で、何買っただ？」

田舎の電気街は都会に比べでかい店が多数並ぶことが多い。
デカイ分、距離が小さいからすぐ出てしまっしなんていつでも品数
が少ない。

人も少ない。

人ごみが嫌いな俺には良い場所だと思う。

「しいでいってのが買って見たいしゃく……」

しいでい——CD？

は？

コンパクトディスク？

「今の時代は携帯小型オーディオプレイヤーじゃね？」

「何しゃく？
それ？」

ググレ、カス。

「あーもうお前と話すのが疲れる……。
まあCDはいいとして誰のCDなんだ？」

「今流行のあのアイドルしゃくよおん」

あまりテレビ見ないから分かん。
聞いたことがあるのはA○B48ぐらいである。
にしてもテンション高いな。
うざさに磨きがかかっている。

「ああ？
あー、A○B48か？」

多分これでFA。
ファイナルアンサーだろ。

「ちつがうしゃくよおん！！
もう！それいつの時代のアイドルしゃくかあ？」

なう。
現在です。
現在なう。

「波音は流行に疎いしやくね？」

しやくふふふうゝ　こ・た・えはあ

ミニ。ニしやくよおっ」

.....。

「ちよつと二、三発殴らせろ」

バキッ（ぐー）

パン（パー）

グサッ（ちよき）

「んきやああああっ！！

目があっ！！

目がしやくうううう！！！！」

「しまった、第二関節まで行っちまった。

まーいいや、美鶴だし」

・　・　・

ふと疑問。

こいつ金もってるのか？

母ちゃんがいるってのは聞いたことがないんだが……。

「てか、お前金持ってるわけ？」

腰に手を当て頭を撫でて。

キラーンと歯を光らせる。

そのしぐさの一つ一つに俺の怒りゲージがまた貯まり始める。

「当然しゃくつ!!」

この前お義母さんから一万円もらったんしゃくよぉ〜」

いるのかー母ちゃん。

「そらあ裕福なこつて……」

「あ、しいでい屋さんについたしゃくつ!!」

ミニ。二どこしゃく〜!？」

「自分で探せ……」

早足で俺の視界から早速消えた美鶴に向かって呟く。

「もう俺帰っていいか？」

・
・
・

見事迷子になりました（美鶴が）

「美鶴ー！美鶴ー！」

くそつ、あいつどこ行きやがった」

きよろきよる辺りを見渡す。

高い本棚のおかげで見えないしあのシルクハットの影も見えない。

あいつの影を俺が見逃すはずが……。
ん？

アダルトコーナー？

……………。

ちらっとだけ覗いてみるか。

絶対にいる気がする。

「お客さん、困ります！」

「コは十八歳未満の方は立ち入り禁止となっております——」

「うるさいしゃくつ！！！」

僕精神年齢は既に十八歳を超えてじゃくつ！！！」

後ろからとび蹴りをかました。

困惑している店員さんにごめんなさいしないなね。

「ども、お騒がせしました」

倒れている美鶴の首根っこを掴み引きずりその場を後にした。

・
・
・

「つたく、このダラズがつ！！」

もうさつさとそのミニ。ニのCDレジに持ってけ！！」

隅っこに正座させて説教開始。

「常識の範囲で……どーたらこーたら。」

分かったか？

分かったら早く帰るぞ。

かえってゲームしたいし」

「わかったしゃくよお……」

・
・
・

「一二六〇円になりまーす」

「フッ、コレをくれてやるしゃく。

一万円しゃくよお？」

「（なにこいつうぜえ）はい、いちま……って……お客さん……！
コレ千円ですよ？」

なにやらもめてるなーと思って読書コーナーから戻ってきたら……。
また美鶴が。

「しゃくつ！？」

そんなはずないしゃくつ……！

福沢が千円で野口が一万円のはずしゃくつ……！」

その知識はどこから来たのやら。

泉のように間違った知識が湧き出してるな。

「逆……なんですけど……」。

で、残りの二百六十円を……」

ぴくぴくと頬を引きつらせなんとか笑顔の対応を維持している店員さんは正直すごいと思う。

忍耐力が人よりも強いのだろうか。

「はあ？

あるわけないしゃく。

コレが一万円だと思ったしゃくから」

「（何をえらそうにいつてんだ、この顎……）
ではこのCDは戻しておきますね？」

美鶴の手からCDをもぎ取りもとの場所へ戻そうとしている。
あきらめろ、美鶴。

「嫌しゃくうっ!!」

真。たんは僕のモノしゃくっ!!」

バカ野郎!

何やってんだ!!

美鶴は店員の手からCDを奪ったかと思うと
次の瞬間ダッシュで入り口へと走り出したのだ。

「あっ!!」

ちょ……ま、万引きだー!!」

こんな正々堂々とした万引きが他にあるうか。
でも一つ。

万引きは犯罪です。

絶対にしたらあきません。

「うわ……俺もう帰ろう……」

・
・
・

「ねー、波音。

なんであの顎テレビに出てるの？」

晩御飯の時間に流れたニュースに美鶴の顔が映る。

モザイクなどがかかっているが顎のおかげですべては台無しである。
もう少しがんばれよ。

『なお、少年Sは

ぼくはまりたんのためにやったんしゃく。

何も悪くないしゃ……ぷっ！

あ、し、失礼しました』

「今のは仕方ないよな……」

END つづくかもしれませんね。

しゃくでば！ じんぱくとでいすく（後書き）

ども、ありがとございました。
ね。

美鶴さんったらあらあら・・・ですよね。
今頃かよってね。

それでは、ありがとございました。

しゃくでば！ 気持ちのいい目覚めをあなたに

「五……四……三……」

俺は今夢の中なのだ。

果てしなくいい気持ちなのだ。

ZZzzz…。

「ピピピッ！アサデス！アサデス！ピピピッ！ピピピッ！アサデス！アサデス！」

ZZ…。

すやすやなのだ。

快眠なのだ。

「ありやあ…起きないねえ…」

残念ながら今日は俺を叩き起こすことはできない。

昨日の朝俺が

「頼むから穏便に起こしてくれ…」

と流石の最終兵器ですら同情せざるをえないような顔で頼んだからだ。

しかし、不器用な彼女…メイナ・スタート・デリートはそれが出来ずに悩んでいた。

カチカチと時計が秒を刻む音のみが過ぎていく。

「どうしたもんかねえ…つか最終兵器の私にこんなこと頼む方が

どーかしてるとしか…！」

何かしら閃いた用だ。

きらんとメイナの顔が輝いた。

「波音、大好きしゃくう」

波音、大好きでっば…

また会えたね、マイハニー」

俺の耳元に急接近してきやがったかと思うと

メイナはぼそぼそと俺にそう囁きやがったのである。

俺の夢の中に嫌な空気が流れはじめたとは露知らず

少し離れるとのんびりと肘をついて俺の様子を見はじめた。

（俺の夢の中）

「波音、大好きしゃくう」

み、美鶴？

「波音、大好きでっば…」

で、出刃先輩？

なんだあんたらは。

人の夢の中にまで侵略するとかありえん

「また会えたね、マイハニー」

「出たああああ！」

「どうしたのさ、怯えちゃって？マイハニーらしくないなあっ」

セ、セズク・KT・ナスカルクさんじゃないですか。

最終兵器モドキでガチホモ。

こっち来んな候補No.3。

No.1は当然美鶴。

「な、なんでお前らいるんだよ！」

キョドった俺ににこりと爽やかに微笑みセズクが答えた。

「そりゃあ、勿論波音がいる所ならどこまでも」

う、嬉しくねえー！

「ちょっと何言ってるしゃくう？波音はう、おくのものしゃくよ？」

「いいや、俺のでっぱ！」

お、おいやめろ。

男だろお前らは！

「ん……？」

何だ、貴様らは？」

セズクが爽やかな笑顔から殺気を孕んだ狼の目になる。

み、美鶴、先輩逃げて！

「しゃくっ！？波音は渡さないしゃくっ！！」

「いや、俺のモノだでっば！」

ああお前らセズクさんに油を注ぐなー！

「ああ？」

誰が決めたんだそんな戯れ言」

もう知らない。
好きにやって。

「そこをどきな」

「どかないしゃくっ！」

「同じくでっばっ！！」

ああ、あああ。

夢の中なのに、こんないやあ…。

「なら消すまでだ」

セズクの腕が銃に変わった。
痛いほどの殺気が身に染み込んでくる。
もう駄目だ、この二人終わった。

（現実世界）

「うゝ…や、やめ…」

「おっ、おっ？

もう少しで起きるんじゃないかなあ？」

「何やってんの、姉さん？」

（再び夢の中）

「食らえしゃくっ！美鶴汁！」

うわっ、臭っ！

「デヴァーンナツコウ！！」

二人の凄まじい攻撃がセズクに向かう。
それを……セズクは

「甘い」

防壁のようなものを展開して防いだ。

反則……だな。

「しゃくっ!？」

「ではっ!？」

防壁を左手のひと振りで解除すると二人の体を地面に叩きつけた。
反動ではねあがる二人の体。そこへ

「フィニッシュだな？」

二人の首にナイフに変えた両腕を……振り下ろした。
ごとんと落ちる二つの首。

セズクは腕についた血を払いおとし、頬についた血が……涙みたい
に……。

「さあ、行こうか、マイハニー？」

先ほどと全く変わらない笑顔で俺に微笑み腕を引っ張る。

「は!？」

ど、どこへ!？」

「ふふふっ……」

「ちよっ、やめろっ!! 離せ、離してくれっ!!」

ずるずると引っ張られる俺の目に映ったもの。
首が無いにも関わらず二人の……。

「まああつしやああくうう……」

「まああてえええでつばああ……」

「いやああああ！

首無しまで襲つてくんあああああ！！
シエラ！メイナ！蒼お！！助けてくれ！！」

（現実世界）

「えええええ、ボンバーヘエエエツド！！！！」

「あつ！お目覚めだねえ？おはよー」

「はあ……はあ……」

あ、悪夢だった。

お目覚めも最悪。

「おお、すごい汗……」

パジャマが透けるぐらい大量に汗をかいていた。着替えないと風邪を引くにちがいない。

それよりも……

俺は楽しそうに笑っているメイナを睨み付けた。

「メイナ……お前か……」

「最高のお目覚めだったでしょ？」

この尼あ……。

「今から一ヶ月、ゴミ、風呂、洗濯、掃除全部やれ」

メイナの微笑をそれは完璧にぶつとばした。
絶対に許さない。

「そ、そんなあゝ」

「姉さん、ドンマイ」

あふたーすとーりー

「おはようしゃくう、波音っ！」

……。

そつぽを向く。

「な、なあんで無視するしゃくかあ!!」

内心ため息日和。

「すまん……今日はお前の顔マジで見たくない……」

「なあってしゃくう？

なあってしゃくうっ！？」

「お願いだからついてこないでえええ！！」

「波音っ！……行っちゃったしゃくう……」

ゆらりと街角に濃い影がひとつ。
言わずともわかるだろう？

「あの顎……マイハニーに……」

つづくかもあ

しゃくでば！ 気持ちのいい目覚めをあなたに（後書き）

ありがとうございました。

いやはや夢というのは本当にカオスなものです。

皆さん、夢の中で銃とかに撃たれたことがあります？

あれなんかリアルな感じで超嫌なんですよ。

じんわり痛いし。

それではありがとうございました。

大体そのとき寝ながらわき腹打ったりしますよね。
ベットの端とかに。

しゃくでば！ 美鶴＋メイナのからあげ〓みつる！！

お昼休みのことだ。

「でさー、その時仁がさあ……」

楽しくくっちゃべっていた時だ。

俺の机を掴む手があった。

「ひいつ！？」

あまりにその演出が不気味だったせいで悲鳴を上げる俺。

「ん？

ゾンビか？」

お弁当を机の上においてシエラが覗き込んだ。

「ぼ……ヴおくしゃくよ……ひゅー……ひゅー……」

美鶴だった。

ただでさえ細い体はさらに細くなりもう死にそうである。
別に死んでもいいんだけどね。

「ど……どうしたの？

今にも死にそうじゃない！！」

メイナが駆け寄る。

あらやさしい。

「お……おなかがすいたしゃくう……」

なんだ空腹なだけか。
心配して損した。

「大変!!」

ホラ、今朝作った試作品、からあげよ!!!!」

口に含んでいた米を吐き出した。

「げぼっげぼっ……」

というかむせた。

俺とシエラがごぼごと。

お前んな危険なもの作ってたのかっ!?

どうでもいいが最近メイナは料理の腕が上達した。

なんと爆発するタイミングが食べてから約十秒後になったのである。

「わーいしゃくっ」

この際なんでもいいしゃくっ」

いただきまーしゅしゃきゅっ むふっ」

「あっ……」

た、食べた……。
食べやがったよ……。

「……むっ!?

かっ、体が……というか顎が……あついじゃぐううっ!!

あっ……ああああっ！！！！」

ボコボコボコッ！！

「いやああああっ！！」

なんと美鶴の顎が皮膚丸ごと沸騰した水みたいになっていたのだ。
見ている俺がもうわけわからぬ。
女子が悲鳴を上げている。
メイナ何をしたんだ？

「うおべらっ！！」

そして大きく体を曲げた美鶴は口から何かを射出した。

白い……丸い……？

卵？

粘液と一緒に……卵？

「な、なんだこれ……」

何の卵だ——うわっ！？」

水を打ったように静かなクラスの中俺は勇気をだして卵に近寄った。
と思ったら跳ね飛ばされた。
美鶴に。

「あっ——！！」

卵しゃくうーっ♪

僕の卵しゃくうーっ！！」

スリスリ。

やめろその顔で目を閉じながらほおずりするな。
ってか、よくも俺を突き飛ばしてくれたな……？

「この卵ちゃんは僕が育てるしゃくよお！！
むふふつしゃく……」

……。

「とりあえずさつき突き飛ばしたお返しさせろ」

「へ？しゃく」

パンチ。

美鶴は二メートルちょい吹っ飛んで壁にへばりついた。

「姉さん……？」

姉さん、おい……」

シエラがメイナの前で手をひらひらさせるが
あまりにもショックだったのかメイナは反応しない。
ぼーぜん状態。

無理もないか……。

・ ・ ・

（翌日）

「波音！！波音！！」

もうすぐ生まれそうじゃくよおっ!!」

あー?

朝一番からこいつは何言ってるんだか。
頭いかれたのか?

「ってか、ソコで温めんなああああああ!!」

ソコ〓大事なところ。
まあいわずがもがな。

「可愛いそうだろ!!
出せよ!!」

どーりで膨らみすぎだと思っただぜ。
どんだけでえんだかと思った。
シモネタはここまでにしとくぞ。
え、えっちなのはよくないからな。

「ああん、そんなトコ触っちゃ駄目じゃ……」

「……………」

「じゃめんなさいじゃく……」

・
・
・

おや?

卵の様子が……。動いてる……。

「ぷはぁ！」

あー、苦しかった……」

……ん。

今晚のおかずはなんだっけなあ。

シエラがつくったバルチャニムスかな？

「波音、帰ってきてー！」

シエラ、ゆするな。

もう俺は駄目かもしれないんだ。

何がなんだか。

産まれてすぐしゃべったし。

「で……僕のパパとママは……？」

卵から出てきた人間……だろうか？

小さな……そうだな、四歳ほどの子供がきょろきょろと周りを見渡す。

そして美鶴と目があう。

「……しゃく……」

「……」

しばしの沈黙。

「本当のパパとママはどこ……?」

「僕じゃk——」

「きゃあああああつ!!」

「かわいいiiiiiiiつ!!!!」

美鶴は女子郡に押しのけられ人ごみの中に埋もれた。

「うえ?

あ、ちよつと!!」

この下裸なんだけど……」

そして女子らにもみくちやにされる美鶴の髪形を持った可愛い小児。

……ふむ。

もういいや、全部受け入れたわ。

「なあ、名前何が良いと思う?」

「えっ、それ僕に聞いちゃうの?

……そうだな……『みつる』でいいんじゃないの?」

「みつるくん!!」

こっち向いてっ!!」

「みつるちゃん、こっちおいでっ!!!!」

「ほら、みつる君、高い高い!!」

あっという間にクラスの人気者か。

そして俺の隣でそれを見てわなわなと拳を振るわせる人物に声をかけた。

「もう俺もあいつ『みつる』でお前『顎』って呼ぶわ」

「みつるは僕しゃくううつつ！！！！」

しやあああああああああああああああ……。

END つづくかもー

しゃくでば！ 美鶴＋メイナのからあげ〓みつる！！（後書き）

まさかの新キャラ。
びっくりですよね。

しゃくでば！ Can I have a heart of family

前回のあらすじ。

美鶴が吐いた卵からみつるが生まれました。
終わり

「で……。

この子の預け先どうするんだ？」

俺の懸念ももつともだと思う。

どうするんだ、こいつ。

国籍とか細かいことはこの際考えないとして……。

「やっぱりパパと一緒にの方がいいんじゃない？」

もう飽きたと、シエラが再びお弁当を頼張り始めた。

「パパねえ……」

考えてみた。

パパ⇨美鶴

ママ⇨メイナの唐揚げ

「俺だったら三日で死にたくなる」

だろ？

仕方ないだろ？

「じゃあさ……」

シエラの提案。
なるほどな。

・ ・ ・

「はい、また家族が増えました！」

詩乃が手をパンと合わせてはしゃいだ。

「えとーみ、みつるです……」

うむ。

可愛いぞ。

それを見て蒼は

「か、かわいい……ですけど、何か不吉なシュルエットしてますね……」

とりあえずそのシルクハットと紳士服着替えましょうか！」

「えっ、な、何するの……?」

「波音、よろしく」

詩乃さん、俺ですか、こういうのは。
やっぱり、俺なんですか。

俺じゃないと駄目なんですか。

「えー……」

「男同士でしょ！」

ほら！」

「波音さん、がんばって！」

しゃーねえなあ……。

「ほら、着替えるぞみつる」

・ ・ ・

その頃美鶴のテントでは。

「なんか……また僕は一人ぼっちになった気がするしゃくう……。
誰も僕を美鶴ってよんでくれなくなっただし……。」

あのガキのせいでますます僕の立場が無くなっていくしゃくう……。
…。

もう……もうどうすれば良いんしゃくかあ……？」

大きくため息をついて涙をこぼす。

服にしみがつくのを恐れたのかその涙をあわててハンカチでぬぐう。
見ているだけで哀愁さそうにとやら。

「美鶴……おい、美鶴……」

その美鶴を呼び止める声があった。

「で、出刃先輩しゃくつ!？」

なつかしの美鶴の尊敬する先輩の姿ありけり。

「俺の家に……来るでっば？」

よかったなあ、よかったなあ、美鶴。

「ああ……ああ……。」

出刃先輩大好きしゃくつ!!!」

寛大な出刃先輩の胸に飛び込もうとした。

だが現実には更に冷たい選択を美鶴に与えたのである。
そうそれは幻覚だったのだ。

あまりにもさびしかった美鶴の心が与えた一筋の
触れてしまうと消える希望だったのだ。

「ううう……」

悔しさのあまり地面を爪で引っかく。

「しゃああああっ!!!」

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら少年はある所へ駆け出した。

・

再び詩乃家。

「えっ、みつる君は顎とメイナ姉様の唐揚げが
化学反応して産まれたんですか？」

「その通りだ。

実際に見た俺が言うんだから間違いない」

みつるの頭をなでながら答える。

「はのん兄ちゃん、くすぐりたいよ」

かわいいなあ、弟欲しいなあ。

「私も見たしね。

なんともまあ奇妙な気分だよ、うん」

「かわいいな、やっぱり。

俺弟欲しいなあ」

なんでこんなに可愛いんだろう。
パパが顎だとは到底思えない。

「え、何波音？

弟欲しいの？

ならさ、私とがんばっちゃう？」

詩乃が自分のシャツの胸元を少し広げて……。

っておい。

ほっぺたが熱くなった。

……。

「……それじゃ子供になっちまうだろうが」

「だよねー、あははは」

そついう系のねたは苦手だからやめてける。

「？」

詩乃姉様と、波音さんが何の話をしているのかさっぱり分かりませんが

みつる君はかわいそうに……。

でも大丈夫、私達がそんなつらい過去に負けないぐらいの素敵な
思い出。

これから作ってあげますよー！」

蒼、目が星になつてゐるぞ。

そんなに弟が欲しかったのか。

「蒼姉ちゃん……」

がしっつ！

変な家族愛がここに出来上がった。
わけあり姉弟か。

「にぎやかな家になつたねえ……。
で、波音私とがんばらないの？」

「がんばらねーからやめろって馬鹿」

・ ・ ・

ピンポン♪

とある町のとある家。

といつても大塔高校がある市と変わる事はないぞ。
そこのチャイムがなった。

「はいー？」

ばたばたと手を拭きながらドアを開けるぱつと見て三十代ちょい過ぎの女性。

「美鶴!？」

「お義母さあん、助けてくれしゃくう……」

「まあまあ、こんなに痩せて……」。

ロクなもの食べてないんでしょう!？

とにかく上がりなさい!」

「しゃくう……」

えっ、なんだこの展開は。

・ ・

「じゃぐじゃぐじゃぐじゃぐ（ガツガツガツ）

おいしいしゃくつー！

こんなおいしい物生まれではじめて食べた気がするしゃくつ」

もりもりと次から次へと料理を平らげていく美鶴。

涙も止まらない。

嬉しくて嬉しくて止まらないのだろう。

「美鶴……」

「しゃく？」

「お母さんね、思ったの。

ただ厳しくしてちや駄目なんだって。

昔の私はお前にそのコンプレックスの顔に負けないぐらい偉い人になって……。

みんなに尊敬されるような人になって……。

お前に幸せになって欲しかったの。

だからあんなに勉強とかにしつくくこだわってた……。

でもそれはお前を傷つけるだけで、結局は家出させてしまった……。

…。

こんなこと私もお前も望んでいなかった……。

そうでしょう？」

「しゃくう……」

重い……。

俺の……実況が入る隙がない……。

重いというか深い……。

「お義母さん……」

「美鶴……」

「しゃくううつ……!」

ガッシ!!

「お前と私は知はつながつていないけど……。
それでもお前は私の息子だからね……」

家族愛つていいもんだなあ、おいおい。
泣けてきやがったぜ、（*、、（）。

つづくよっ!多分

しゃくでば！ C a n I h a v e a h e a r t o f f a m i l i y

家族って本当にいいものですね。

今おかれている状況を再認識して

そう思いました。

うんうん。

いいもんだ。

しゃくでば！ シエラとでエとしゃくっ

シエラ下校中。

「さつて、帰ったら何しようかな」

シエラは今回一人で帰っている。

授業を抜け出してきたのだ。

だがそのシエラの後ろについて歩くやつがいる。
当然美鶴である。

最初は偶然かと思っていたが……。

「（げっ、こつちみてる——……）」

どうやら目的はシエラにあるようだ。

「……な、なんだよ……。」

せつかく抜け出してきたのに……」

ため息とともに教科書で殴り倒す準備。

「一緒に帰って欲しいしゃばこーん

一瞬で殴り倒した。

ひどい。

別に良いけど。

「はぁ？

波音と一緒に帰れば良いでしょ……」

散らばった教科書を拾いながらシエラが冷たく突き放す。
拒絶されているというのに食い下がる美鶴！

「それが、波音用事があるとかでシエラと帰れって言われたんしゃくう……。」

それにちょうどいいしゃくつ！！

お義母さんに見せる彼女のふりをしてもらうしゃくつ！！！！」

「はあ！？×2

いつ決まったんだよ！？」

「今朝に決まってるしゃく」

話がナレーターの俺でも付いていけないぞ。
なんだ？

美鶴アホなのか？

「な・に・が決まってるだよ……？
そんなに死にたいわけ……？」

「ひいつしゃくうつ！！」

ごめんしゃくつ！！ごめんしゃくつ！！
そしてお願いしゃくつ、一生の！」

こんなところでつかうのか、最終奥義一生のお願い。
説明するまでもないが小学生などがよく使うおねだりのしかた。
一生のお願いとかいいながら何度も使う。

「はあ……ま、後でなんとかするか……」

「ホントしゃく!？」

わーい、しゃくっ!ー!わーいしゃくっ!ー!」

「……（殴りてえ）」

あ、ごめん、拳が勝手にッ!ー!」

ぐしゃっ。

「じゃぐうつ!ー!」

・ ・ ・

「あー喉渴いたな」

夏だからな。

シエラは胸元をバタバタとさせた。
熱気が溜まるのだろうか。

「奇遇しゃくねえ、僕もしゃくっ」

「お前と気が合うなんて今日は仏滅かな。
好きなもん変わりに買ってやるから金出せ」

「おっ、今日のシエラはやさしいしゃくねえー」

えっと……?」

やさしいか……?」

ん、俺の日本語能力がおかしいだけなんか？

「僕はMAXコーシーがいいしゃくっ！

はい、百二十円しゃくっ！」

「はいよ」

シエラは美鶴にもらった銀色と銅色の高価を自動販売機の中に放り込んだ。

そしてすかさず押す、アクエリウス。

皆大好きスポーツドリンクだ。

「あ、あのー……僕アクエリウスじゃなくてMAXコーシーしゃく……」

それを無視してシエラはアクエリウスの缶の蓋をねじ取る。

「プッハー！」

ん、ああ、MAXコーシーとか言ってたな。

ほらよ」

そう言うと思いつきり拳を自動販売機に叩き込んだ。

何やってんだバカーっ！！

……と思ったらなんと見本のMAXコーシーを

見本のMAXコーシーを透明のプラスチックを割って取ったではないか。

「ほらよ」

それをにっこり微笑んで渡すシエラ。

「しゃくう……これMAXコーシーじゃ……」

ブーブー文句をたれる美鶴（当然といっちゃ当然だが）だがシエラは歯牙にもかけないといった様子で

「なんだよ、ちゃんとMAXコーシーって書いてあるだろ？文句あるのか？」

一喝。

「しゃくう……」

今回ばかりは美鶴が少し可哀想である。

・ ・ ・

「あ、お義母さんしゃく!!」

そんなことしているうちにシエラは美鶴の家までたどり着いてしまった。

「やば……もうここまで来てたのか……」。

この顎の彼女にされるってのはもっぱらごめんだ……。

おっ、あれ使えるかも」

そしてとある店頭へと最終兵器のスピードで駆け寄るシエラ。衝撃波とか細かいことは気にしてはいけない。

・ ・ ・

「紹介するしゃくつ！

これが彼女の……しゃく？」

「あら、誰もいないじゃない？」

「あんれえしゃく？」

あつ、あんな電柱の影に隠れてるしゃくつ！
もうつ！

シエラったら以外に恥ずかしがりやなんしゃくなっ！」

幸せに満ち溢れている美鶴の顔がうざい。
なぐりたい。

「まあかわいらしい娘ね。

電柱の後ろに隠れるなんて……」

「改めて紹介するしゃくつ！！」

美鶴はダッシュで電柱裏に隠れるシエラの腕を掴んだ。
そのまま引きずりお義母さんの所へと引っ張っていく。

「これが僕の彼女のシエラしゃくつ！！」

「み、美鶴……」

お義母さんの顔が悲しみに歪んだ。

「しゃく？」

あまりの可愛さに感激したしゃく？

しゃっしゃっしゃっ、確かにシエラは可愛いしゃく！
これでも僕の彼女なんしゃくからねえ」

「美鶴……」。

あなたがそれでいいならお母さん止めはしないわ……。
でも……。でも……。ううっ！！」

「お、お義母さん！！どうしたしゃく！？

お義母さん！！

……。しゃく？」

なんと美鶴の隣にはシエラではなく

アニメシヨップの萌えキャラ等身大看板があっただけだった。

しゃあああああああ……。。

「あーへヴィな一日だな。

家帰ったらお風呂はいろ」

つづかないー

しゃくでば！ シエラとでエとしゃくっ
(後書き)

ううむ。

美鶴さん、かわいそうに。

とはいいいませんが流石に可哀想かもw

まあ後悔はしてません。

反省もしませんしww

では、ありがとうございました。

いやぁん……すっごい……えっちなしゃくでは！

「ついにこのコーナーも二回目じゃくー」

あ、コーナーだったんだ、コレ。
ってか

「エロくないよね……」

「シヨボボンしゃくう……」

「う……キモイ。」

まあ俺にとっちゃどーでもいいことだけだな

実際どうでもいいしな。

「よくないしゃくつ！！」

お前、それでも。。。付いてるしゃくかあ！？

あつ、言っちゃったしゃくう」

いや？んしゃくう」

ハア……。

あー頭痛い。

「とー！！」

ドサクサにまぎれてしゃくつ！！」

美鶴はしゃしゃしゃと走り出したかと思うと
シエラへとダイブした。

そうシエラへと。

「わーーーー（棒）」

「やったしゃくつ！

シエラを押し倒したしゃくつ（ガッツポーズ）
ついでにボインタッチもしたしゃくよおっ

このままいただきますしゃくつ♪」

と言って宙へ舞う。

そのまま高く高くヘジャンプしたかと思うと一気に服を脱ぐ。
まるでルパンみたいにすごいことになる美鶴だった。
だがかし……。

「しゃブオツ!？」

美鶴の着地地点には誰もいなかったのだ。

「バカめ、それは残像だ!」

得意げなシエラ。

お前それがしたかっただけだろ。

・ ・ ・

「というわけで波音には退場願って今回は
無理やりおにゃのこにエッチな言葉を言ってもらうことにしたし
やくつ!!」

言うまで今夜は帰さないしゃくよおん！」

退場させられたがナレーターとしては存在させてもらっぞ。
出ないと細かい描写がうんぬん。

「今もつお昼ですけど……」

蒼は迷惑そうな顔をして美鶴にため息を一つ。

「もうおにゃのこ言つの辞めろよ、時代遅れめ」

シエラもため息をひとつついて美鶴をにらんだ。

「っていつかこのコーナー無理にしくなくてもいいんじゃない……」

メイナもメイナでもうんざりといった顔だ。

俺もうんざりなぐらいだから

それに無理やり付き合わされるこいつらはスーパーうんざり。
かわいそくに。

「うるさいしゃくつ!!」

とにかくさっさと言うしゃくつ!!

まずはシエラしゃくつ!!

恥じらいながら……

『ご、ご主人様あ、僕もういつ（強制終了）』

おつぷ。

それはいきなりハードルとして高くないか？

「エロイツエッサイム。」

エロイツエツサイル」

「何しゃくつ、その呪文はっ！

エロ入ってればなんでも良いと思うなしゃくつ！！」

お前が言うか。

「もういいしゃくつ！！

次はメイナしゃくつ！！」

なりふりかまわねえのか。

もう。

限界なのか、美鶴。

「んー……と。

コンビにて成人向け雑誌と一般雑誌が分けられてるけど

コミックコーナーでは分けられてないから結構困るんだよねえ…

…」

顎に指を当て考え考え吐き出すメイナ。

それに対して美鶴は

「んんっもうっつ！！

違うしゃくつ違うしゃくつ！！

僕が求めているのはこうじゃないんしゃくつ！！」

何映画監督みたいなことってんだろっついつ。

「もう、蒼！

すべてはお前に託したしゃくつ！！」

シエラとメイナに見切りをつけ美鶴はずびつと蒼を指差した。
超空要塞戦艦の核さんは欠伸を一つ。

「……眠いです。」

それにしても不思議とプレッシャーを感じませんねえ……」

意外とこの顎すげえんじゃないか？

プレッシャー感じないとかなかなかの才能……。

やだ、何ほめてるんだろっ、俺。

「えーじゃあ……。」

カマキリって確か雌が雄を食べるんですよ？」

「しゃああああああああああああっ！！」

「あ、あとカタツムリには雄雌が無いって知ってました？」

「あああああああああああ……」

美鶴の全身から何かよく分からない液体が噴出し始めた。

黒っぽい……？

ん……？

臭い……？

「それにハムスターは………。」
？

何ですか、シエラ姉様」

「その辺にしときな」

「え……？」

あつ……なんですか、これ？」

なんか色々たまっていたのが出たっぽいな。
色々な。
色々。

「じゃ……じゃば……ごふっ……」

「とりあえず帰ろうか」

「はいつ、シエラ姉様！」

「今夜は焼肉は無理だねえ……」

「メイナ姉様に料理は無理……痛いですっ！」

頭に一撃をくらって涙目の蒼。
それは言っちゃいけないだろ。

「あつ……！」

「あ、蒼？」

何かを思いついたように蒼は「美鶴（みづる）のところへと
とと……と戻る。
どうしたんだろうか。

「オマケにカエルは……」

「――ッ!?!?!?!」

あつ、噴水が。

美鶴が破裂した……。

MITSURU
DIED

いやぁん……すごーい……えっちなしゃくでばー！（後書き）

これはなんといえいいのか……。

タイトルに釣られてきた方ごめんなさいね。

あやまります。

かといってこのメンバーで18禁ってのも
かなり高いハードルだなあ。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。

しゃくでは！ ゲームで成功した人っているの？

前回までのあらずじ。

名前の横に大きな丸という点数をとってしまった灼場山美鶴。

彼は成績を上げるためにシエラもんに相談を持ちかけ

彼女の助言どおりにしたが、失敗に終わった。

だが……。

「まだしゃく！！

まだ終わってないしゃくっ！！」

・ ・ ・

「というわけで、メイナもん！

なんとかしてしゃく！！」

メイナもん……。

そのうちハノンもんとかいわれるのだろうか、俺は。

「じゃあ成績がアップした気になれる料理を……」

美鶴の顔が変わった。

顔というか顔色が。

「もうあんな危険物……二度と作らないで欲しいしゃく！！

爆死はまぬがれたけど変な子供まで生まれてしまったしゃくっ！

」

その言葉を聞いたメイナの目から一筋の……涙が……。 (感動番組風)

「私の料理は……。」

私の料理は……。」

「じゃく？」

「みんなを死に至らしめる危険物だったんだね——っ!！」

泣きながら走りさるメイナ。

美鶴は一人その場に残された。

一瞬の静寂の後に始まるひそひそ話。

「ちょっと、何アイツ。

女の子泣かしたよ？」

「しかもアイツこの前の変態じゃね？

サイッテー」

「うほっ、良い修羅場」

「女の子を泣かせてその上変態だなんて……。」

あれ聞いている価値あんの？

ってか人間？」

すごい言われようだが今回は完璧に美鶴が悪い。
だから俺は止めない。

「……僕は……僕は……。
しゃあああくつ!!!」

美鶴も駆け出す。

「おい、お前のせいだぞシエラ。
お前のせいでクラス中がなんか美鶴攻め体制に入ってるぞ」

「えー？
別におもしろいからよくない？」

「お前……」

・ ・ ・

「あー、結局何も成績アップの方法がつかめなかったしゃく……」
なんで俺のところに来たんだよ。
俺はバ力だから力にはなれんぞ。

「誰かお前のまわりで頭いいやついないわけ？」
美鶴は長い間顎に手を当てて考え始めた。
いないのか…。

「……そうしゃく！」
お、思い付いたのか？

頭いい友達いたのか？

美鶴はすつとアンテナ付き携帯を取りだしボタンを連打した。
そのまま耳にあてる。

電話してやがる！

「……………しゃく……………」

『はい、こちらベル力第一……』

「蒼を呼んでくれしゃああくつ！！！！！」

大声だすな！

耳痛いかな！

だがチョイスはグッドだ。

確かに蒼さんならいいかもしれんな。
いい迷惑だろうけど。

『はっ……………？』

えーと蒼中将…お電話です』

『はい、お電話かわりました——』

「蒼ー！！お願いしゃく！！成績アップのコツを教えて欲しいしゃ
あああくつ！！！！！」

『……………』

ブツッ。

つーつーつー…。

うるっせえ！

なにこいついきなり大声あげてんだバカ美鶴。

「お前いきなり大声はアウトだろ…」

やさしく諭す。

「へ？」

だってこうしないときこえないんじゃない？

「はあ…あのな…普通に話しかければいいんだよ…もういっぺんかけてみ！」

「わかったしゃく！」

プルルル…。

『はい、こちら…』

「しゃあああくっ！…！…！」

「分かってねーじゃねーか！」

『……………』

ブツッ。

っー…っー…。

「切れたしゃく…」

あのな…。

だからな…。

「いいか、美鶴。もう一回言っからな？（略）」

「わかったしゃく！」

本当かよ…。
プルルル…。

『はい、こちら…』

「しゃくっ！」

『……はあ…。なんでこの周波数知ってるとか
キミの携帯どうなってんのとかはこの際問いません』

「ありがとうしゃく。というわけで成績アップのコツを教えてくださいしゃく」

『……脳トレでもしたらどうです？』

「僕DS持ってないしゃく……」

『じゃあソフトだけあげますよ。うまく受け取って下さいね』

「しゃく？」

ん？

なんだあの空から降ってくる……っ！
箱！？

「美鶴！上！」

「しゃ——」

がぎんとソフトが入っている箱が美鶴の顔に直撃！

「みつるうづうー！」

・ ・ ・

その後美鶴は義母に買ってもらったDSで脳トレをはじめたのであった。

『あなたの脳年齢は…
0歳です
』

しゃあああああ…！

「いいのか、悪いのか…」

ってかまた0かよ…。

しゃくでは！ ゲームで成功した人っているの？（後書き）

どうもありがとうございました。

がんばれ、美鶴さんと

応援したくなりますね。

え？

ならない？

僕もなりません。

しゃくでば！ 美鶴が時々クヌギの木の上で寝ているよ！

ミンミンミン……。

「あー今日も暑いなあ……」

詩乃が突き抜けるような夏の空を仰いだ。

「じゃ！

遊びにいつてきまーす！」

「はい、いつてらっしゃい……」。

はあ……みつるは暑くても元気だなあ。

それに引き換え……」

詩乃はちらりと扇風機の前で正座をしている蒼を見た。

「あああつうういいいでええすうう」

扇風機に向かって声を発する蒼。

我々は宇宙人までもう少しだ。

「クーラーガンガンの中で一日中そうやって扇風機の前でぐろぐろと筆者の弟みたいなのはどうかと思うんだけどね」

詩乃の言葉は正確に蒼の頭を叩いた。

ギクツと身を固まらせる少女に詩乃の止めの一言。

「生活習慣病は怖いからなあ……」。

肥満につながったり病気になったり――。
その歳でそうなるのはどうかと……」

『肥満』

『病気』

それらは蒼の頭を思いつきり大きく叩いたのだ。

「み、みつるくん！

私も一緒に行くっ！！」

・
・
・

「とゆーわけでっ！

今日は裏山へカブトムシ取りに行くぞッ！」

みつるのお友達。

たーくんはこの暑さだというのに元気百倍。
若いって良いなあ。

「えっ、話流れがまったく読めないんですが……」

その話に唯一付いていけない存在。
それが彼女なのだ。

「何言ってたんだ。

男なら分かるだろう？」

カブトムシと大艦巨砲主義とドリルは男のロマンだっ！」

たーくん力説。

わかってるじゃねえか、坊主！
その通りだ！

「私女ですけど……」

乗り気でない蒼をなんとかやる気にさせようと
みづるが一生懸命に取れるらしい虫を羅列する。

「他にもちょーちよとか蝉とか……」

「でもカブトムシなんてとってどうするんですか？」

「大事に大事に育てるのさ」

「でも夏休みが終わる頃にはみんな……」

「コラーっ！

夢のないことを言うんじゃないっ！！」

・
・
・

「あ、暑い……」

森の奥のほうだから湿気も混じって来て暑さが倍增されている気がする。

蒸し暑い。

サウナかって！

「さあ、ついたぞ！」

確かここらへんにいるはずなんだけど……」

たーくんは虫網を持ったまま木をじっくりと見回す。

「あつ、あれじゃないですか？」

蒼が一本の木を指差した。

「『クヌギの木』！」

蹴ってみればカブトムシが落ちてきますよ、きっと！」

「いや、でも蒼ねーちゃん。

こんなでつかい木を蹴ってもビクとも……」

「はあっ！」

蒼はみつるのとめる言葉を聴かずに軍で鍛えたケリをクヌギの木にお見舞いした。
枯れ葉が舞い落ち、幹が揺れる。

「こんなもんですかね……」

「す、すげえ……」

驚くたーくんの前にぼとつと小さな影が落ちてきた。
足を上にして角のある生き物が地面の上でもがいている。

「おつ、さっそく一匹目の——」

「カブトム「しゃくつ!」?」

ぐしゃ。

変な声とともに大きな影が降ってきた。

聞いたことのある口癖だなあ。

……ん?

ぐしゃ?

「いったあ? い、しゃくうつ!

もう誰しゃくう?

急に木を蹴つ飛ばしたのはしゃく?

ああん、もう服がよこれちゃったしゃくう? ……。
ん?

蒼しゃく?

そんなところで何してるしゃく?」

美鶴に問いかけられた蒼は心なしに震えているような気がした。
少し青ざめた顔で美鶴に頼む蒼。

「あ、あ、あの……。」

その……立ってみて下さい……。」

「しゃく?

ホラ、立ったしゃくよ?」

美鶴のどいた後をみつるがカブトムシを探すが
あの黒い勇姿はどこにもない。

「うへー汁とゴミが大量についているしゃくう……。
ばっちい……。」

美鶴は立つと同時に自分の服を見渡した。
そのままお尻に付いたゴミを払い落とす。
地面に落ちたゴミ。

あの——カブトムシ。

「いやああああああああっ！！！！」

蒼のいろんな感情が混じった叫びが森に響いた。

「ん？」

なんか、空が暗くなってる……？」

みつるとたーくんが上を見上げた。

それにつられて俺も上を見る。

赤と青の幾何学模様の浮かんだ艦底。

巨大な主翼と巨大な砲を備えた戦艦。

何千もの銃口と何百の砲門が美鶴に照準を合わせる。

「撃ち方はじめええっ！！！！」

蒼の号令と同時に陽天楼の武装が火を吹いた。
数々の色のレーザーが美鶴を、地面をえぐる。

ズガガガガッガガガッ！！

ドドドドドドドドドドドド！！！！

ズキュグッガアアン！！！！

「じゃじゃじゃじゃじゃいじゃばばばばばばっ！！！！

あうううん……しゃく……」

美鶴のいた後は約百メートルほどの深い穴に変わり果てていた。

「はあ……はあ……。」

この顎めが……」

「か、かつけえ……！」

あの艦っ……！」

「あ、あれ蒼ねーちゃんの『ねめしえる』だ」

・ ・ ・

「あ、おかえり。

どうだった？」

「ううう、詩乃姉様あ……」

蒼が詩乃に抱きついた。

「ど、どうしたのさ蒼。

よしよし……」

「うう
……」

おまけ

「あ、よく考えれば砂糖水という手がありました!」

←

「ふんふんふん」

← (翌日)

「さーてどうなったかな？」

←

「甘くておいしいしゃくうーっ」

「……………こんのクソ顎があ……………」

ズガガガガッ!!!

しゃくでは！ 美鶴が時々クヌギの木の上で寝ているよ！（後書き）

ありがとうございました。

いやー、カブトムシをこんな雑にやられたら

たまったもんじゃないですね。

蒼でなくても発狂しそうです。

では。

しゃくでば！ 暗闇へようこそ

キンコーン…

あー朝はねみい。

学校に来たはいいんだがあくびが止まらんよ。

「よっ、しゃく、波音！」

そんなだらけた俺の背中に思いつきりバチィィンと美鶴が。

「いつってえ！

て、てめえ今思いつきり背中叩いただろ…」

ひりひりしゃがる。

美鶴はというふうと両腕を広げやれやれのポーズ。

「しゃくう？こんなの只のあいさつしゃくよ。

まったく波音はムーバーしゃくねえ…」

ため息までつきやがった。

「それを言うならオーバーだ！

てかお前にんなこと言われたくねえよ！」

「しゃーしゃーしゃくしゃくっ」

聞いちゃいねえ。

「なんかさ、お前レベルあっぷしたよな」

「それはどーもしゃくっ」

きらつとすんな。

「うざさが」

あー言つてやった。

「はあ？しゃくう？」

僕なんにもうざくないしゃく。

ただ僕はフルライフな生活を送ってるだけしゃくよお？」

もう俺疲れた。

だれか美鶴いりませんか？

・
・
・

「うゝ眠い……」

ガラガラとドアを開け目を擦りながらシエラが入ってきた。
と、美鶴がシエラに猛ダツシュ！

「よっ！！」

しゃくシエラー！！

おはようのボイントッチしゃくっ」

「お前にだけは嫌」

ジュクスゴオ。

おお、モロに入りやがった。

「フッ……いいパンチしゃくね……」

まあいいしゃく。

今回はこいつで我慢してやるしゃく!!」

そう言つと（宣言すると）美鶴は近くのか弱い別のおなこの胸を…
…。

「い、いやっ!や……やめてくださいっ……!!」

おいおいマズイぞ、マズイぞ。

調子に乗りすぎにも程があるぞ。

「調子に乗りすぎだね。仕方ない、蒼、行くよ!」

あ、蒼?

蒼さんですか?

と、天井が崩れた。

空が暗い。

奇妙な模様の戦艦が浮いている。

「いいですよ、シエラ姉様!」

「よし、行くよ!」

「な、何するんしゃく!?

やめるしゃくっ!」

シエラが手を伸ばし、その先にネメシエルから光が一本。
紫の異空間みたいなのが現れる。

「しゃ、しゃ!?!」

すると美鶴がぴったり異空間に吸い込まれていった。

・
・
・

「こ、ここはどこしゃくか……」

辺りは血のようなもので染まり、黒い血管のようなものが
壁中に張り付いたひとつの空間に美鶴はいた。
奥からギチギチと音がする。

「しゃあっ!しゃっ!しゃっ!しゃっ!（走ってるんだよ一応）」

嫌な予感に美鶴はとりあえず走った。

ひたすら続く異空間みたいなのの中を。

だがその美鶴の足を一本の触手が掴んだ。

「しゃくう!?!」

たちまち手足共々縛られていく。

「しゃくうっ!?!」

僕を食べても美味しくないしゃくよおっ!!

いや、犯しても美味しくないしゃくっ!

犯る相手が 違うしゃくっ!!

犯るならやつぱきやわいいおにやのこしゃくっ!

やめてしゃくっ!」

そんな下品な美鶴の声が聞こえてたかどうかは知らないが触手の先が

シャキン(、・ω・)

とナイフ状に変化した。

「しゃくう!?

犯るじゃなくて殺るしゃくかあ!?

わああシエラごめんしゃくごめんしゃく!

ごめんしゃく——」

しゃあああああ!!

もちろん続かない。

しゃくでば！ 暗闇へようこそ（後書き）

いやあ、本当にありがとうございました。
実際どうなのでしょうが、しょくしゅ。
謎であります。

しゃくでば！ みんなもエコしよっ！

時はやはり夏。

深い意味はない。

蝉が鳴いている。

その中をワンピースに身を包んだ少女が
ビニールの中に大量の食品を入れてさまよっていた。

「あ、あつい……。」

詩乃姉様、分かってて私をお使いにいかせましたね……」

もうお分かりいただけただろう。

超空要塞戦艦ネメシエルの核。

空月・N・蒼さんだ。

(BGM はじめてのおつかい)

♪
♪
♪

「……………うるさいっ！！」

空からどこからとも無くビームが飛んできておいてあるラジカセに
命中する。

でっかい穴が開きました。

「嗚呼、重い。」

重いし、暑い、暑すぎます。

あの公園でちよっと休憩……しましうか……」

汗が地面に点々と水滴を残す。
夏だから暑いのは仕方ないな。

・ ・ ・

「よう」

俺颯爽登場。

とはいってもＹシャツをだらしなくズボンから出して
団扇で顔を仰ぎながらだが。

「なんという意外な組み合わせ……。
何でここに？」

意外言うな。

確かに意外な組み合わせだけど。

俺と蒼さんはなんだかんだであまり面識がないからなあ。

それよりも俺はついさっき悟った出来事を皆さんにお伝えしたい。

「実はな。」

この『しゃくでは！』は俺がいないと成り立たないことに
ついさっきアイス食ってるときに気がついたんだ。

それでいやいやながらもここに来たと。

案の定蒼さんいるし」

「……へ？」

「もっと正確に言おう。」

このお話をとあるウェブ上に書く人が困るということなんだ」

蒼はああ……というように頷いた。

「つまり、波音さんの近くには必ず

あのクソ顎が登場するというわけですね？」

ぐさつと来た。

分かっているも厳しいものがあるのだ。

「……そうだ」

「コ●ン君体質なんですね？」

ぐぬぬ。

認めたくねえ……。

「………そ、そうだ……（泣）」

「帰ります……」

蒼はぱんぱんとお尻に付いた汚れを払い
ビニール袋を両手で持った。

「待って！」

きつい、精神的にも話の流れ的にもきつい……！」

・

・

夏風に身を任せる。

そろそろ涼しくなってきたもおかしくない午後四時。
公園で二十分ほどのんびりとしているわけだ。

「…………クソ顎来ませんねえ…………」

蒼がぼそりと呟く。

いいんだよ、来なくて。

つてか来ることを望むんじゃないねえ！

「ああ、ハトとガキしかいないなあ…………」

きやつきやと公園の噴水の水の中で
べたべたにぬれながらはしゃぐ子供達。

ハトもでぼっぼーでぼっぼーとよちよち歩いている。

「ふと思っただんですが…………」

蒼さんが俺をキラキラした目で見た。

何か良いことでも思いついたのだろうか。

「ハトにBB弾食べさせたらどうなるんでしょうか？」

何この子怖い。

クルッポークルッポー。

ハトは平和の象徴とか言われてるけど

糞とかで町を結構汚すよな。

クルッポークルッポー。

クルッポーシャクルッポー。
ん？

違和感を感じた。

「おい、今何か聞えなかったか？」

蒼に話しかけた。

「へ？」

俺の団扇で顔に風を当てて涼んでいた蒼は
何を言っているんですか？と言いたげに聞き返してくる。

「いやだからさ……」

シャクルッポーシャクルッポーシャクルッポー。

「……………」

なんてこった……。

目の前にハトのコスプレをした一隅突出型顔人間が存在していたの
だ。

目を合わせたくない。

つてかむしろ頼むから消えてくれ。

ディサペヤーしてくれ。

「シャクルッポー！（お豆をくれしゃくー！！）」

いやそうは聞こえねエんだけど
物語の進行上しかたねえんだよな。

俺の耳がおかしいとかそういうわけじゃねえんだよ。

「ママー変なのがいるー」

六歳ぐらいの男の子がとたとと母親の元にかけていった。
俺でも怖いんだから男の子には刺激が強すぎたに違いない。

「お、お家に帰りましょケンちゃん！
ほら早くいらっしやい！」

「シャクルツ！シャクルツプー！！
（待って！待ってくれしゃくうー！！！）」

いらっ。

俺は立ち上がると美鶴のケツに思いつきりけりを入れた。

「シャクルP O O O ！！！！」

悶絶するハト顎人間。

「おいアホやってんだ」

「シャクルクルシャクポップー！！」

「日本語でおk」

・ ・ ・

美鶴はハトの衣装を脱ぐといつもの衣装に着替えた。
そしてぽつりぽつりと話始める。

「今日ママがお仕事で北海道に……ううっ……。
出張に行っちゃったんしゃくうう……ずずっ」

んなことでいちいち泣くなよ。
ガキか。

「ママって……」

蒼、そういうところは突っ込み始めると止まらないぞ。

「それでッ……食べるものがなくてっ……しゃくう……」

普通はお金と一緒に何かメモがついてて
何かこれで食べてねーとみたいな感じで置いてあるだろ。

「チンして食べてね　みたいななかったんですか？」

やれやれと呆れ顔で蒼がたずねた。

「それがしゃくう……」

美鶴はごそごそとポケットから一枚のメモのようなものを取り出した。

書置きだろうか？

なんだ、あるじゃん。

『大変おいしくいただきました。』

b yゴキブリ（ジミー・トミー・サミー）
ネズミ（トム・マンティ・コジロウ）』

oh……。

なんとそれは居候からのお手紙だったのだ。
全て……言いたくないんだがフンでかかっている。
当然臭い。

思わず足の先でメモを蹴り上げてしまった。

「しゃぐぶっ！！」

あ……。

書置きが美鶴の顔に命中。
そんなことより

「うわ——きたね——」

裏側を蹴ったとしてももし水分みたいな成分が
滲み出していないとは限らないからな。
靴の先を念入りに洗う。

「は、早く代わってくれしゃくう！
前が見えないんしゃくうっ！！」

ふらふらすんな！

お、おい。

そっちには蒼さんが……。

「ひいっ！！」

こっちに来ないでくださいっ！！」

大量のレーザーが美鶴を木っ端微塵にした。

しゃあああああ………。

・ ・ ・

「というわけで何か食い物をくれしゃく!!
もうお腹がすいて死にそうしゃくく波音」

俺の名前を呼ぶな。

「自らの顔を食料として提供してくれる心優しいお方が
現れることを祈っているぜ!」

ぐつと親指を立てて美鶴を突き放した。
かわりたくない。

「しゃくく……蒼おお!!!!」

「一枚のじゅうたんからたくさんの食べ物が出てくる
夢のような道具を出してくれるような方に出会えたらいいですね
っ」

蒼もにつこり笑って美鶴を突き放した。
おそらく深いところでは俺と同じくかわりたくないという
心情が働いているに違いない。
それにショックを受けたのか静かになる美鶴。

珍しい。

「……しゃくう？」

蒼おお……あの袋はなんしゃああくうう？（ニタアアア）」

顔怖っ！

蒼の顔から血の気が引いた。

見つかっちまったな。

「た、ただのエコバックですよ！！」

必死の弁解も美鶴には通じない。

見てしまったのだ。

中に入っている花園を。

「食い物くれしゃくっ！……！（くわっ！……）」

唾を飛ばすな顔でかくするな近づくな。

それに対して蒼は

「そ、そんな言い方だと警察呼びますよっ！？」

というか呼びたい、呼びますっ！……」

蒼は手を電話の形にすると耳に当てた。

おそらくネメシエル経由で警察に電話しているのだろう。

「お願いしましやあああああくっ！……！

蒼さまああああああああつ！……！……」

美鶴は秘技『スライディング土下座』を覚えた！

・ ・ ・

「えーと、豆豆……」

蒼はやれやれとビニール袋まで歩いていくと
中をごそごそしはじめた。
豆？

「な、なあって豆なんしゃくう！？」

「さつき『お豆をくれしゃくー！』って言ってたじゃないですか」

通じてたのかよ。

俺だけじゃなかった、マジでよかった。

画面の前の諸君。

もし通じていたら結構やばいかもしれないぞ。

「あ、ありました！」

蒼は袋から一つのプラスチックケースを取り出した。

山椒と文字が書いてある。

読める方は多いと思うけど一応読み方を言っておこう。
さんしょうだ。

「さんs……じゃなくて、黒豆です！」

嘘つきやがった。

何をたくらんでやがる。

「わーいしゃくうつ」

お前もお前で気がつけよって話しですよ。
ええ。

「蒼、お前……」

俺の苦しい突っ込みも虚しく空に消える。

「さあたんとお食ってくださいっ」

美鶴は両手一杯に山椒——もとい黒豆をとると
くんくんと臭いをかいだ。

「かわった臭いしゃくねえ……」

気づかれたんじゃない？

「はい！」

それはデインギス・マルグレーンというところで取れた特別な
とっても貴重な黒豆なんですよ、（当然嘘）

美鶴はそれを聞いてぱあっと顔全体を輝かせた。
どれだけ単純な男なんだ。

「何はともあれようやくご飯にありつけるしゃくうつ……！
いただきますしゃくうつ……！」

両手一杯の黒豆（飯）を頬張る美鶴。
そして

「じゃアアアアアああああああああああああ！！！！」
「！！」

山椒の実の小粒でもぴりりと辛いのだ。

・ ・ ・

「るんたったーりあーういーああーざわあーるど！
ういあーざちるどれえん……」

シエラがチャリに乗って町を駆け巡っていた。

「ういあーざ……？
ん、何だ？」

何か不吉なシュルエツトがピクピク痙攣しながら
公園の入り口でうつぶせになっている。
美鶴だ。

「な、何やってんの、お前……」

チャリのブレーキをかけ美鶴の頭付近で止まるシエラ。

「しゃ……しゃ……ヒューヒュー」

美鶴が顔を上げた。

それを見たシエラの不快指数が少し上昇する。
醜い…… っていうか唇がすぐくはれている。

「げっ…… すごい腫れてる……」。

てか何でお前そんなに黒こげなんだ？

それになんていつもよりさらに痩せてるんだ？
骨見えてるぞ？」

「しゃふう……」

「それにしても今日は暑いな。

まさかと思うが辛いものでも食べたんじゃない？」

「み……み……」

腫れた唇の隙間からかすかに言葉が発せられる。

「？

何？」

「み、水を…… くれしゃく……」

「水？」

あー、飲みかけのしかないや。
ま、これで勘弁してくれ！」

シエラはペットボトルのキャップを捻って空けると
それを美鶴の上から降りかけた。

「よし、これで少しはマシだろう？
じゃくはっはっは……」

お前も相当な悪魔だと俺は思うよ。

「しゃ……く……」ガクリ

(翌日)

がらつと教室のドアを開けて美鶴が入ってきた。
あいさつをしようとそっちを振り向いた俺の目に
なんとも奇怪な様子が飛び込んできた。

「何、お前その頭wwwwww」

思わずwをつけてしまうほどの現象。

そう、美鶴の頭から双葉が大量に生えていたのだ。
山椒の種だろうか。

「う、うるさいしゃくっ！……！」

END つづくかも

しゃくでば！ みんなもエロしよっ！（後書き）

ありがとうございました。

今気がついたのですが不自然なところにある？は

もともとゝや？など特殊な記号でした。

なにやら不都合により？になってしまっております。

もし変なところに見つけたらああと納得してください。
がんばって治していきますゆえ。

では。

しゃくでは！ まあとこかの部分に使わせてもらいますよ。

「波音、波音！！」

一緒に帰るしゃくよ！！

校門でまってるしゃくからね！！」

タツタツタツ……と駆け出して行ってしまった。

「は？

え、おい、ちょ！？

あ、ああ……ええ……？」

そう、このとき俺は思わなかった。

まさかあんなことが……。

そしてこの去っていく美鶴が俺が見た最後の美鶴になるなんて……。

約二十秒後の姿がコレだ。

「しゃ……しゃ……」ピクピク

こんな短時間でランチに数回あつてもう目も当てられないんだよ。

・ ・ ・

君は考えたことがあるだろうか？

どうして、うちのクラスは美鶴をいじめないのかと。

それはこのクラスがおりこうさんだからだ。

まあ一部の女子は恐れているんだが。

しかし、他のクラス、または世間様はそう甘くはない。

「ったく、わけわかめなんだけどアイツ。

何で一緒に帰ることになってんだよ、ハゲ」

しぶしぶ教室から出て校門に行く。

まあ仕方ない。

コレも美鶴が主人公である限り俺の宿命なのだ。

「もうやだ。

泣きたいわ、俺。

そもそも俺の立ち居地に何で他のヤツが

つかなかったんだっていう。

シエラとかでもよかった気がしてならねえんだが」

まあこんなこと言っても代わる訳ないので。

玄関で靴を履いて校門にたどり着いた。

「げ、マジでいる。

しかもあの鞆を両手でもってうつむく姿勢。

昔の恋愛ゲームとかでよくあるシュチュというか

持ち方？

待ちかたじゃねーかオイ」

裏から帰ろうかな。

正直関りたくないんだよ。

と、肉を打つ音が。

バキッと。

「ん？」

何の音？」

「じゃぐうつ!!」

ぼ、僕は何もしてないしゃくよおっ！

やめてしゃくうつ！

お願いしゃくうつ!!」

美鶴が他のクラスの奴らにリンチにされていた。

「つせえ!!」

てめえの顔見るとむかつくんだよ!!」

うわ、あの顎ついにいじめられてるよ。

しかも小学生みたいな理由で。

「やめてほしけりゃ金だしな、金」

あ、そこは中学生っぽい。

「しゃくうつ……」

「ああ？」

たった千円？

ちよつとジャンプしてみろよ」

「うつ……しゃく？」

チャリンチャリン。

あ、こいつおばかだ。

「まだ持つてるやないけー!!」

綺麗なあっぱーが美鶴にヒット!

「僕は人を待っているだけだったしゃくっ!!
な、なんで攻撃してくるんしゃくかあ!?!」

「だから、てめえの顔がむかつくんだよ!」

そして再開される攻撃。

人を待つ……か。

俺のことだよな。

「痛いしゃくうっ!!」

やめてくれしゃくうっ!!!!」

「ははははは!!!!」

おいマジでこいつ無抵抗だぜ!!!!」

……っ!

「波音っ!

早く来てくれしゃくううっ!!」

その悲痛な叫び。

俺は耐え切れなかった。

「おいてめえら」

俺は不良三人にガンをつけてしまったのである。
うわぁやっちまった。

「ああ？

なんだてめえ？

まさか波音とかやはてめえか？」

「いかにも」

だせえ。

俺だせえ。

いかにもってなに。

侍？

武士？

「しゃくつー！！

波音ー！！」

「すまん、美鶴。

なんか悪いことしちゃったみたいで」

ああ顎すりむけて……。

ああ顎……。

顎……。

「てめえもこいつの仲間なんだろ？

許して欲しかったらほらジャンプしろよ」

「するか、モヒカンハゲ。

ほらいいからかかって来い」

俺は鞆を投げ捨て戦闘態勢に入った。
敵は三人。
たいしたことはない。

「おらあっ!!」

まず一人目。
相手が殴りかかってきた瞬間に体をかがめ避ける。
そしてすかさず下からの追撃。

「碎け散れクズ」

クリーンヒット！
一人目は大きくぶっ飛んで地面に大の字になって倒れた。

「てめえっ!!」

二人目と三人目は同時に来るようだ。
ふふん、その程度で……。
つてうおっ!?

棒持つてる！

「痛っ……!!」

腕で右をガードしたものの左からの攻撃が
俺の頭に傷をつけていった。
ぬるりとした液体が目まで垂れ下がる。

——血かよ。

「ふん、ざまあ見ろ」

俺はその言葉にイラっときた。

腕でガードした右側の不良にすかさず蹴りをぶち込む。
当然避けられるのは想定内。

すかさず油断した左側の鳩尾に一発叩き込んでやった。

「うぐっ……」

倒れた左側の頭を蹴り、脳震盪ざまあ。

泡をふいた左側の棒を奪い取り右側を挑発する。

「来いよ」

「くそがあっ!!」

叩き込まれた棒を左腕で弾く。

棘が刺さったがそんなものはどうでもいい。

開いた隙を狙い右腕の棒を思いつき振り下ろした。

棒が相手の頭に当たり折れるほどの衝撃で。

「う……あ……」

コレで全員か。

たいしたことなかったな。

「は、波音……」

「美鶴、ほら帰るぞ」

「で、でも波音……血が……」

「アロンアルファぬつときや治るだろ。

ほら、帰るぞ。

立てるか？」

俺は美鶴の肩を持ちながら校門から出た。

「すまん、美鶴。

助けるのが遅れちゃった」

「だいじょうぶしゃくよ。

それより波音の方が……」

「いって。

別に」

「……しゃふっ」

なんだよ笑うなよバカ美鶴。

「んだよ気持ち悪いな」

「これからも波音、友達でいてくれしゃくっ！」

「……………」

……………」

——嫌」

「え……？」
「しゃ………」

しゃああああああああああああああああッ！！

つづくかも

しゃくでば！ まあどこかの部分に使わせてもらいますよ。（後書き）

ありがとうございます。

波音さんのひさびさのバトルシーンってかあれですね。
しゃくでば！でやるなって話ですよ、ごめんなさい。

許してください。

今日は晴れでした。

良い天気です。

しゃくでば！ え？熱？なら俺の情熱の熱で……

ピピピピッ

37度5分。

俺は体温計をシエラに渡した。

「軽い熱だね」

ふうと安堵のため息をつくシエラ。

「ここ最近お仕事続いてたからねえ……。仕方ないね」

メイナが俺のおでこを触りながらのほほんと言った。違う。
differentだ。
この熱は確か……。

「たぶんあれだ…そうだアレだよ！シエラ！

お前ふざけて俺を海に落としたりなんかするから！」

シエラは頭に一瞬ハテナを浮かべたもの

「え？」

あ…あー…」

ちよつと気まずい表情になった。

「そうだ思い出した……。」

立派な原因はあんただよシエラ。
責任持つて今日は波音のかん」

「姉さん！……！」

シエラが急に遮った。

なんだ、どうしたんだ？

「え……？」

ほらメイナも困惑してる。

「今日は学食のチョコバナナラーメンが半額の日だよ……！」

シエラは両手を叩き合わせた。

「なん……だと……？」

メ、メイナ？

「しかも2人組で注文すると某スポンジ状生命体のおもちゃストロ
ーがついて来る……！」

「決行だ……！行くよシエラ！」

お、おい、マジかよ。
待て。

「じゃ〜に〜波音〜ちゃんと休んでおくんだよ〜」

シエラは扉から出る直前最後に俺に含み笑いをした。策士……。

「え…ちょ…おま」

バタン…………

俺は……。

俺は…………。

チヨコバナナラーメンというかなりマニア向けの食い物と
スポンジ状生命体に負けたらしい……。

なんてこった……。

ラーメンならわからんでもないがまさかあの食い物に負けるなんて

……。

「はあ…………」

まあ一人もたまには悪くないが。

窓から外が見える。

綺麗な青空だ。

ああ段々眠くなってきた……。

・ ・ ・

ピンポーン。

ピンポーン。

ピンポーン。

目を開けた。

寝てた。

今何時だ？

ん？

チャイムなつたよな？

誰か来たのか？

シエラかメイナ、忘れ物でもしたのか？

満足に回らない思考を頑張って回す。

セズクか？

まさかなあ。

パンツ！！！！！！

勢いよく扉が開いた。

「波音！

大丈夫しゃくか！？

しつかりするしゃくうつ！！

死んじゃ嫌しゃああああああくつ！！！！！！！！」

嗚呼やっぱりこいつか。

う、うるせえ……。

てかなんでお前ここにいんだよ……。

帰ってくれ、今は疲れた。

「波音が風邪だとシエラから聞いて駆け付けてきたしゃくつ！」

美鶴は鼻からふんぬと息を吐いた。
空気汚れる。

「だからってわざわざ学校抜け出してまで来なくてもいいだろ。
帰れよ……迷惑だし」

誰に迷惑なのかは言うまでもない。
俺だ。

俺は右手だけ布団から出してひらひらさせた。

「ダメしゃくつ!!」

風邪はひき始めが肝心なんしゃくつ!

このまま放っておくとカノーしてインフルエンザになっちゃうし
やくよ!!」

美鶴は俺のひらひら右手をぱしんとはたき落とすと右人差し指を立てた。

「いや、色々間違ってるからそれ。

ホントに俺一人で大丈夫だから。

子供じゃねえんだし。

頼むから触らないで……」

ピトッ。

「——っ!!」

いきなり美鶴が自分のおでこを俺のおでこにくっつけてきた。

女の子ならおいしいイベントだがよりによってこいつとなると……。

あと少しでキスするところだったぞ……?」

鬱だ。

後で風呂入ろう。

風邪とかまじどうでもいい。
風呂。

「まだこんなにあるじゃないしゃくかあ!!
しっかり寝てないと駄目しゃくようっ!!!!」

耳にキンキン来やがる。

「わかった…わかったから耳元で叫ぶな…しばらく一人にしてくれ
…」

俺は寝返って美鶴に背を向けた。
もうやだ。

嫌い、美鶴。

「しっかり寝てるんしゃくよ!？」

最後にダメ押しして美鶴は部屋から出ていった。

「ふう……。
やっと寝れる……」

俺はため息をついて布団の中で目を閉じた。
大体一分ぐらいたっただろうか。
扉が開いた。

「よしよし、寝てるしゃくね」
扉が閉じた。

「……………」

また一分たった。

扉がゆっくり開いた。

「しゃーくしゃく、寝てるしゃくね」

扉がゆっくり閉じた。

「……………」

またまた一分たった。

扉が金属音を立て開いた。

「しゃあくしゃく、ちゃんと寝てるしゃくね！」

俺の導火線に火がついた。憤怒の炎だ。

「うつぜえんだよてめえ！」

何がちゃんと寝てるだコラア！！

んな1分おきに様子見に來られて寝れる馬鹿がどこにいたんだよ！！！！

邪魔すんならとつとと帰れ！！！！

ハゲ！！

捲し立てた。

「ひっしゃくう！」

「ご…ごめんしゃくう……………」

扉が金属音を立て閉じた。

ったく……。

う、叫びすぎたか…頭がクラクラする。

でもあいつにはあんくらい言わなきゃ聞かねえしな……。

まあいいや、とにかくこれで安心して寝れる……。

・ ・ ・

コンコンコン

う……ん？

眠りの水槽からゆっくり出た。

「波音…お粥…作ってきたしゃくう…」

美鶴がお盆を持ってひっそり佇んでいた。

「またそんな……。

——今食欲ないからいいわ。

後で食うからそこにおいといえ——」

「駄目しゃくようっ！…！

食べて体力つけないと死んじゃうしゃくようっ！？

波音が死んじやったら…ボク……う…おく…しゃ……う…う…

……」

俺は美鶴から差し出されたスプーンを握った。

早く食ってまた寝よう。

「あーわかった。

わかったよ。

泣くなって泣きたいのは俺だよ、ちくしょうが。

食べる、食べるから……うつ！？」

やばい。

匂いからしてすでにやばい。

なんか食器洗う洗剤やら塩やらコショウやら

何やら色々混じってカオスな匂いが混じって俺の鼻孔を突っついている。

そう、それは一言で言つと……。

人間の吐瀉物……。

そうゲ。のような……。

俺はスプーンを置いた。

本能が告げている。

「どうしたしゃく？」

「やっぱいいわ……本気で食欲ない」

これを食べると俺死ぬ。

それをどう勘違いしやがったのか

「しゃくっ！？」

熱くて食べられないんしゃくね！？

じゃあボクがフーフーしてあげるしゃくっ！

しゃふうー…しゃふうー…はい、あーんしゃく」

美鶴はフーフーした死のお粥を俺に突きつけたのだ。

「いい！」

いいからマジでー!!」

全拒否。

リジェクトだリジェクト。

「いいから食べてしゃくつ！」

ボクが腰を振るって作ったんしゃくから絶対おいしいしゃくよー!!」

こ、腰……。

「それを言うなら腕を……。

いやんなこたどうでもいいんだ。

ホントに食いたくないんだそつとしてといてくれ。

頼むから。

六十歳超えるまで絶対使わないと決めてた

『一生のお願い』使ってからやめてやめて、やめろおい』こら

むぐつ!?

押し込まれた。

強引に。

一気に喉に。

お粥もどきが。

いや死のお粥が……。

俺の喉に。

腹に。

入って……。

「く……ググググ。」

・ ・ ・

「う……しゃく。」

ボ、ボクは今まで何を……？

そ、そうしゃく……。

波音にお粥を作ってあげて……？ 波音が変になってしゃしゃくつ
！？」

二時間後、狂い疲れた俺は気を失った形で美鶴に発見された。

「波音！！」

波音！！

しっかりするしゃく、波音！！」

「玄関には靴が1足脱ぎ捨ててあるわ

台所はぐつちやぐちやだわ戸棚は荒らされてるわ……」

「誰の仕業かと思ったらお前だったんだねえ？

……顎？」

どうやらメイナとシエラが帰ってきたようだ。

素直に喜びたいところだが残念ながら俺の精神は今何処かへ行ってしまうっている。

本当に残念。

「さしずめアレだろ？」

金がなくなつてこの家に忍び込んで家の全財産を盗もうとしたん

だろ？

僕は外出中。

それに波音は病気で弱っている身。

お見舞いという非常に都合のいい口実もできたってものだ」

「しゃ、しゃくつ！？ちつ、違うしゃくよお！！

ボクはただ本当に波音の看病を……」

「今までわいせつやら窃盗やら様々な犯罪を犯して

警察のお世話になることが日常茶飯事の言い訳を誰が信じると言

うのかなあ？

ねえ？」

「ほ、本当なんしゃくう！！信じてくれしゃくう！！」

「そして弱ってることをいいことに波音を……。

許さない。

絶対に許さないっ！」

「人それを『外道』と言うんだよ？

覚えていおいてね？」

「しゃ……しゃ……」

しゃああああああああああああああああああああ！！！！！！

ああっ！！！！！！

ああああああああああ！！！！！！

んおゝあゝああああああああ……！！！！！！！！

そして、午後五時ぐらい。

「うう……」

俺は、ぼんやりした意識を取り戻した。

「あ！

波音！

気がついた！？」

シエラが俺の顔を覗きこんでいた。

「大丈夫！？

どこも痛いとかかない！？」

シエラの声に引つ張られメイナも俺の隣に座る。

「あ、ああ。

もう大丈夫……だと思う」

なんか確信がない。

「よかったあ……」

胸を撫で下ろすシエラ。

「ごめんね？

私達が自分の欲望のままに波音置いて学校行っちゃって……」

「うん。

ちゃんと僕達が最初から今日一日看病していれば
こんなことにならなかったんだもんね……」

いや、お前今日一人で俺看病することになってただろ？
なんだ？

もう忘れてんのか？
まあ過去はどうでもいい。
それはそうと……。

「？

なんでこんなこと？
それになんだそれ？」

「波音……覚えてないの？」

メイナはシエラと顔を合わせた。

「は？」

「波音、僕達がない間に空き巣に襲われたんだよ。
どうやら僕達がない時を狙ったらしくて……」

シエラはおそろおそろ切り出した。
ほお。

「へえー。

そりゃあ危なかったな。
ひよっとしたらそれ空き巣じゃなくて敵軍の刺客じゃないの？
連合郡の」

「いや、普通に弱かったからただの空き巣だよ」

俺は運がよかったのか悪かったのか……。
ちよつと待て。

そっぴいや誰かに俺、昼間看病してもらってなかったっけ？

おかしいな？

思い出せねえ。

夢だったのか？

俺は体を起こして辺りを見渡した。

「つて、なんだこの血の痕はあ！！」

「いやあ………ついつい派手にやりすぎちゃって………」

てへ、と舌を出すメイナ。

「後のことも考えろよ！」

呪われた部屋みてえじゃねえかよ！！

もう俺今夜からおちおち寝れんわ！！」

「大丈夫大丈夫！」

この洗剤があればちよちよいの………」

酸性か。

大丈夫なのか？

壁紙剥がれたりとかするんじゃない？

「姉さん！」

こっちの洗剤も混ぜてみたら強力になりそうじゃない？」

シエラ……？

待て、おい。

「シエラったら頭いい！！」

それじゃ早速……」

[illegible]

こうして夜は更けていくのだ。

てかあんなに血の痕が残るほどやられたのか、空き巣。

無惨だなあ……。

哀れむ必要がなくても哀れんじまうわ。

俺は空き巢の人にささやかな黙禱を捧げ、再び眠りについた。

そして翌日。

担任の桐梨が出血……。

いや、出欠を取る。

いや、こいつならやりかねんけど。

怖いし。

生徒指導のお方だからな。

「灼場山」？

ああそうだったいねんだったな。

なんでもな？

全身打撲やら複雑骨折やら内臓一部破裂やらで全治三ヶ月はかかるそうだ」

ひょえ、なんだそれ。

おつかねえ。

誰かに襲われたのか？

まあそんな重症を一気に負わせられるのはウチの最終兵器姉妹ぐら
い……。

ん？

あ……。

ああー！！

思い出した。

そうだ。

俺は奴に看病されて……。

変なお粥で頭狂って……。

そうか、美鶴。

あの姉妹から誤解を受けてボコボコにされたのか。

気の毒に……。

本当に気の毒に……。

あいつはあいつなりに誠意を持って俺を看病してくれたんだ。

おせっかいですげえウザかったけど！

お粥死ぬほどまずかったけど！

それでも看病するあいつの心は

俺に元気になつてほしいという気持ちしかなかったはずだ。

直接看病された俺だからわかる。

それを誰からも感謝されず

殴られて大怪我を負うなんていう結末になっちまうなんて

いくらなんでも理不尽すぎる。

今回悪いのは俺らの方なのかもしれない。

まあ確かに信用性がなかった美鶴も多少は悪いかもしれないが
それくらい許してやってもいいと思う。

正直嬉しかった。

少しだけ。

本当にほんの少しだけな。

美鶴だし……。

誰だ、今思ったヤツ。
別にデレてねえ。

・ ・ ・

「というわけでお見舞い行くぞ」

「ええー？」

あんな顎のお見舞いなんか行くの？」

「いいか？」

よく考えてみる。

今回の怪我の原因はお前らの誤解なんだぞ？」

「あ、そっか」

「あ、そだシエラ、一旦家かえろ！」

波音は何か適当なもの買って美鶴の家行つてて」

「あ、ああ……」

何するんだ？

・ ・ ・

美鶴のお家

ピンポン。

チャームを鳴らす。

……………。

いねえのか？

鍵は……開いてるよな？

「はいはいしゃくくう」

「!？」

なんと美鶴が出てきた
立ってる。

二本足で立ってるよ。

しかも包帯巻いてるの頭と右腕のギブスだけかよ!!
紛らわしい……というか……………。
異常過ぎる回復力だな。

「お前全治三ヶ月って……………」

おそろおそろ話しかける。
だって怖い。

なんか怖いもん。

「いやぁーそれが思ったより早く治ってきてるんしゃくよぉー!
お医者さんもびっくりだったしゃく!!」

恐るべし 美鶴の回復力。

これがギャグキャラの力なのか――？

今月号で爆死して来月号ではケロッと登場してるアレ。

よくあるよな？

「んん？

お見舞いしゃくかあ！？

ありがとうしゃくうううう！！！！」

俺の両手のビニール袋を見やがったな。
結構色々買ったんだ。

「いや……ホラ。

ウチのバカ姉妹がやったことだしさ。

一応義理としてな？」

「ありがとうしゃく！！

あー！

ボクの大好きなコーシー（コーヒー）しゃくうー！
波音！

一緒に飲もうしゃくう！！」

「それ一本しかねえから……飲み物……」

「回し飲みs——」

「あーっ！

もうこんな時間！

夕飯の支度しねえと！！

じゃあな美鶴！」

ビニール袋置いてダッシュ！！
家を出るとき親指立てておいた。

「あ……しゃく。」

まあいいしやう。

「このコーシーはボク一人でじっくり味わうことにするしゃくつ！」

ずぞぞぞぞー……。○

俺はその時まだ知らなかった。

美鶴が大の甘党で苦いものや辛いものが大嫌いだということを知ったとき、
「コーヒーなんてミルクと砂糖たっぷりなの奴しか飲んだこと無いとい
うことを！」

「んんんにつつつつつつつがああああああいしやあああ
あああくつ！……！！……！！……！！……！！」

「おーもだえてるもだえてる」

少し離れた位置からも聞えるぐらいの悲鳴だったな。

俺は少しの満足感を胸に帰路へ足を進めるのであった……

つづくかもお〜〜〜

あふたゝすとゝりゝだよ！お兄ちゃん！

「これ……。」

この前の怪我のお詫びに作ったんだけど……。
た、食べてくれるよね？」

しーんと静まり返った教室の中
メイナの声が響いた。

「しゃごくりつ。」

で、でもメイナの料理は……」

少しは学習した美鶴が断ろうとするのをシエラが遮った。

「大丈夫、僕も手伝ったから！」

爆発する可能性は1割ぐらい減ったはず！」

「しゃく!？」

それなら安心しゃくつ!!

いただきまゝすしゃく!!」

美鶴はメイナのから揚げを口に運んだ。

それを少し離れたところから見る俺と仁。

「なあ、波音。」

作家は物語のオチを決めるのに悩むと高確率で爆発オチになる……

……らしいぞ」

ほお。

そりゃまたなんだろうな。

「ささやかな豆知識をありがとう仁。」

しゃくでは！ え？熱？なら俺の情熱の熱で……（後書き）

あざっした！

いやー、風邪ってつらいもんですな。

たまに引くんですがあれはつらい。

インフルの方がつらいですが。

風邪は学校を休める意味で大好きです。

しゃくでば！　生徒会長は天使ですか？神ですか？

今日は6時間目から生徒総会。

一般生徒にとつては全くの時間の無駄だと俺は思う。

……いや、これは戦いなのだ。

睡魔とのスーパースリープ大戦αなのだ。

お、早速死人が出た模様だ？

誰だろうか。

「しゃあああんぐごごごおおおおお……」

今回は豪快にいびきまで……。

それを察した桐梨が美鶴のもとへやってきた。

いつものように生徒指導へ連れて行くのか？

と思いきや美鶴の鼻の穴になにかをつめたようだ。

あれは——コルクか？

あのシャンパンとかの蓋みたいなのやつ。

「ふんが……ふがしゃつつつつつぽおおっうんっ！……！」

鼻水にまみれた木のコルクがシエラに飛んで行く。

シエラが避けた。

メイナの所に行く。

メイナも避けた。

そこでコルクは軌道を大幅変更し何故か出刃の元へ。

ぱくつ。

oh!?

食った……。

食いやがった……。

出刃もどうやら寝ていたようだ。

寝ているとき特有の筋肉の弛緩によって

口がダストシユートのように開いていたようなのだ。

「むがつー！！！」

むっうっうー！！！！

むぼぼおおおっ！？！？！？！？！？」

「それでは、生徒会長の理伊田誠君からの閉会の言葉です。
お願いします」

あーそろそろ終わりのようだ。

美鶴もお目覚めだろうな。

「あー！

おっぱいしゃくうー！！！」

おきていきなりなに言ってるんだ。

もみもみもみ……。

しかも揉んでやがる。

まあ

「な、何するでござるかあ！？」

どうでもいいがそいつは相撲部の奴だぞ。

「いやあー終わった終わった……！！」

シエラがうーんと伸びをした。
おはようございます。

「まだ眠いしゃくうう。
しゃふわああああああ……。
しゃむにやむにやむ……………」

お前はまともな欠伸できないのか？

「もうこんな退屈なの勘弁して欲しいしゃくう。
なんとかしてなくせないんしゃくかねえ？」

美鶴は退屈極まりないしゃくうと顔をしかめた。

「そんなの生徒会長にでもならないと無理だろ？」

俺も俺で暇で仕方がなかったけどな。

「何しゃく？
せーとかいちよーって？」

「お前、ちゃんと中学校行ってたんだよな？
いや、小学校でも学級委員長とかあっただろ？」

知らないなんてそんなことあるのか？

「しゃく？」

ああ、知らないんだな。
つてかさ。

「いや、そんなばかんとなくていいから。
その萌えキャラしかやつちゃいけない表情なくていいからキモ
いから」

「生徒会長……」。

それは学校の制度を見つめ、生徒を見つめ、容姿を見つめ――。
自分と生徒の理想の姿を形成するために選ばれし代表者。
それが、生徒会長でっば……！！」

俺の後ろからにゅっと出刃先輩が現れた。
あんた神出鬼没だな相変わらず。

「つまりどうということしゃく？」

むじゅかちいことはわかんないしゃく」

いらつとした方は多いのではないだろうか。
奇遇だな。

俺もいらつとした。

「つまり――」。

学校で一番偉い人のことをいうでっば！！！！！！」

きらーんと光が溢れた。

いやぁ、それまとめすぎじゃないのか？

「そうなんしゃくかぁ？

ということは！学校全てが自分のものになるんしゃく！？」

「そうでっばそうでっば！」

いや、違っただろ。

最終決定権は校長か理事長だろ。
あんたも変なこと教えんなよ。

「しゃくふふふううううつうつ……」

いかん。

美鶴がまた危険な妄想に入っただらしい。
こうなると誰も手がつけられない。

「ほら、出刃先輩が変なこと教えるから……」

ため息混じりに抗議した。

「お、俺のせいでっば!？」

あんたのせいだよ。

キンコンカンコン……。
チャイムが鳴る。

お、次は日本史のようだな。
桐梨かあ。

・
(美鶴妄想内)
・

「生徒会長様あゝ!!
顎すりすりさせてえゝん!」

「いいしゃくよぉー!!」

もつとすりすりしてしゃくぅー!!」

「ああゝん私にもぉー!!」

「私にもよぉー!!」

「よいではないかしやくう!よいではないかしやくう!!」

とある事情により生徒会長になってしまった灼場山美鶴。
彼は今日も書記、会計、雑務係などの女子と戯れていた。

「灼場山生徒会長。

もうすぐ体育祭の開会の言葉の時間が迫っております。
ご準備を」

なぜか眼鏡をかけてボードを持ったシエラもいる。

「お!

副会長シエラあ!

お前もこっちに来いしゃく!

いっしょにtogetherしようしゃくぅー!!」

一緒にtogether……。

頭痛が痛い……?

意味的には一緒だよなあ。

「今は体育祭の方が先です。

全員炎天下のグラウンドで待機しておりますゆえ。

このままでは熱中症患者が数名出ると予測しますが」

眼鏡くいつ。

「そうしゃくか。」

ま、仕方ないしゃくね。

愚民どもの前にちよつと顔だしてくるしゃく！
チミたちは待っててくれしゃくくうく！」

ひらひらと手を振る。

その姿まるでドラゴンすら引くような……。

「「「はあゝい！」「」」

でもまあここは美鶴の妄想の中。

女の子は美鶴にべたばれというわけわかめな設定なんだろう。

「私は司会の職を勤めておりますのでご同行願います」

「もちろんしゃくよおゝシエラあゝ。」

後でたあゝつぶりかわいがってやるしゃくくうく！」

両手をわさわささせる美鶴の横をシエラが素通りする。

あいからわず相手にされてねえ。

妄想でもシエラは変わらないな。

「それでは生徒会長殿がご到着致しましたので開会の言葉を始めて
いただこうと存じます」

グラウンドの生徒の群集からは

「はやくしろよ！」

「あちいんだよクソが!!」

などとブーイングがポツポツと出ている。

美鶴はそいつらを的確ににらんだ後、ゆっくりと威厳をとたたせるかのように台へと登る。

それがまた生徒の怒りを増長させる原因となっているのだ。

キーーーーーンとマイクを使っているものなら

大抵知っているあの音が鳴り響き、すぐにやむ。

「あーっあーっマイテスしゃくマイテスしゃく」

またもや生徒の怒りゲージ上昇。

そんなこと知らずに「シャコホン」と息をつく。

「みんな、今日は待ちに待った体育祭しゃく!!」

体育祭だけに、たいい、くっさーーーーーい!!!!!!

なーんちゃってしゃく!!!!!!

風吹く。

木の葉舞う。

「えー、生徒会長、どうもありがとうございます。」

生徒のみなさんは生徒会長に大きな拍手をお願いします」

シエラが、かけている伊達眼鏡をキラリを

光らせ表情ひとつ変えずに拍手を促す。

パチ……パチ……。

パチパチパチパチパチ……。

「どーもしゃくうー
どーもしゃくうー」

調子に乗り始めた美鶴。

再びギャグを叫ぼうとマイクを握った。

その時だ。

「全員構え」

いきなりシエラ副会長がマイクに言葉を吹き込んだ。

刹那、生徒全員が足元にごろごろ落ちてる石を両手に好きなだけ持ち出しはじめる。

矛先は、当然灼場山生徒会長。

「しゃ・・・しゃく・・・？」

「放て！」

シエラ副会長がもののけ姫のエボシ様の様に叫んだ。

同時に生徒全員が美鶴に向かって一斉に石を投げ出した
もちろんシエラ副会長も投げる投げる。

どさくさにまぎれて空き缶を投げるやつもいる。

皆鬱憤がたまっていたようだ。

ガッ！！ガガッ！！ガガガッ！！ガガッ！！

「いいいい痛い痛い痛いしゃくう！！！！
やめてしゃくう！！」

石を投げるのやめてしゃくうう！！

痛いしゃくぶふううううううう……」

こう、最後の方の恍惚とした感じだな。
なんか……言いたくないけど快感的な？

「弹幕薄い！

なあにやってんの！？」

司令官シエラがもっと石を催促する。

「もうやめてくれしゃああああああああああ……！！」

・ ・ ・

「はいここで第二期六八七年島丸寺の変だ。

ここで重孝に反逆した武将がいるのだが……。

これは当然皆知ってるよな？

おい灼場山、答えてみる」

「おい、美鶴、当てられたぞ」

少し揺すってみたが一向に起きやしない。

こうなったらこの前のようにシャーペンで顎をだな。
ぶっすりだな。

ガバッ！！！！

「いい加減にしろしゃく！

なあってボクばかり当てるんしゃくかあ!?

当てるならシエラに当てるしゃく!!

こいつボクを裏切ったんしゃくよお!?

反逆罪しゃく!!!

コイツこそ当てるべき奴じゃないしゃくかあ!?

しゃああん!?

教室が静かになった。

な、どうしたんだこいつ。

俺のシャーペンを握った右手が固まる。

しばらくたって

「灼場山?

それはお前から俺に対する反逆とみなしていいな?」

桐梨がぴくぴくと額の血管を浮き上がらせつつ美鶴をにらみつけた。

「しゃく……?」

なんで桐梨先生がここにいるんしゃく?」

おめめをぱちぱちさせた。

当たり前だろ。

今は日本史の時間だぞ?

教室が失笑に包まれる。

誰かが

「灼場山の変だー!!」

とか言って教室が爆笑の渦になる。

「ちょっと指導室来い。

昨日完成した桐梨流処刑術その108を見せてやる」

桐梨は美鶴の腕をがちり掴んだ。

「しゃくつ!?

は、離せしゃくつ!!

ボクはただ寝てただけしゃくよおうつ!!!」

火に油を注ぎやがったな。
墓穴を掘ったバカな美鶴。

「余計断罪じゃ。

安心しろ。

苦しむのは一瞬だけだ」

「しゃあああああ!!!!

波音、波音!!

助けてくれしゃあああくつ」

他人のふり他人のふり……。

からむとろくなことにならない。

つづくかもおゝ

（放課後 生徒指導室）

「ううっ……。」

うううううう……。

おててがもう痛いしゃくううううう……」

「まだだっ！！

まだ終わってない！！！！

あと原稿用紙二五枚！

この御経を書き写すまで絶対に帰さんぞ！！！！！！」

「しゃああああああああああん！！

しゃああああああああん！！！！」

「ああもう泣くな！！

女々しいそして鬱陶しい！！」

「きゃああっ！！

私の蛙ちゃんがパニック起こしてる！！

大丈夫だよ。

よしよし……」

生物担当の派真野先生。

「わあっ！？

俺のカップめんが沸騰しとる！？」

知らん眼鏡チビデブ先生。

「ぎゃーーーー！！」

「コーヒーが書類に……」

バレー部の顧問の先生。

「パソコンが固まったーーーー！！！！」

美鶴の泣き声は

周囲の万物に被害を及ぼす……時がある……。まじか。

しゃくでば！　ゝ生徒会長は天使ですか？神ですか？ゝ（後書き）

結論から言うと天使でもないし神でもないですね。
なんていいいますか。

ただのアホ？

つてか顎？

アゴ？

a g o みたいな？

では、ありがとうございました。

しゃくでば！ 女のキレ

チャイムが鳴る。

時はお昼休み。

今日も仁や遼たちと机をあわせて
男だらけのお弁当つつきである。

「ん？

そっぴや、シエラとメイナは？」

仁が毎回入っているから揚げを噛み噛み言った。
ああ。

「なんか年に一度だけ販売される幻の
チョコバナナケーキを高速で買いに行ってるぞ」

うん、たしかそうだったと思う。

「なんだ、そのチョコバナナケーキとやらは。
うまいのか？」

「なんでも、材料がこりっこりにこだわっているらしいぜ。
生クリームはもちろん北海道産。
カカオは現地から選りすぐりの……」

ガラッ！

「波音！

波音！！

「僕勝つたよ!!」

お、それはよかったなあ。

超古代文明の最終兵器でもこういうところは女子なんだなあとしみじみと考えてしまう。

わはーと笑いながらチョコバナナケーキをすりすりするシエラ。中のクリームこぼれれば楽しいことになるのになあ。

「食べる前に手洗ってこよつと」

そういつてシエラはチョコバナナケーキを自分の机の上に置いたと思うとマツハで教室から出て行った。

「マンガとかでさ」

ん？

「なんだよ急に」

「よく楽しみを後にとっておくキャラいるじゃん？」

いるいる。

「そういうキャラってさ。」

大体他の奴らにその楽しみ奪われるだろ？
だからシエラもひょつとして……」

ははは。

「んなわけねーだろ。」

よく考えるよ、仁。

ここは現実だ、マンガやアニメとはワケが違っただぜ？」

笑い飛ばした。

「ふんふん、僕もそう思うしゃくよお。」

やっぱカレーには干し葡萄しゃくね」モゴモゴ

話に割り込もうとするその姿勢は認める。

けど話が神がかかってるぐらいかみ合っていない。

神だけに。

俺死ねばいいのかもしれない。

ん？

なんかモゴモゴ言ってなかった、さっき。

「おまつ、それっ……！」

「ああ、これしゃく？」

シエラの席の近くにおちてたんしゃくよお」

はしゃいでいる誰かが落としたんだな。

「だったらシエラのものってすぐ分かるよな？」

お前なんで平然と食ってんだよ」

仁が反撃する。

それぞれ、俺もそれ言いたかった。

「しゃくう？」

落ちてるものなんて誰のものでもないんしゃくよ？

ただ拾ったやつものになるだけしゃく。
これは僕が拾ったんしゃくからもう僕のものしゃく」

あのなあ……。

「いいか？」

このご時世そんなものが通じるわけねーだろクソ顎。
シエラが来たらどうなるかぐらい分かるだろ？」

「残念。

もう来てる」

ドアを開けて呆然と立ち尽くしている。

そのシエラの目は美鶴の手の中にあるチョコバナナケーキの
パッケージに釘付けた。

すると美鶴は肩をすくめ、やれやれのポーズでシエラに向かって
ゆっくりと威厳を漂わせながら歩いた。

クソウゼエ。

「まあまさ、シエラ落ち着いて考えるしゃく。

君もアホじゃないんしゃくからわかるしゃくよね？」

コレは落ちてたんしゃくよ？

君の席の近くに落ちていただけしゃく。

つまりは誰の物でもないんしゃく。

分かるしゃくね？」

「僕チョコバナナケーキ……」

シエラ、放心状態でそれだけ呟く。

「落ちたものはただ拾った人のものになるだけしゃく。拾ったのは誰しゃく？」

「僕の……チヨコ……バナナ……」

「そう！

僕しゃくよ！

ならコレは誰のものかわかるしゃくね？

ヴおく（僕）しゃくよ！

つまりは僕に食べても良いという権利が与えられたということしゃく。

だから——」

「うつ……うつうつ……」

お、おい、美鶴。

シエラ泣いてるんじゃないのか……？

「んん〜？

も・し・か・し・て・泣いてるしゃくかあ？

でも今回は悪いのは僕じゃないんしゃく。

ちゃんと落とさないようにしてなかったチ・ミ！

つまりシエラが悪いんしゃく。

まあ普段は僕に暴力しかふるわないシエラの泣き顔なんてレアしゃくから特別に許してやるしゃく。

ん〜？

鬼の目にもなんとなら。

その面を拝んでやるしゃく〜」

嗚咽をあげているシエラの顔を覗きこむ美鶴。

「ひっ、しゃあああっ!？」

シエラは美鶴の顎をがっしと掴んだ。
そのまま物凄い勢いで足をピッチャーのように高く上げ
教室の壁に向かって美鶴を投げた。
というよりたたきつけた。

その時間コンマゼロ以下のスピード。
下着も見えやしない。

そのままシエラは美鶴を何度も何度もたたきつけた。
悲鳴が聞えないのはおそらく……。

いや言うまでもない。

地獄の蓋は開いたのだ。

最終的に美鶴はゴミ箱（燃える方）に叩き込まれた。
それでもまだ足りないのか
全体が入るまでにぎゅーっと押し捲るシエラさん。

「ちょ、シエラやめなって！

汚いから！」

メイナが両腕をひっぱってようやくシエラは収まった。

「うう、姉さん……。

僕……、僕の……。」

そのまま姉に抱きついて泣きじゃくる。

「分かった分かった、私の半分あげるよ」

シエラの頭をよしよししながら姉の威厳（といっても双子）を見せ

付けてくる。

いやはやそれにしても

今日は非現実的なことばかりが起こるなあと。
そうおもった日であった。

issues .

This story cont

しゃくでば！ 女のキレ（後書き）

ありがとうございました。

いや、暑いですね。

体調崩しそうですね。

ぐっすりと寝て、しっかり食べて。

体調維持がんばりましょう。

しゃくでば！ 何事も社会経験なり

『本日のオススメ商品はこちらッ！

なんと、つけるだけで幸せになれる魔法のイヤリング！』

『まあ、つけてみたら何か幸せのオーラを感じますわ！？

これは大変いいきます。あくまでも一個人の意見です。
でも……、お高いんでしょう？』

『いえいえ、心配はご無用です。

ジャポネット橋本が相手会社との交渉に交渉を重ねましたので。
値切りに値切りましたよー？』

『まあ本当ですか？』

『では、気になるお値段です。

な・ん・と！

お値段は約半額の……』

『は、半額の……？』

蒼はごくつと喉を鳴らした。

詩乃家のテレビの前でお茶をすすっている。

その眼はいたって真剣だ。

おい、だれかとめてやれ。

『六万八千円！

六万八千円ですよ！！』

「た、高っ！」

ああ、よかった蒼はまともだった。

「欲しいしゃく!!!」

えーっと。

蒼はまともだったんだ。

そこまではいいんだ。

気がついたら誰かよく分からないけど語尾にしゃくをつけるやつがいたんだ。

何を言っているのか自分でも分からない。

「ど、どうしてここにいますか!？」

蒼の疑問はもつともだ。

「まあまあ、僕のことは気にするなしゃく!」

蒼は沈黙する。

窓の外が暗くなった。

いや、違うね。

太陽とは明らかに違う光が満ち溢れていた。

陽天楼、つまりネメシエルが美鶴にその砲門を向けていたのだ。

「わ、わかったしゃくよお!

わかったしゃくからそのレーザー充填をやめるしゃく蒼オ!」

「……………」

更に光が増していく。
美鶴の額に汗が浮かぶ。

「おろしてくださいましょく蒼様アア！！
いや、蒼姫！！
蒼お嬢様っ！！！」

・
(翌日、教室にて)

「……と、いうわけでそのペンダントが欲しいんしょくよお！」

はあ。

頭大丈夫か、こいつ。

「そのボツタクリイヤリングを買う金を貸して欲しいしょくう とか
言つつもりなんじゃないだろうな？」

俺は手にもったジュース缶を傾けた。
中身はなし。

缶をゴミ箱に向かって投げる。
っしや、一発で入った。

「……………」ポッ

なんで赤面するんだ。
予想が当たってしまったわけか？

「買うなら普通、自分の金で買うだろ。」

今いくらかもってんだ?」

仁はまだ少し残っているぶどうジュースを口に放り込んだ。
ああいいなあ。

俺も少し多めのそっち買っておけばよかったよ。

「あ、あげないしゃくよ?」

美鶴はびくびくしながら俺達を見始めた。

ああこれが日々街の不良にカツあげされている結果か。
べつにとらないから、安心しろと。

チャリーン、チャリーン……。

金が机の上でくるくる回っている。

銅色が二つ。

あと真ん中に穴が開いた黄金色が一つ。

「に、二十五円……」

「しゃくうん、僕どうすれば……」

美鶴が頭を抱え机にぶつけたときだった。

「それなら良い方法が——」

「それなら良い方法があるぞ!!
受け取れ!!」

「で、俺の出番がでつば……」

シエラが出刃先輩の持つているチラシを掠め取った。
それで飛行機を折り、美鶴に飛ばした。
時間にしてそれは約三秒。

ヒュ~~~~、ブスッ。

美鶴のぱつちり開いた目に飛行機のとがった先が……。

「しゃあああああつー!!」

ひこーきがおめめにしゃあああああ!……!……!」

「お、俺の 出刃ん が……」

(出番)

・ ・ ・

「デパートでのバイト?」

シエラの切り出したないように頭がついていけなくて
思わず聞き返してしまった。

「バイトって何しゃく?」

「そそ、デパートの缶売り場でやってるやつ。
時給がなんと二千円でっば!! だって」

シエラは華麗に美鶴の疑問をスルーして説明を続ける。

「お、俺の台詞がでっぱ……」

まあ約一名後ろで嘆いている人がいるが。

「バイトって何しゃくうう??」

とにかくだ。

「よかつたな、美鶴！」

一日五時間ほどやれば一週間で買えるよつになるぞ?
内容はともかく」

美鶴の肩を叩いてああ解決したと一人気持ちよさそうな仁。

「だから、バイトって何しゃああくうう!??」

ああ、もう五月蠅い。

「ちょっとした仕事をして、ちょっとしたお給料をもらつてとでっ
ぱ!!--」

さっすがっす先輩。

面倒くさい役目を自ら引き受けてくれるっ。

「そうなんしゃくか!??」

ありがとうしゃく出刃先輩!!--」

「フッ、フッフ……」。

フッフッフッ!!--

フハハハハハッ！！！！！」

やっとこさちゃんとした出番があつたことに対しての喜びが溢れんばかりに出刃先輩を光らせている。
いやたとえじゃなくて本当に光ってる。

・
(そんなこんなでバイト当日)

のんびりとヒゲを蓄えた店長さんが美鶴を迎えた。

「ああ、君が灼場山くんだね？

いやあ、たすかったよぉ！」

このバイト全然人気が無くてさあ。

店員はうつ病とかですぐ仕事休んじやってねえ。

困ってたんだよねえ。

いやあ、時給は思い切って上げてみるもんだね、はっはっは！！！」

「僕は難しい話はよく分からないしゃく！！！」

「いや、こつちの話だからいいんだ。

じゃあ早速この着ぐるみを着てくれるかい？

「しゃく？」

・
・
・

「おいしいかにはいかがしゃくかあ〜？
おいしいかにしゃくよお〜！！」

子供が泣き出した。

「ママー、アレ怖い……」

「うええ……ぐすっ、うづっ……」

「助けてー！

おかーしゃあーん！ー！」

oh……。

それを俺と一緒に隣で見ていたシエラが一言。

「大好评だね」

そうだね。

つづかない〜

しゃくでば！ 何事も社会経験なり（後書き）

ありがとうございました。

ブログの方だとこの最後に画像が入っています。

まあ見なくても大丈夫な画像ですよ。

てか見ないほうがいいですよ、やめておいたほうが良いですよ。

・・・念のためにURLを・・・。

`http://unsungtwilight.blog63.fc2.com/blog-entry-288.html#end`

ここですね。

最後の方です。

やめたほうがいいですよ、お目目腐りますよ。

しゃくでばー！ 嗚呼血に染まりし我が資本よー

前回のあらすじ。

美鶴、バイトをスタートさせる。
以上。

美鶴がバイトを始めて五日目。

だんだんとこのバイトにも慣れてきたようだ。

まあ相変わらず物凄い勢いで

罪無き子供たちに日々トラウマを植えつけているみたいだが。

バイトの人たちも彼女ができたとか

今日の占いがラッキーだったとか

そんな続く幸運でばつぽつと戻ってきたようだ。

店長の使う胃薬もゆっくりと使用回数が減りつつあるこの頃……。

「美鶴、今日もバイトか」

俺はつきつき気分的美鶴に話しかけたのだった。

「そうしゃくよおん」

いやあー毎日忙しいしゃくよおん？

どっかの働いてない誰かさんと違って。

働かざるもの食うべからずしゃくね！

しゃっしゃっしゃっ！」

俺をみてにやける美鶴。

「おい。」

それ俺にいつてんのか……？」

ぴきつといらつとした。

「いんやあゝ？」

どうしゃくかねえ？」

しゃくふふふう」

「滅せよ」

俺は美鶴に大きく右からのパンチを食らわした。
まともにくらった美鶴は飛んで行きゴミ箱の中にダストイン。
上から乗って詰めてやった。

「じゃぐう……」

上から蓋もする。
ボケが。

「ん？」

シエラ、メイナ、お前らもバイト始めたのか？」

その横をすたすたと歩く二人。
ポスターをもつてわくわくした表情だ。

「そだよ。」

いやあゝ毎日大変だよ。

どっかの働いてない誰かさんと違って！」

シエラがにつこり笑ってそういった。

メイナは言いすぎだよ、それは。と言った目を向けている。

「お前、今夜飯なし」

俺はシエラに冷たく言つとその場を離れた。

「波音、ごめんっ！

ごめんって、ごめんなさいっ！！」

「働いてるお前は大変なんだから飯も食う時間もないんだろ？
じゃあ今夜はご飯なしでいいよね？

ん？

嫌なの？」

「……ごめんなさい」

「謝るぐらいなら初めから言つな、ボケ」

「……うう……」

最終兵器を言い負かしてやった。

調子に乗るんじゃない。

ってか、俺は俺で帝国郡のために働いたりしてるからな。

（場所は変わって美鶴バイト現場）

「あ！

いかん、しまった！！」

店長が何かを思い出したように右頬を叩いた。

「ど、どうしたんです?」

『健康野菜じうす』と書かれたダンボールを運びながら
バイトが心配そうにたずねた。

店長は手の甲に張り付いた割引のシールをめくりながら

「今日な?

サプライズイベントでうちの店でヒーローショーやるんだよ。

で、ウチの店の着ぐるみが悪役やることになってたんだが……」

「はあ」

「まだ悪役のメンバーが決まってないんだよね」

店長は壁にもたれかかった状態の着ぐるみを顎で指した。

バイトは目線をたどり

「ご丁寧にちゃんと額のところに『悪』って書いてあるじゃないですか……」

そんなの見た目で分かるだろと、ため息をついた。

「で、さ。

あの悪役なんだが美鶴君なんか適任だと思うんだ。

みんなどう思う?」

いつの間にか倉庫の全社員に話しかける形になっていた。
店長の意見を聞いた全員から歓声上がる。

『みんなー、今日はカイセンジャー（ヒーロー名）のショーにやってきましたくてありがとー！！』
そこにいる大きなお友達もねー！！』

「むっ！

いかん、もう始まってしまっ

振り向いた店長の前に

「ちよりーっすしゃくうー！

今日もバリバリ働くしゃくよおー！！」

やっとゴミ箱から抜け出した美鶴が立っていた。

「おおグッドタイミング。

唐突で悪いがこれ着てあのショーに出てくれないか？」

「しゃく？

なんしゃく、これはあ？」

「実はかくかくしかじかでこうこうというわけなんだ。
頼む。

上手くやれば給料上げとくから！」

美鶴の目が¥に変わる。

いや本当に変わってる。

「まあああかせるしゃああああくっ！！！！

ハリウッド並のボクの演技力にひれ伏すしゃくっ！！！！」

美鶴は鼻息も荒く金の力に負け引き受けたのである。

「おお!!」

ちよつといかんせんこめかみの血管が浮き出そうになったけど頼
ましい!!

よろしく頼むよ!」

美鶴と店長が手を握り合っている後ろでは

「てかなんも練習なしにぶつつけ本番ですか……」

「まさにサプライズっすね……」

バイトの人や社員の人ひそひそと話し合っていた。

・ ・ ・

だるい学校が終わりぶらぶらと仁と男二人で

虚しくウィンドウショッピングに来ていた俺らの目の端に
一枚のポスターが入ってきた。

「ん？」

ヒーローショー……?」

だっさい戦闘員とかに星人が描かれている。

「しかもあの顎のバイトのどこじゃねえか」

仁が欠伸をしながら場所を指で指した。

「暇だし行ってみるか」

仁にどうする？と首を傾げる。

と、俺達の間に入ってくる人が一人。

「それはいいこと聞いたでっば！！」

先輩じゃないですか。

あいからわずどこから出てきたんだあんた。

「なんであんたまで……」

仁の呟きを聞かなかったように出刃先輩は

「まあいいじゃないかでっば。
行ってみようでっば」

俺達二人の背中を押して進む、進む。

結構会場は近くにあった。

「おお結構な人じゃねえか」

思わず仁が声を漏らす。

「もう始まってるでっばか」

とりあえず空いている場所を見つけて座る。

ばけーと時間を潰すには丁度良い暇つぶしだ。

「観念しろ、この大悪党め！
その子から手を離せ！」

赤のきんきらの衣装に身を包んだ若い男の人の声が会場にこだまする。
それをあざ笑うがごとく

「しゃーっしゃっしゃっしゃっ！
観念するう？

このボクがあ？

ハッ！

無理しやくな！

それにこの子はボクのモノしやくよ！」

美鶴は赤い全身タイツに蟹の頭を被っていた。

顔も赤くペンキで塗られ、顎が蟹と一体化している。

いったいどうやって被ったんだろうか。

つと、高笑い——というか馬鹿笑いをしながら美鶴は観客席に乱入して

適当に捕まえた少女の尻などをチロチロと触りまくりはじめた。
すいませんここに犯罪者がいます。

「くそっ、人質とは汚いぞ！
男なら正々堂々と勝負だ！！」

青のきんきらの衣装を着た男の人が美鶴に人差し指を突きつけた。

「な、なあんしやくかあ！？
僕とやるしやくかあ！？」

威嚇に出る美鶴。

てかこのセリフ前に聴いたことが有るような。
てかはやくやめさせろよ。

人質の女の子も震えて泣いてるじゃないかよ。
あれ絶対別の恐怖以外の何者でもないだろ。
青に威嚇をしながら

「いいしやくよお？

全員まとめてかかってこいしやく！！」

美鶴はしえーとよくわからない憲法のポーズをとった。
お、なんかリアル。

「よし、みんな行くぞ！！

フォーメーションΩ！！」

なんでそこだけ無駄にかっこいいんだよ。

レッドが後ろに控えるカイセンレンジャー全員に指示を出した。

どうでも良いがこのカイセンレンジャーの全員の名前だけでも紹介
しておこうと思う。

赤き海鮮クラブレッド。

必殺の後ろ回し蹴りは半端じゃない。

青き怒りスカイブルー！。

海鮮なのになぜか空だ。

綺麗なものにはとげがあるウニイエロー。

いじめられるに違いない名前である。

鋼の石で敵をも破るサンゴピンクコンブラック。

石と意志をかけているらしい。

サンゴは生き物だというのに。

まあそれら全員がカニカニ星人（美鶴）に襲い掛った。
レッド、ブラック、ブルーがパンチやらキックやらを繰り出す。
それに被せるようにコンピューターで作った「バキッ」「ドガッ」
効果音が流れる。

だが問題があった。

本人は喰らってるふりをしているのかもしれないが
残念ながら必死に避けてるようにしか見えないのだ。

「ねえ、あの怪人よけてるよね」

俺の座っている前の子供が隣の子供に話しかけた。

「えー喰らってないのかな？」

その声が聞えたのかどうかは分からない。
急激な異変が起きたのだ。

美鶴の演技が急激にリアルになったのだ。

本当に喰らってるように見えるのであ……る？

いや喰らってる喰らってる！

イエローとピンクの攻撃もろに喰らってるよ！

でかい効果音の音でリアルな子気味いい音は聞こえない。
だが俺にはわかる。

あのいかにも「こいつ打ち殺したる」と言わんばかりのフォーム。
ああ間違いない。

奴らだ。

シエラとメイナだ。

あいつら何のバイトかと思ったらこれだったのか。

ピンク（多分シエラ）の重いパンチが美鶴の腹に食い込む。
鈍い音。

イエロー（多分メイナ）の蹴りが美鶴の顎を蹴り上げる。

ぐぎよっ、と嫌な音。

「しゃぐうつ!!」

じゃぐうつ!!!!

や、やめてしゃぐうつ!!

おねがじゃぐうつ!!」

当然この顎の肉声も効果音のせいで聞こえない。
なんというかざまあみる。

「さ、さあ、行くぞ!!」

俺達の最終奥義!!」

レッドも目の前の光景についていけないじゃないか。

こんな暴力シーンあったか、とかどうか振り返ってるんだろう。
でも台本どおりに進むシヨ!。

「うううううううううう……」

血まみれでもなお立ち上がりカイセンジャーを睨み付けるカニカニ
星人。

よくやったよ美鶴。

お前はよくやった。

だからもう休め。

カイセンジャーは組み体操みたいな姿勢をとりレッドが叫ぶ。

「最終奥義受けてみよ!

渋谷で海をみちゃっタイフーン!!」

だっさ。

全員分の体重をもろに受け止め、美鶴が仰向けになる。

「……………しゃ……………あ……………」

天を貫くようにして美鶴はステージ上に倒れた。
燃えていたよ。

美鶴は燃え尽きていた。
真っ白にな。

「いやゝ見事な演技だった。
もうお偉方も大満足さ！

ほら、最後のポーズを……………って美鶴くん……………？
おい、シヨ―はもう終わったよゝ？」

店長が笑いながら人影の途絶えたステージに上がる。
最後の願いを聞いてもらえた人のように……………。
美鶴はそこに寝転がり動かない。

「し、死んでる！」

口を抑え目を一杯に開く店長。

いや、しっかり生きてますから。

大丈夫ですから。

そのただならぬ様子にお偉方が立ち上がり野次を飛ばし始めた。

「こらー！！」

あれだけ悪役には怪我を負わせるなど……………ん？

イエロー役とピンク役はどこ行った！？」

お偉方が視線を巡らせるとそこには脱ぎ捨てられたピンクとイエロー

ーのコスチュームがあつた。

あいつらすげえはやい逃亡だな、おい。

殴るだけ殴って給料奪って逃げやがったよ。

「救急車！救急車をよべ！蟹役の人血まみれだ！」

「脱がせろ！」

「だめです！抜けません！！！」

とりあえず帰ろう。

なにやらぱつとしない何かを胸の奥に抱えながら俺達は帰路に付いたのだった。

つづくかも

後日談

「おっつす美鶴〜！」

あのペンダント買えたんだってな？

よかったじゃないか！

あれからどうだ？」

美鶴はクラスのとある男子にペンダントについて問いかけられてい

た。

「全然」 ガンッ！！（野球のボールが当たった音）

「大丈」 バリンッ！！（マンションから落下してきた植木鉢が
あたった音）

「夫」 カーンッ！！（小さな看板が降ってあたった音）

「じゃぐよお？」ピクピク

いやあ……。

全然大丈夫に見えないから不思議である。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ……」 ぷち。

「シエラ姉様、久しぶりですっ！」

今までにないぐらいの不幸の連続だ。

まさか最後は一五二万トンの戦艦で潰されるなんて。

どれだけの可能性を秘めた不幸なんだろうか。

まあ美鶴だしいいやもう。

しゃくでは――嗚呼血に染まりし我が資本よ――（後書き）

ありがとうございました。

美鶴がなばれーっ！

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム その？

ある日の放課後。

仁はパソコンをカタカタいじっていた。

そこに

「よっ！！

しゃく、仁！」

美鶴がニユツと飛び出てきた。

「うおあっ！！

な、なんだよいきなり机の下から出てくるなよ！」

仁は思わずこぼしたお茶をハンカチで拭きながら美鶴に食いかかった。

「まあまあ、固いこというなしゃくよお！

しゃっしゃっしゃ、僕と仁の仲じゃないしゃくかあ！」

「どんな仲だよ……。

大体今までお前と関ってたシーン一回もあつたか？」

仁はハンカチを絞りそれを椅子の鉄パイプにかけた。

やれやれとPCに再び向き直りキーボードを叩き始める。

「あー！

そっつえばなかったしゃくねえ」。

いや、これが主役と脇役の差つてやつなんしゃくかねえ……」

ぼつりとそう呟くと腕を組んで頷く美鶴に
仁は

「てめえ冷やかに来たのか？

大体お前は本編に一回しか！

しかも美鶴のみの字もなかったじゃねえか！

俺のほうはまだマシってもんだ！！」

「な、なあんしゃくかあ！？

やるしゃくかあ！？」

「なんでそうなるんだよ……」

「いくしゃくよ！

こんなヒョロいもやしっ子に負けるわけないしゃく……！

シヨワッチ！！」

「うわっ、まじかよ……！

くそっつ……！！」

・
(十秒後)
・

「しゃ……く……」

美鶴は瀕死の状態で横たわっていた。

「よっわ……」。

「じゃ、じゃあ俺帰るわ」

仁は鞆を肩にかけるとため息をつきつつ
教室から出て行こうと歩んだ。

「待つしゃく!!」

お願いがあるんしゃく!!

争うつもりなんてなかったんしゃく!!」

美鶴ははっと起き上がり涙をさめざめと流して
ゆるしてくれしゃく!!とお願いを始めた。

仁は頭の上にはてなを浮かべつつ話を聞くことにした。

「だったらはじめからお願いしろよ……」と
心の中で毒づきながら。

・ ・ ・

「で？」

何？

変な要求だったら一秒で断らせてもらう」

仁は腕時計を見ながら言い放つ。

「大丈夫しゃくよお。

ただ、シエラとメイナとオマケの蒼の
僕が主人公のえっちなゲームを……」

「断る」

「なんでしゃく!？」

僕まだ最後まで言っていないしゃくよお!？」

美鶴は唾を撒き散らしながら仁の胸倉を掴んだ。

それを蹴りではじきとばしながら

「どーせエロゲーだろ？」

無理無理、第一そんなゲーム作る気もないわ!！」

仁はドアから出て行こうとした。

その前に立ちはだかり美鶴はちつつちつと指を振って

「ブブブーしゃく。

話は最後まで聞かないから間違っうんしゃくく!！」

正解はそのエッチなゲームを明日までにつくれ　しゃく!！」

思いつきり仁がずっこけた。

俺もずっこけた。

なんだよその要求は。

「ただ単に期間がカオス的シビアになっただけで

結局同じじゃねーか!！」

しかもなんでも願いなのに命令形なんだよ!！」

てかんなことできるか!！」

ふざけんな!！」

「しゃくく?」

仁、あんなにパソコンかたかたうてるんしゃくから
ゲームも早くつくれるんじゃないしゃくかあ?」

「お前なあ……。」

ゲームってのはすっぱえ量のプログラムがいるんだぞ？
それを一晩でやれと？

ばかばかしい俺は帰る！」

あ、それ死亡フラグだぞ仁。

「おおっとお。」

いいんしゃくかあ？

これがどうなってもお」

仁は振り返って驚愕した。

そう美鶴の手には……。

「俺のノートパソコンがつ！

いつのまにっ！！」

仁の相棒のPCがつかまれていた。

「さ、どうするしゃくう？

断るんしゃくう？」

「くそっ！

こんな雑魚なら力づくで……。」

仁が飛び掛ろうと姿勢を低くする。
だがそれを見越したかのように

「おおっと、それ以上動いたら……。」

「こつするしゃくよお?」

美鶴はPCを叩きつける姿勢に入った。

「くっ……くそっ!

わーった、わーったよ。

何とかする……」

「そうそう!

それでいいんしゃくよ!!

しゃっしゃっしゃ!!

いや」『しっこゆうよ』とか何とかで

僕もういろいろ『できない』しゃくから溜まってるんしゃくよお
」。

それにあの女共はスカートめくりすらさせてくれなかったしゃく
からねえ」。

良いきぶんしゃくう」

美鶴の顎から美鶴汁が滲み出す。

大体これ出るときはやらしいこと考えてるんだ。

もう見て分かる俺が嫌になってきた。

仁はひそかに心の中で

(こつちにだつて考えはある)

そう思っていたそうな。

つづく(まじで)

おまけ。

「おまけって何ですか、おまけって？
何ですか？」

私の体はあまり需要がないと？」

「めっ、目が怖いしやくよお、蒼お……」

「わ、私だって好きで……。
こんな……体になっただわけじゃ……」

ごめんね、蒼。

それ俺(筆者)の趣味だわ(笑

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム その？（後書き）

まさかのその？

びっくりですよ。

てか俺はロリコンじゃない。

勘違いしないでくださいね。

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム？

翌日。

「ほらよ、出来たぞ」

仁は美鶴にUSBを投げて渡した。

「おっ！

どーもしゃくう〜」

美鶴はそれを顔面で受け止める。

「オラ、さつさとPC返せ」

「分かったしゃくよお。

ホレ、しゃく」

それを隣で見ていたメイナが

「関係ないけどさあ。

お店のレジってお金受け取ってから商品渡すじゃない？」

ん？

それがどうかしたのか？

「いや……別にいいんだけどさあ……」

それにしても眠いな。

「今夜はシエラもメイナも蒼も寝かさないしゃくよお〜？
しゃっしゃっしゃー！」

お前の独り言は時々思っただが
ほんつとくに気持ち悪いなあ、おい。

・ ・ ・

学校が終わり帰宅。

肩を叩いて「つかれた〜ただいま」と言うと
俺は自分の部屋に入った。

「あーつかれた」

「おっ、ただいましゃく〜波音〜！」

何だ、美鶴か。

「おお、ただいま美鶴。
先に帰ってたのか」

鞆を床に置いてごろんと寝転がる。
やっぱり落ち着く……。

「そうしゃく！
というわけでパソコンをつけて欲しいしゃくー！」

ったく……。

「はいはい、わーったよ。
パソコンのつけ方ぐらい一人で……は？
お前なんで俺の部屋にいるの？」

「だって家にパソコンないんしゃくもん！
ぶう！」

可愛くない。

「いいかげんそれやめろ。
×るぞ、こら。」

勝手に人の家に入り込みやがってこら

美鶴を後ろから羽交い絞めにしてやる。
逝け。

「わー！
ごめんしゃく、ごめんしゃく！！
謝るからその手をはなし……て……」

・ ・ ・

「はあ？

仁から作ってもらったエロゲー？
何やってんだあいつ。

「一晩とか嘘だろ？」

「嘘じゃないじゃく！」

仁はすごいんじゃくよ！」

それは知ってるが……。

まあとりあえずやってみよう。

ゲームスタート！

「MITSURU QWST！

よく来たな、ベイベー。

何？

現実が怖い？

はっ、だから？

別に俺自身はそれほど……（以下サブタイトルなのに五十行ぐらい続く）」

な、なんじゃこの文章……。

アメリカンなのになんかエロチックっ！
つまり素敵。

「ほほう、RPGエロゲときたじゃくかあ……。
マニアックで興奮するじゃくっ」

美鶴の顔といたら……。

なんだろう、このぶん殴りたくなる顔は。

俺自身平和主義者だからそれほど人を殴ったりしないんだが
こいつには人から殴られる要素しか気がする。

「はやすぎるだろ、落ち着け。」

まだサブタイトルだ。

てかお前絶対汁たらすなよ。
俺のPCなんだからな」

「わかってるしゃくよおん」

つつーと一滴の……。

「言ってるそばから!!」

美鶴の頬に俺の拳がめりこんだ。

・ ・ ・

名前を入力してください。

みつる ↓ 決定 ▼ 戻る
| | | | |

・ ・ ・

画面が点滅したと思ったら急に明るくなった。
画面に映っていたのは……俺？

「みつるよ！」

お前を呼んだのは他でもない。

シエラ姫が魔王に連れ去られてしまった！
助けに行ってくれるかね？』

↓ もちろんしゃく！！！（むふっ）

▼ ヤキがまわったしゃく……

『おお、私はそう答えてくれると思っておったぞ！
ではこれをもっていくがよい』

モザイクソードを手に入れた！

ゾームの盾を手に入れた！

ネイキッド服を手に入れた！

100Gを手に入れた！

世界地図を手に入れた！

グエルトリューを手に入れた！

フェニックスのくちばしを手に入れた！

『では、健闘を祈る、みつるよ！』

つづきますよ〜

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム？（後書き）

ちなみに。

クエストのスペルはわざとです。

間違っていたらわざとです。

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム その？

「よしシエラをやりに行くしゃくよおー」

前回までのあらすじ。

美鶴は仁に頼んでおにゃのことあんなことや
こおんなことが出来るゲームを作ってもらう。

そしてなぜか知らんが俺の家に来てプレイしようとしていたのだっ
た。

早い話が前々回から読んでね」

「なんで俺王子なんだよ……」

俺の小さい声は当然美鶴には聞えない。

「ん？

誰か来たしゃく？」

この髪型的に考えてメイナだな。

メイナが大臣っぽい服に身を包んでいる。

あ、大臣であつてた。

「」の横にメイナ大臣つて出てるわ。

「みつる様。

冒険に出るためにはセーブは欠かせないもの。
今からご説明いたします。

まずファイルを選び決定ボタンを押します。

上書きの場合ははいを選んでください。

セーブが完了したらそのままゲームを終了してください。

今セーブしましたのでこのまま終了してくださって結構です』

長文だなあ。

「えー、これいちいち終了するんしゃくかあ〜？
めんどくさいしゃく……」

美鶴はポインタを右上の×に持っていくと
クリックしてゲームを終了した。

「さて、もう一回起動しゃく」

リムーバルディスクFからMQと書かれたファイルを開き
クリックして起動させる。

タイトルが表示され再開……というわけには行かなかった。

(でろでろで〜ん、どんづ)

という音と共に

『お気の毒ですが冒険の書1は消えてしまいました』
のメッセージが表示された。

「……………しゃくく？
しゃああああああああ！……！」

美鶴の発狂を押し止め言い聞かせる。

「オイ待て、落ち着け！

どーせちょっとしか進んでないんだからもう一回やりゃいいだろ
!?!」

「じゃくう……」

つたく……。

美鶴にニューゲームを選ばせまた初めからやり直させる。
しかしまたメイナ大臣の言うとおりゲームを終了させ
ロードしようとするたびに冒険の書は消えてしまうのだった。

(でろでろでろで〜ん、どん♪)

「じゃあああああああ!!!!」

流石に違和感を感じた俺は表示ボタンから
ソースをちらりと覗いてみた。

「やっぱりか。」

こういつ風になるように仕組まれてるんだ」

俺はすっごく短いソースのウィンドウを消して美鶴に教えた。

「つまりじゃく?。」

少しは自分で考えろ……。

「この先のストーリーもなければエロもない。
どーりで一晩で作れたわけだ」

仁のやつやりおるわ。

「しゃ……しゃ……」

「はめられたんだよ、お前は」

というか仁はいい反撃をしたもんだ。
これは誰もが引つかかる。

「しゃあああああああああ！！！！
あああああつあああうつ！！！！」

美鶴は唐突に俺のパソコンのディスプレイを
むんずと掴むとがたがたと揺らし始めた。

「おいてめえ！
他人のパソコンに八つ当たりすんなボケ！！」

美鶴を抑えようとするが一向に止まらない。
ぎゃくに激しくなっていく。

「ああ、もう！
暴れるなら外でやれ！！」

俺はいらつと来て美鶴を二階の窓からぶん投げた。
つたく……。

「しゃあああああああ！！」

ちよつと力加減をミスってしまったらしい。
美鶴は道路のと真ん中まで飛んでいった。

そこに土砂をこんもり積んだトラックがやって来て。

鈍い金属との衝突音がなり運転席の屋根に

美鶴が頭をぶつける。

そのままベクトルの怪しい動きをして一回転。

「しゃきゅー……」

頭ごと荷台の土に埋まりトラックに連れ去られていった。

まあ、別に良いか。

俺は美鶴のせいで痛んだところがないかPCを調べる作業に入る。

・ ・ ・

「う……しゃくう……ん。

ここはどこしゃくう？」

美鶴は目を覚ました。

口に入った土を吐き出し周りを見回す。

「おーらい、おーらい！

よーし、出しちゃってー！」

「あいよー!!」

美鶴入りの荷台が傾き

「しゃあああああああ!!!!」

穴の中に土ごとぶち込まれる。

どうしてこんなことに……？

最初は仁にゲーム作りを頼んだだけだったのに……。

つづくかもお

しゃくでは！ 僕らのトラウマゲーム その？（後書き）

ありがとうございました。

いやあ暑いですね、本当に。

受験も迫ってきてますね。

やばいですね。

怖いですね。

しゃくでば　くこちら虫歯建設株式会社　？

「しゃくうう……。」

しゃくうううう……。」

金曜日の朝。

いきなり美鶴が苦しみながら学校に現れた。

「ど、どうしたんだよ……？」

って顔腫れすぎ！」

美鶴の顔は五倍ほどに腫れていたのである。
びっくりだ。

「虫歯になっちゃったしゃくう……。」

「俺に任せるでっば！」

美鶴のピンチにこのこの人あり。

出刃先輩さっそう登場。

「いいか、美鶴。」

虫歯は虫歯菌によっておこるでっば

「しゃくしゃく」（ふむふむ）

「虫歯菌も生き物でっば」

「しゃく……？」

それが何の関係があるんしゃく？」

「もっとお菓子を食べて虫菌菌を腹いっぱいにして殺せばいいでっば！」

「な、なるほどしゃくー！」

「そうと決まれば早速実行でっば！」

「出刃先輩格好いいしゃく！
流石しゃくー！」

「でっばばばば」（不憫すぎる笑い声）

——美鶴は大声で笑い続けていた。
そうこれからの悪夢を知らずに。

・ ・ ・

「そんなわけで早速買ってきたでっば！」

出刃先輩が購買から戻ってきた。
手の袋には大量のチョコやガムが入っているらしい。
甘。

「では早速試してみるでっば！」

「分かったしゃくよー！！」

いただきまーすしゃくつ!!」

美鶴がチヨコにかじりついた。

「くつちゃくつちゃぺろぺろ」

もつと静かに食べ。

あんぼん。

俺はぼけつと仁の近くに行つた。
仁もこの様子を見ていたらしく

「なあ、波音。

どうおもつ?」

「……アホだと」

「だよなあ」

お互いがうなづいたときだった。
教室に悲鳴が上がった。

「しゃああああああああ!!!!」

美鶴が頬を押さえて転げまわっていた。
うおう。

頬が物凄い勢いで膨らんでいく。
どんどんと。

空気をぶちこまれている風船みたいに。
どんどん膨らんでいく。

「じゃあああああ!!」

悲鳴にならない悲鳴が四方八方に飛び交う。
いとつるさし。

「えいつ」

シエラが横から出てきたと思うと美鶴を横からぶん殴った。
壁にめり込む美鶴に更に追い討ちをかける。
しばらくぼこぼこにしたあと
腰に手を当て

「つるさい」

と一言。

いやお前ひどすぎるだろ！
どんだけだよ！

その痛みに反比例するがごとく美鶴の頬が
パンチにより更に腫れあがる！
やがては教室の半分が美鶴の顔で埋まってしまった。

「おい授業はじめうおっ!？」

な、なんじゃこらあああ!!」

桐梨もびっくりである。

・
・
・

「どーすればいいんしゃくう……」

半分ほどに大きさは戻ったものの
まだ人の百倍デカイ頭を美鶴は抱えた。

「歯医者行けよ」

俺はその頬を押しながら聞いた。

「いやしゃくつ！！！」

「なんで？」

「嫌な物はいやなんしゃくつ！！」

シエラの問いに唾を撒き散らしながら美鶴は反駁した。

「行け」

「いやしゃくつ！」

「行けって」

「いやいやしゃくつ！！」

「……チッ」

「ずえーったいに行かないしゃくつ！！」

——本当にどうすればいいんしゃくかあ？」

美鶴の戸惑った色の目から涙が。
素直に行けばいいのにな。

「そうだ、行ったらチョコレート買ってやるよ」

「いやしゃくつ！……！！！！！！」

駄目か。

もうこうなったら意地でも歯医者に連れて行ってやる。

・ ・ ・

とは言ったものの……。

帰り道をのんびりと夕日を眺めつつ帰る。

川のせせらぎも聞えてきてトンボが空を飛ぶ。
もう秋かあ。

「なあ、どうすればいいと思う？」

「何が？」

何がつて……。

「美鶴だよ」

「ああ、ほつとけば？」

シエラは本当にどうでもいいといった顔で

トンボを目で追った。

「俺もそうしたいんだけど……」

家についた。

ドアを開ける。

「助けてくれしゃああくう……」

な？

・ ・ ・

「歯医者者は嫌なんだな？」

「絶対にいやしゃく」

じゃあどうしろってんだよマジで。

美鶴が引っかかりそうなものって何？

いや考えるまでもなかった。

あれだ。

エロだ、エロ。

美人が多い歯医者者なんてないかな。

「まかせるでっぱ！」

「うおっ!?!」

出刃先輩までなんで俺の家に！？
というかいま心読まれたー！

「俺の情報網をなめるんじゃないでっば！」

出刃先輩はポケットから地図をひっぱりだすと
三丁目の角を指差した

「ココでっば！」

「本当しゃく！？

そこに美人がいるんしゃくねえ！？」

美鶴に俺がそう伝えると一気に目の輝きが増した。

そのまま駆け足でお金を握って美鶴は俺の家を飛び出す。
走る、走る。

あっという間に三丁目の角についた。

『ヒッチハイク 歯医者』

「ヴおくの夢のパラダイスしゃくうつ！！」

美鶴がドアを開けて中に飛び込んだ。

「あーらいらっしゃいっ」

「ああらかわいい坊やっ」

お姉さま！
と思うだろう。

だが美鶴の表情は青ざめていた。

「じゃ……」

「私達の治療」

お・た・の・し・み・あ・れっ」

そこはオカマしかいなかったからだ。

しかもニューハーフ。

ヒゲ生えてて筋肉もりもり。

「はい口空けてエ」

しゃあああああああああ！！！！

つづくかもおゝ

しゃくでは、ここに虫歯建設株式会社、
？（後書き）

ありがとうございました。

虫歯には気をつけましょう！

しゃくでば　くこちら虫歯建設株式会社　？

前回までのあらすじ。

美鶴が虫歯になっちゃった！

俺達はんばって美鶴を歯医者に連れて行くことするが……。
早い話、前回から読もうぜ！

「失敗か」

シエラののんびりした声に押されて
おかまばかりの歯医者から離れた。

「どうする？」

やれやれといった顔でメイナが尋ねる。
俺は知らん。

「あ、これはどうでつば？」

美鶴が大好きな甘いお菓子を設置して
歯医者にまで誘導するなんて手は？」

おお。

出刃先輩あんた、冴えてるな！

「よし、それで行こう！」

・

「うう、ひどい目にあつたしゃくう。
なんとか逃げ切れたけどずえーたいに
もう二度と歯医者なんてごめんしゃくう」

美鶴は涙を流しながら歩いていった。

「ん？」

あれは何しゃく？」

鳴いたカラスがもう笑ったというべきスピードで
美鶴の泣き顔が終わった。

作戦通りだ。

「あつ、あれはヴおくが大好きな
ヴェスターザーオリジナルしゃくつ！」

道端に一つのキャンディーを見つけた。

お前落ちてるものは食べちゃ駄目って教わらなかったのか。
まあ今回はそれでいいんだけどさ。

それにしてもうまいこと引つかかってくれたもんだ。

「あつ、あつちにもあるしゃく！」

案の定、美鶴はお菓子に釣られてシャテクテク……。
歩く歩く。

「うんまあいしゃくうつ！」

ああんまあいしゃくうつ！！！！」

「あつ、こっちにもあります！」

ん？

なんだ今の声。

「どうしてこんなに落ちてるんでしょうか？
でもおやつにまずいものなんてないですよね？
何よりもつたいないです」

シエラがあちゃーと顔を手で覆った。

白いワンピースに麦わら帽子を被った女の子が
両手一杯に俺達がばら撒いたキャンディーを持ちつつ
美鶴に接近しつつあった。

「どーしてこんなにおいしいんしゃくかあ？
拾う手が止まらないしゃくうつ！！」

「まったく、食べ物捨てるなんて……」

美鶴が目の前のおやつに手を伸ばした。
それをぱつと横からかつさらう蒼。

「あ……」

「しゃ……」

二人はぱつたり出会ってしまった。

「このヴェスターザーオリジナルは僕のものしゃくっ!!
なぜなら僕は特別な存在だからしゃくっ!!」

美鶴は寄越せといわんばかりに右手を突き出した。
蒼はへ?と言った顔をして

「わ、私ですよ!
これは譲れないです!」

お前結局食べる気だったんじゃないかい!

「ふざけるなしゃく!!
さっさとよこすしゃくっ!!」

美鶴は蒼の手からキャンディーを奪い取った。

「私のです!
返してくださいッ!」

蒼が美鶴から取り返す。

「よこすしゃくっ!!」

「いやですっ!!」

嗚呼、喧嘩がはじまった。
殴り合い、叩きあい。
美鶴が蒼の頬に平手打ち。
その瞬間蒼の気配が変わった。

「わかりました。

そこまでして欲しいんですね」

「そうしゃく！」

さつさとよこすしゃく！」

「勝てたら……あげますよ？」

ざわつと空気が揺れた。

ん、空が暗い……。

おい、まさか！

「ネメシエル、艦底五センチ光波共震砲用意。

目標美鶴、三秒後に斉射」

「ちょ、待つしゃく、蒼！」

「三……二……」

「お、落ち着くしゃ「ゼロです」

空から数え切れないほどのレーザーが降り注いだ。

「しゃあああああああ……！！！！！」

大地がえぐれ、美鶴の姿は土埃にまみれて見えなくなってしまった。

「まったく……。

キャンディは私のです」

蒼は美鶴からキャンディを奪うとネメシエルの中に消えた。

・
・
・

「また失敗したよ！

もうどうすりゃいいんだよ！！」

「結局はさあ」

うん。

「美鶴を歯医者に入れればいいんでしょう？」

そうだな。

「ならさあ……」

メイナの提案はすごくマシなものだった。
なんではじめっからそうしなかったんだろうといづぐらいに。

・
（翌朝）
・

「おっはよーしゃくうっ！」

美鶴が教室に入ってきた。

と、思ったらそこは歯医者の治療室になっていた。

「な、なあんしゃくかあ！？
これはあ！？」

実は美鶴が寝ている真夜中に蒼の協力の下で
シエラが美鶴の脳の中に変な電波を送り込んでたんだ。
んで、幻覚を見せていたと。

ちなみに歯医者予約も事前に済ませてある。
俺がやっといた。
かなり面倒だった。

美鶴は看護婦さんに押されるがままに治療室の中に入って
口をこじ開けられていた。

「はい、ちよつと削るよー？
痛くないからねえー？」

歯医者さんのメガネが光できらりとした。
というか歯医者さんはみんなさだと思うのは俺だけだろうか。
痛くないよーって言うときほど痛かったりする。
変な法則である。

「きつ、聞いてないしゃくよお……！！」

お医者さんの持つドリルの先が回り始めた。
あの嫌な音が鳴り響く。

ドリルの先が美鶴の黒くなった虫歯の表面に触れると
ガリガリと削れる音がして……。

もうココから先は言わせるんじゃない。
あれはヤバイ。

神経に達したときが一番痛い。

しゃあああああああああ………！！！！

つづくかもおゝ

ちなみに俺は小学校一年生から歯医者には行ってない。
虫歯はゼロ。
超綺麗にしてるからな。
毎日四十分ぐらい磨いてる。
どや！

しゃくでは 〳こちら虫歯建設株式会社〵 ? (後書き)

ありがとうございます。

いやぁ虫歯。

なると痛いですねえ。

そうならないうちに歯を磨いて綺麗にしておきましょう。

笑ったときに銀歯だらけっていうのもちよっと・・・ですからね。

しゃくでば！ 宇宙戦争

西暦第二期二千十二年。

地球はマンリキと呼ばれる生命体から攻撃を受けていた。

地球とマンリキの戦いを

最前線で繰り広げる地球防衛軍兵器——《戦艦アリアケ》が話の舞台である。

『敵部隊の接近を確認！総員第一種戦闘配置につけ！繰り返す……』

《戦艦アリアケ》にサイレンが鳴り響いた。

「状況知らせ！」

あわてて艦橋に上がってきた艦長に

「十時の方向から敵航空機接近！数は……五です！」

通信兵のシエラが叫んだ。

「敵との距離はどうですか？」

このアリアケ、蒼艦長は冷静にシエラに尋ねた。

「はっ……およそ二百宇宙キロ!」

「どう思います、波音副長?」

「そうですね……」。

「こちらも艦載機で迎撃が妥当かと」

俺は敵の出方を見るべきだと艦長に伝えた。

「では、そうしましょう。」

メイナ戦闘長、艦載機の発艦準備をするように航空部隊に伝えてください」

「わかりました」

メイナは頷くと手元のマイクを口元に当てて全艦放送に切り替えた。

『航空部隊、出撃せよ。』

航空部長、美鶴、準備は出来てるな?』

・
(格納庫内)

「もっちゃんのろんしゃくよお!」。

この赤いいのしし、美鶴様がいれば

敵なんて簡単にうつちゃれちゃれるしゃくよお」

美鶴はくるくると回りながら服を脱いでパイロットスーツに着替えた。

「美鶴、ちゃんと帰ってくるでっばよ？
俺が整備した機体なんだからでっば」

ぐつと指を立てて出刃整備担当部長はにかつと笑った。

「出刃先輩……！」

美鶴は出刃に抱きつくと

「必ず帰ってくるしゃくよ!!」

振り返らずに美鶴専用機——《ミツルンガーZ》に乗り込んだ。
赤く塗られた美鶴専用の戦闘機は地球防衛軍内でも評判がいい。
間違いなくエースである美鶴に操られる機体はまるで
生きているかのように自由自在な機動でマンリキの戦闘機を
次から次へと撃ち落してゆくからだ。

その姿はまさに圧巻。

逆にせいせいするほどの力。

「美鶴スタンバイOKしゃく!!」

美鶴はヘルメットに付いたマイクに大声で吹き入れた。

『了解。』

軽くやってきてくれ』

メイナの声が機内を巡る。

「まっかしておくしゃく。」

この《アリアケ》は僕が守るしゃくよ!」

『期待しているぞ』

「MR1発進!」

美鶴の戦闘機を固定していた拘束具がはずれ

床が回り、宇宙空間へとつながるカタパルト通路が開いた。

美鶴は静かにエンジンのパワーを上げてゆき

機体を固定する最後の拘束具が外れると同時に

カタパルトの勢いを借りて時速五〇キロで二百メートルの通路を駆けた。

「機体の調子は万全しゃくなっ」

美鶴はふと上を見上げた。

邪悪な気配を感じたからだ。

そして見つけた。

黒いシミを。

Gを。

「しゃあああああああああ!?!?!?!?!」

コックピット内にいるのだ。

Gが。

・
(艦橋内)
・

「どうした!？」

俺はメイナに問うていた。

美鶴の機体のスピードがぐんと上がったのだ。

「分かりません!

一体何が……」

「姉さん、通信入れなよ」

「あつ」

パチ、とメイナが通信のスイッチを入れた。

『しゃあああああああああああ!?!?!?!?!?』

全員が耳を押さえた。

「こちら艦橋、美鶴どうした!？」

『しゃあああああああああ!?!?!?!?!?』

あああああああああああああ!?!?!?!?!?』

日本語しゃべってNEEEEEEEEE!!!!

「おい、美鶴機どうしたんだ、おい!」

『は、波音しゃくかあ!?!?』

た、助けてくれしゃくつ!

Gがつ、Gがいるんしゃくよお!?!?』

「G……？」

重力のことか？

カタパルトで発進するんだからそれは当然だろうに」

何を言っているのやら、と蒼艦長と顔を見合わせる。

『ご、ゴキしゃくよお！

助けてくれしゃ』

ぶちんと通信が途絶えた。

美鶴の最後の通信で金属がはじけ飛ぶような音がしたがあれは一体――。

その答えはすぐに伝えられた。

「美鶴機、カタパルトから外れました！」

シエラが悲鳴を上げた。

カタパルト固定具が外れたのだ。

「まずいつ！」

通路は一本線。

つまり、そこから外れたということは……。

「全員何かにつかまれ！」

俺は赤の対シヨック体制のボタンを押した。黄色のランプが回り短く三回、警報になる。

『しゃああああああああああああああああ』

嗚呼、なんてこった。

次の瞬間、《アリアケ》の前部から炎が噴出した。

甲板を吹き飛ばし、《アリアケ》は航行不能に陥るほどのダメージを受けたのだ。

敵は勝手に自爆したこっちに愛想をつかしてどこかに消えていった。結果的に勝ったのだ！

その後、《アリアケ》では大掃除が行われた。

主なGの発見箇所は美鶴の個室。

食べ散らかされたパンなどが転がっていた。

「美鶴……」

俺は小さく呟くと星になった美鶴に思いをはせたのだった。

「自業自得だよなあ……」

そして美鶴星にそう呟いた。

続くかも

「次こそは大丈夫しゃくよ」

『了解。』

期待している』

「発進しゃくつー!!」

ガギ。

「な、何しゃくかあ!?!」

『カタパルトの上に置石ならぬ置き缶だ！』

一体誰が……』

「そんなこといいやくからカタパルトを止めてくれしゃああ!?!」

『全員何かにつかまれ!?!』

その瞬間アリアケの前部から（略

ちなみに缶を置いたのは美鶴本人。

みなさんも、ポイ捨てにはご注意を。

しゃくでは！ 宇宙戦争（後書き）

あざっしたー！。

どうっしたかー？

たまにはこんなしゃくではもいいでしょう？
ではー。

しゃくでば！ 天空のお家？ （ちょいマニアックネタ注意）

ある夏の昼下がりに。

「うつわあ、おっきい雲ですねえ」

「だね。」

あ、蒼そのアイス早く食べないと溶けちゃうよ」

真っ白のワンピースを着た蒼はジーンズを履いて
髪の毛を後ろでくくった詩乃と街中を歩いていた。
その途中ふと空を見上げたのだ。

「あつ、は、はい！」

「にしても大きいねえ。」

中に城でも入ってるんじゃないかって思うほどだね」

「……お城ですか？」

詩乃姉様はなんだかんだでロマンチックなんですネ」

詩乃はその言葉を聴いて反論を返そうとして
納得したように頷いた。

「あゝそうか。」

蒼は知らないんだったね」

「？」

な、何をですか？」

「『天空の城 ラ。ユタ』ってアニメしらない？」

詩乃は蒼の落ちかかっているアイスを指差した。
それに気がつきあわてて舐め取る蒼の横から
にゅっとアイツが顔をだした。

「知ってるしゃくよお」

「私、知らないです。
どんな話なんですか？」

「あの、僕は知ってるしゃく……」

美鶴を置いたまま二人は歩き続ける。
丸で何もなかったかのように。

「ある時、少女が空から落ちてくるんだ。
そこから物語の幕が開くわけ。
で、ある少年が少女を助けて……」

「ふむふむ」

食べ終わったアイスの棒をふよふよと
口で動かしながら相槌を打つ蒼。

「——少女は捕らわれちゃうわけ。
そこからまた……」

蒼と詩乃の間にぐわばつと美鶴が入り込んだ。

「ちょっと待つて欲しいしゃくつ！」

「で龍の巣っていう低気圧の……」

「まあたこの扱いしゃくかあ！？」

僕は主人公なんしゃくよお！？

いったいお前達はモブキャラの分際で

毎回毎回えらそうなんしゃくつ！！

ちよつとは主人公の話を聞いたらどうなんしゃくかあ！？

今日はおふざけで来たんじゃないんしゃくよお！？

蒼に相談があつて来たんしゃくからっ！！！！」

「詩乃姉様、それで、それで？」

それすら無視して進む二人。

もはやここまでのスルースキルは敬服に値する。

「蒼、ココに飴があるしゃく。

頼みを聞いて欲しいしゃく」

「どうしたんですか？」

十メートルは離れていたはずだった。

なのにその距離を蒼は一瞬で蹴飛ばし
美鶴に詰め寄ったのだ。

「ちよつ、蒼っ！」

「ふっふっふ、詩乃、蒼はちよつと借りていくしゃくよおー！」

「おい、蒼っ！！

まあ殺されるわけでもないし別にいいかあ……」

・ ・ ・

私だ、ム。カ大佐だ。

冗談永久波音だ。

俺はお家でお気に入りのDVDを見ていた。

何ってジ。リの。

この時期になるとむしろように見たくなるんだよなあ。

『天空の城 ラ。ユタ』だよ。

「波音、ちよつと入るしゃくよお」

ちっ。

顎野朗が。

「俺の至福の時間を邪魔してもらいたくないものだな」

ドアから入ってきた美鶴にそう投げかけた。

「こんにちわ……」

その後ろからおずおずと入ってくる少女。

蒼さんだ。

「これはこれは。

「副長様ではないか」

そういいながらも俺は思考をめぐらす。
珍しい組み合わせだな。

いつもは喧嘩しているばかりかと思いきや。

「ふう、疲れたしゃく。

波音、お茶を出すしゃく」

「あ、私コーラが良いです」

二人はどつかと俺の部屋に座り込んだのだ。
それと同時に飲み物まで注文してきやがった。
なんだ、何だツてんだおい。

「じゃんけんな」

・ ・ ・

「四十秒で支度しな」

俺はじゃんけんの勝者として輝いていた。

美鶴にコーラを持ってくるように要求する。

「しゃくううう……」

美鶴が部屋から出た瞬間蒼さんに話しかけた。

「なんで一緒に？」

「さあ、私に頼みがあるからって……」

「頼み……？」

「それを今から言つらしいですよ」

「何で蒼さんともあろう方があいつの頼みを？」

蒼はちよつと目を逸らした。

言おうか言つまいか悩んでいるのだろうか。

「実は、私飴をもらいました」

「は？」

飴？

「飴です、飴……」

蒼はポケットから夏の暑さで溶けかけた飴を取り出した。

ママこいつ飴なんて持ってやがった。

お前頼み事を飴で引き受けたのかい。

それでも軍人かいつ、ええ？

飴って……バーカ……。

あいつが欲しいのは奴隷だろうが。

よく分かるねって？

だてに美鶴と一年間いるわけじゃないからな。

「それもらって？」

え、待ってくれ。

それで頼みごとを聞いてやると？」

「はいっ！」

蒼は幸せそうにはにかんだ。

「はあああ……………」

盛大なため息とともに失笑の眼差しで蒼を見る。
アレか。

ココで新たに判明したこととしては
戦艦一隻が飴玉五個で動くってこと。

「持ってきたしゃくよお」

「おうご苦労」

美鶴はコーラと三つのコップが入ったお盆を床の上に置いた。

「で、頼みって何ですか？」

蒼はコーラの炭酸を見つめながら美鶴に首をかしげた。

「実はしゃくねえ。

ヴおくある映画を昨日見たんしゃく」

ほう。

「そのお話はとーっても面白かったんしゃく。
で、僕は考えたんしゃく。

これ僕も作ってそこに住んでみたいなあしゃくって」

誰もがシンデレラとか見たら思う幻想の一種だろう。
要するにそういうことだ。

美鶴なんてすぐに何かに影響されるんだから
今回もまたそういうことと納得する。

「で、その映画って何だよ」

「これしゃく」

美鶴はごそごとポケットの中に手を入れた。
そして机の上にどんと置く。

「携帯？」

アンテナつきの。
少し笑う。

「間違えただけしゃく。
もう少しまつしゃく」

美鶴は「あれ〜どこいったんしゃくかねえ」とか
「うーむ、わかんないしゃくねえ」と良いながらもガサガサと
ポケットの中を探っていた。

「あ、これしゃく」

そうして美鶴が自信満々に置いたDVDのパッケージには
今しがた俺が見ていた映画のタイトルが書いてあった。

『天空の城 ラ。ユタ』である。

まあ序盤の流れからしてそうだろうとは思ってた。

「これですか？」

蒼が手にとってふーんと言うように眺める。

「で、これの何を作ろうと思ったわけ？」

美鶴のことだからロボットとか言うんだろう。
それがゴリアテ（あの戦艦）とか。

「ラ。ユタ城を作るんしゃくよ！」

「

」

言葉に窮した。

何言ってるんだこいつ。

「いや、これが出来るんしゃくよ。

何のために蒼を呼んだと思ってるんしゃくか？」

しばらく考えた。

そして閃いた。

「そうか！！」

謎は全て解けた。

俺の隣に座っている蒼さんはベルカ文明の遺産である

全長一六二四メートル、重さ二千五百万トンという

超兵器を動かす核。

つまり中の人。

しかもこの戦艦、宙に浮いている。

美鶴やるじゃん！

俺は無意識に美鶴に親指を立てていた。

GJだ。

今回の人選は間違っではない。

「とりあえず私意味が分からないのでこの映画見てみますね」

「あ、俺も見る」

そんなわけで美鶴お空のお家計画がスタートしたのであった。
ろくなことになりそうだけどなあ。

つづくかも

しゃくでば！ 天空のお家？ （ちょいマニアックネタ注意）（後書き）

ラピユタ見たことがない方はそうそういないでしょう。

誰もが見たことありますよね？

あれはすごい。

何度でも見てしまいます。

宮崎監督ってやっぱりすごいなあ。

なんといつてもまずオープニングからすごいです。

アレ、見直して気がついたのですがラピユタの興廃を暗喩してたんですね。

いやーほんつとうにすごい。

それで何が他にすごいかっていうt（ry

しゃくでば！ 天空のお家？（ちょいマニアックネタ注意）

今から何をするのかというとな。

蒼さんの戦艦、ネメシエルが宙に浮く仕組みを知ろうとしているのだ。

それを応用すれば美鶴の言うとおりお城を空に浮かせることができるようになるからな。

「まずこの丸を α 光線と考えてください」

「しゃく」

「次にこの α 光線に β 、 σ 光線が当たります」

「しゃく……」

「そこでE＝TPという光学公式を利用してエネルギーを増幅。新しく出来上がった θ 光線、別名マルグリッド光線を……」

「……………」

美鶴、机につつぷした。
ポカーンとした顔。

君のアホ面には心底うんざりさせられる。

「そしてむき出しになった特異光をさらに……」

俺はココで手を上げた。

「あ、蒼さん。」

美鶴死んでる、死んでる」

蒼はへ？と美鶴を見た。

まったく、とため息を一つついて蒼は腕を組んだ。

「あなたが簡単に言えって言ったからいったんですよ。
急ぐと元も子も無くすからって……」

「……まさかココまで難しいとは思ってもしなかったしやくう……」

「もう……」

蒼はやれやれとホワイトボードのマジックを消した。
説明するだけ無駄だっただろ？

「じゃあ蒼さん、エンジンのところだけでいいから作ったら？
上は俺達で作るから」

動かない美鶴を蹴りながら俺は蒼に相談した。

「それがよさそうですね。」

私がとりあえず下の部分を作ることにします。
一時間ぐらいで出来ますよ、これぐらい」

一時間。

やべ、すっげ、すっげ。

「あ、でもネメシエルほどの巨大な物はいくら私でも無理です。
ので家一軒、もしくは小型倉庫ぐらいが妥当かと」

「まあ、そうだな。

おい、美鶴聞いたか……っていねえ！」

窓の外から声が聞えた。

「波音、波音！

ちよつとヴおくのお家に来て欲しいしゃく！
まってるしゃくからねえっ！」ポッ

何で顔を赤らめる。

頭おかしい。

「とりあえず、じゃあ私も行きますよ。
なんだか楽しそうですし……」

「ごめんな、蒼さん」

「いえ、私もののりだったので……」

やれやれと、玄関に出て靴を履きかえた。
美鶴の家までチャリで結構かかるんだよな。
五分ぐらい。

「クソ顎のお家はどこですか？
私一回しか行ったことなくて——」

あー、はい。

お誕生日の時か。

「ん、俺と一緒に行く。
チャリの後ろに乗れ」

・ ・ ・

「波音、ここしゃく！
ここーっ！！」

美鶴は河原にポツンと置いてある新品同様の倉庫の脇に立っていた。
よくみつけたなあ、そんなもの。

「これを浮かすしゃくよ！」

ドヤ顔。

いやあ、まあ。

どうなの？

出来るの、蒼さん。

「まあこれぐらいなら……。
出来ますね」

蒼の長い髪が風に舞った。
そういえば今日は風が強い。
家に帰って天気予報でも見てみるか。

「じゃあさっそく頼むしゃく、蒼オ！」

美鶴は倉庫を指差してわくわくした表情で蒼に頼み込んだ。

「おいまで、倉庫でいいのか？
城作るんじゃないのかよ？」

「僕考えたんしゃくよお。

お城なんて巨大な物は無理しゃく。

波音は一体何を夢見てるんしゃくか？

お城じゃなくて倉庫ならいけるんじゃないしゃくか？
と思つたわけしゃく」

さらつとバカにされた気がする。
いやバカにされた。

「そんなわけで、蒼お願いするしゃくよ！」

蒼はむーと考え込んだ。

「材料費とか機密漏洩とか大丈夫ですかね。
私、それが心配で——」

「まだ飴残つてたしゃく」

「何とかしましょう。
早速作りますね」

蒼さん……。
なんかこう、寂しいな。

・ ・ ・

そして一時間がたった。

見事、倉庫は空に浮いていた。

「やったしゃくよ!」

「これ、中で操縦とか出来ませんから注意してくださいね。

鎖で地面とくっつけているので。

とりあえず浮いてるだけって感じです」

倉庫の下からまぶしい光が溢れ出て、また一段と強くなってきた風が
ゆらゆらと倉庫を揺らした。

「完成したしゃくねえ。

僕本当にがんばったしゃくよ」

いやお前は何もしてないだろ。
にしても……。

「俺もちよつと乗ってみていい?」

美鶴は腕を胸の前で×印に組んだ。
そして唇を尖らせ、目を閉じて

「だああめしゃく。

これは僕のお家しゃく」

いらあぁ。

「いまから僕はこの中で生活するんしゃく。
寝るときもご飯を食べるときもずっとこの中しゃく。
しゃくうう、夢がひろがりんぐしゃくう！」

そう言々と蒼から鎖を奪い去り

天空の倉庫を引っ張って自分の家の中の敷地へと入っていった。
倉庫が庭に浮いている。

そこに美鶴は布団とかを詰め込んでいた。

「——帰りましょうか」

「ああ」

一体俺は……何のために呼ばれたわけ？

・
・
・

夜になった。

風が収まらないので不安からテレビをつける。

『なお以前強い力をもった台風二十一号は——』

台風が来てんのか。

どーりで強いわけだ。

・

「すぴい……。」

しゃああああ………」

美鶴は出来たばかりの天空の倉庫で眠っていた。
強い雨、雷、風と三拍子の台風が来ているのに
起きる気配は一向にない。

雨は地面を緩め、風は倉庫を引つ張る。
めりめりつと地面から鎖が抜けた。

そのまま高度を上げながらどんどん流されてゆく美鶴。
そして……朝になった。

「ここはどこしゃくあああ!？」

倉庫の扉を開けて外を見た美鶴は啞然とした。
下には真つ青な海が広がり雲が浮いている。

一隻の小さな船が美鶴の下をくぐりかもめが倉庫に止まった。

「そ、そうしゃく!」

これは蒼の作った完璧な倉庫!

落ちることはないんしゃくから携帯!

携帯で助けを………」

圏外です。

しゃく……。」

しゃあああああああああああああ……。」

「で、でも海に落ちることはないんしゃくよ！

こうやって空を漂っていれば

飛行機の人とかが見つけてくれるしゃく！

そうしゃく！

僕は絶対に助かるしゃく！」

美鶴はガッツポーズをして自分を安心させた。

「安心したらまた眠くなってきたしゃくう。

お休みしゃく……。

起きたらきつとどこかの島にでもついてるしゃくよ、ふあああ……

……」

続くかも

あふたーすとーりー。

美鶴の倉庫が浮いて帰り道の会話。

「どうでも良いけどさ」

「はい」

蒼は首をかしげた。

「どうかしたんですか？」

「ベルカの技術、出してよかったの？」

アレがアメリカとかに渡ったら……」

俺が心配そうに聞いたら蒼は少しはにかみ

「ああ大丈夫ですよ。」

そんなことも考えて明日の昼前にはエネルギーを
太陽光から採取しなくなつて爆発しますから」

なるほど、なら安心だな。

しゃくでば！ 天空のお家？（ちょいマニアックネタ注意）（後書き）

なんか、最後はブラックジョークみたいになっちゃいましたね。
さてこの後美鶴はどうなるのか。

続きません、爆発した後海上保安庁のお世話になりました。

しゃくでば！ 顎の使い道

「なあ、美鶴」

「しゃく?」

俺はから揚げを口の周りに油をつけながら頬張る美鶴に話しかけた。

「お前のさあ」

「しゃくむぐむぐ」

「顎ってさあ」

「しゃくむぐむぐ」

「うまいのかなあ?」

「しゃくぶふほお!」

飛んでくるから揚げを傘でガードして俺は続けた。

「な、なあに言ってるんしゃくかあ!」

波音はとうとう頭がおかしくなっちゃったしゃくかあ!」

「いや、だつてさ」

俺は考える。

骨の周りに肉がついているんだろ?

つまりフランクフルトだろ？

「うん。」

じゃあフランクフルトじゃないとしたらさ」

「ふ、フランクフルトじゃくかあ！？」

一体何を考えているんじゃくか！？」

俺はふむと頷いた。

「美鶴の顎を液体水素の中に入れると仮定するだろ？」

「ちょ、ちょっと待つじゃく！！」

もう意味が分からないじゃくイミフじゃくよ！」

「五月蠅いから黙れ。」

で、入れるじゃん？

固まるじゃん？

それで釘って打てるのかなあ」

美鶴はもう啞然として俺を見てきた。

お口はあんぐりあいて信じられないって目をしてる。

「じゃあもう一つさ」

「も、もう許してくれじゃくう。」

どうせくだらないんじゃくよね？」

んなこたあないぞ。

俺は指を振った。

「その顎さあ。」

避雷針とかにはならないわけ？」

「か、雷しゃくか!？」

無理しゃく、真つ黒こげになるしゃくよお!!!」

でもシエラとかネメシエルとかにぼこぼこにされてるわけだし
今更何を心配するんだと思う。

「じゃあこれは？」

ずばり、聖剣エクスタゴバー」

「ちゃんばらも無理しゃくよ!

第一なんでヴオクの顎が剣とならなきゃならないんしゃくか!?
状況がわからないしゃくよ、じょーきよおが!!!」

ふむ。

「じゃあその顎の中にグレネード弾を入れて「無理しゃく」

おい、最後まで言わせろ。

「その顎のなk「無理しゃく!絶対!」

「そのあ「無理しゃくつてば!!!」

「そ「無理しゃくよおおお!!!」

俺は美鶴を殴った。

五月蠅い。

「しゃくう……」

「聞けつて、いいから。」

その顎の中にグレネード弾を入れるだろ？
んで気合で飛ばすと人間グレネードランチャーの完成じゃん？」

「しゃくうん……」

それは反対の意なのか？

「じゃあさあ。」

その顎を蒼に頼んで改造してもらってさあ……」

俺の横にひょこつと蒼が顔を出した。

「無理です。」

私が嫌です」

断固拒否か。

「第一なんでそんな話になったんしゃくかあ？」

「いや……な」

「一体何の話をしていたんですか？」

俺は蒼の頭を撫でて笑った。

「美鶴の顎の有効利用方法」

「なるほど——です」

蒼は美鶴の顎をじつと見た。

「確かにこのクソ顎の顎は邪魔ですよね。
取っちゃった方がいいかもしれませんね」

美鶴は両手を振って首も振った。

「ずうえええええつたい無理しゃくつ！……！！
やめてほしいしゃくよおおお！！！」

いい加減いラッとしてきた。

「じゃあさあ、美鶴。

お前が考えるよ？」

「しゃく？」

「お前の顎、ずばり何の役にたつんだ？」

「しゃく……。」

それは……。

……。
しゃあああああああああああああ

あ、美鶴逃げた。

自分でもうすすすがついてたのかも知れない。

というか美鶴に突っ込まれる側ってのもまた新鮮だな。

「本当に何の役にたつんでしょうか……」

蒼も首を捻って悩んでいた。
な？

つづくかもお

しゃくでば！ 顎の使い道（後書き）

いやホントなんの意味があるんだろう。
使い道が分からんですばい。

噛む為・・・なのは分かりますがねw

しゃくでば！ 第一視点

よっ！しゃく。

何を驚いているしゃくかあ？

いつもは波音視点だからしゃくかあ？

しゃふふ。

う　おくは主人公しゃくよ？

う　おくが少し、すこーし願うだけで視点なんて簡単に変えられるしゃく。

学校についたしゃく。

教室のドアを今……！

「おっはよろーしゃくっ！」

みんなに大きな声で挨拶をするしゃく。

アイドルはきちんと挨拶をしないしゃくからねえ？

「おーう」

あっ、波音しゃく。

今日もあいからわず眠そうしゃくねえ。

「おはよ」

シエラしゃく。

素っ気ないのは間違いなく僕に惚れているからしゃく。

「さっさと席に座れー」

あつ、桐梨の野郎が来たしゃく。

怒らせると面倒だからここは素直に従っておくしゃく。

またつまらない話と授業しゃくかあ？

もうつんざりしゃくよお。

眠い、寝るしゃく。

おはようしゃく。

顎が邪魔でなかなか机につぶせなかったせいか寝違いが起こって
首が動かないしゃく。

「おい、美鶴。
飯だぞ」

波音がゆさゆさと僕を揺するっているしゃく。

僕は下を向いて寝ている状態しゃくから波音を見ることができない
しゃく。

しかも寝違いで固まっているしゃく。

だあれか助けるしゃくよ！

「寝てんだって。

起こすな、ほっとけよ」

仁の声しゃくねえ………？

よっくも、起きたら覚えとくしゃくよお………？

「そうだなあ。

ほっといて飯くうか」

「そうしようぜ」

しゃあああん!!

気がついてくれしゃくううう!!

「美鶴寝てると静かでいいなあ」

「うん。」

僕もそう思う」

しえらああああ!!

許さないしゃくよおおおお!!

見ておくがいいしゃくつ!!

・ ・ ・

起こしたときがお前らの最後しゃくう。

ずええつたいに許さないしゃくからねえ……………。

それにしてもお腹減ったしゃくう。

少しでも動かすと首が痛くて動かないしゃくよお。

体もしびれて……。

・ ・ ・

も、もう本当に誰か僕を起こしてくれしゃく。
本当にお願ひするしゃくからあ。

誰か……。

起こしてくれしゃく……………。

・
・
・

「起立、礼！

さようなら！」

しゃああああああああん！！！！！！

どーして誰も起こしてくれないんしゃくかああああああん！！
しゃああああああああん！！！！！！

「お、おい美鶴の机がナイアガラの滝なんだが」

「へ？

波音何いつてんの？

そんなわけ……ほんまや」

しゃああああああああん、しゃああああああああん！

！！

お腹減ったしゃく、喉渴いたしゃくううううううううううん！

！！

しゃああああああん、しゃああああああん！！

もう誰でもいいからっ！！

「み、美鶴？

大丈夫か……うわっ！！
泣いてる？」

「しゃ……しゃ……」

波音っ！！

やっぱりお前はいいやつしゃくよおおおおおん！！！！

「大丈夫か？」

寝違いでも起こしたか？

ふんっ！」

ガギッ。

首の骨がぼきぼきっで行ったしゃくっ！！！！

「は、波音っ！！

なあああにするんしゃくかあ！？

ほんっきで痛かったしゃくよお！！！！？！！？！！？」

「いや寝違いだったんだろ？」

だからぐいっとなんたんだ、ぐいっとなんた

そっいつて波音は両手をぐいっとなんたに見せたしゃく。

冗談じゃないしゃくよお。

ほんっとうに痛かったしゃく。

「で、でもありがとっしゃく、波音」

「きめえ」

しゃく？

な、なんでしゃくか？

お礼をいって何で……。

しゃくでば！ 第一視点（後書き）

多分こんなかんじです、美鶴。
どうです？

あなたも美鶴になってみませんか？

しゃくでば！ 美鶴の文化祭まとめ

九月六日 前夜祭

俺は朝学校に来て思い出した。

そうか、今日は前夜祭か。

高校生活初の三日ぶっ続けの文化祭。

たのしみっちゃ楽しみだ。

「波音、おはよ」

仁は初めから知っていたようでわくわくした表情で俺の肩を叩いた。

「うす」

「おは！」

「お、おはようございます……」

その仁の後ろから詩乃が蒼をつれて来ていた。

詩乃はテニス部の衣装を纏っている。

「お、おはよう。」

てか、蒼つれてきてよかったのか？」

「んー、いいってさ。」

一般人にも貢献していることだしけち臭いことはこの三日間なしだって」

大塔高校にしてはいい選択だな。

「おっはよーしゃくつー!!」

今日はいいい日しゃくねえ!!」

「おー、美鶴。

来たか」

そのシルクハット姿はすぐ目立つんだな。

しかもこいつ身長超高い。

俺は美鶴に手を上げてあいさつした。

「波音、波音!

一緒にお店を回ろっしゃくよー!

フランクフルトとか焼きそばとか色々あるんしゃくよー!!」

まあ……。

別にいいか。

「おけ。」

とりあえずオープニングを見に体育館行くぞ」

仁が先頭に立って、蒼は背が低いおかげで前が見えないのか、詩乃の服の裾をがちり掴んでいる。

美鶴がその後ろを鼻歌を歌いながら続いて俺が腰を叩きながら欠伸をした。

・ ・ ・

オープニングムービー見た。
なんというか、すごいクオリティだった。

「今からお店回るわけだが……。
お前お金持ってきた？」

俺は美鶴にうちわをパタパタさせてシルクハットを飛ばそうと試みたが失敗した。

「もっちゃんのろんしゃくよお」

誇らしげに財布を見せられた。

「じゃあ、私はテニス部から揚げやんなきゃいけないから。
仁はマスコット製作で行かなきゃ駄目なんでしょ？」

詩乃が着替えていたのはそういうわけだったのか。
変にせくすいでいいと思ったのに。

「じゃあ、蒼をよろしくね。
行ってきます、面倒だけど」

詩乃は蒼を俺に預けて屋台の方へ走っていった。

「じゃあまあとりあえず……。
行くか」

「待つしゃく！」

三人になつて寂しいつてのになんだ、美鶴。
他にも遼とか冬蟬とかいるけど中の人を書くのが面倒だから省か
れている。

別に俺の友達が少ないわけじゃない。

「蒼さんは何が食べたい？」

「私は……その……」

フ、フランクフルトを……」

「じゃあ行くか」

「ま、待つしやく！」

待つてくれしやくつー！」

俺は蒼にはぐれんなよ、と伝えて人ごみの中に分け入った。

「おっす、永久妹か？」

「ちげーよ」

色々なクラスの友達から話しかけられた。
主に蒼について。

妹に見えるのかな、やっぱり。

「いらっしやーい

何本？」

俺も食うから……」。

「二本で頼む」

俺はVサインをした。

「二本ね、りょーかい。」

二本よろしくっ！

お客さんはマスタードつける派？」

俺は蒼を見た。

「つける？」

「……辛い駄目です……」

そうなんだ。

「俺はつける。」

たっぷり頼む」

「はい、出来上がり。」

ありがと、また来てくれ」

紙コップの中に入ったフランクフルトを受け取った。

一本はケチャップだけ、もう一本はマスタードたっぷり。
辛そう。

「ま、まつじゃぐう！」

「おい、邪魔だヴォケー！」

「う、ごめんしゃくつ!!」

何か聞えたけど別にいいだろ。
それから俺は蒼に連れられて色々行っ たな。
主に甘いものばかり。

「これおいしいですっ!」

ちなみにお金は俺が出した。
詩乃から蒼は五百円しかもらってないようでお金が足りなかったからだ。

結構痛い出費ではあったが……。

「波音さんありがとですっ!」

チョコを口いっぱい頬張って笑う蒼がなにやら可愛いので別にいいやと思う次第。

九月七日 文化祭

「あれ？」

美鶴来ないの？」

俺は教室にいる美鶴に話しかけた。

「どーせ、ヴおくがいたところで変わらないしゃくよあ。
さあ行ってくればいいしゃく。

べーつつにどーでもいいんしゃくよあ。

第一、文化祭ぐらいではしゃく奴がガキなんしゃく。
そもそもヴおくはこのしゃくではの主人公なのにまったく出番が
……」

がらがらがら、ぴしゃつ。

「じゃあ行こうぜ」

またお店回って蒼にねだられてパフェ買ったりして。

なんだかんだやって三時間ぐらいで教室にお茶でも飲みに戻った。

がらがらがら、ぴしゃつ。

「すぴいー……」。

じゃががつ……しゃくう……」

教室の中はクーラーがかかってなくて蒸し暑かった。
それを超えて美鶴はいびきをかいて寝ていた。

「なんだ、寝てんのか……」

俺は起こさないようにそっとお茶を飲んで教室を出た。

で、俺が文化祭終わって全員が教室に帰ってきててようやく美鶴は目を覚ましたようだ。

「しゃあなああああああああ！……！」

なんか叫んでるけどな。

「寝すぎたしやくおあああああ！！！」

1. 042020

もちろん続かない

おまけ

体育祭は美鶴出た。
色別リレーに出た。
足案外早いこいつ。
でもシルクハット邪魔でこけまくってみんなからブーイングくらい
まくっていたのは

いうまでもないだろう。

ちなみに元となっているのは美鶴のツイッターbotです。

しゃくでば！ 美鶴の文化祭まとめ（後書き）

美鶴の文化祭はさんざんでしたね。

多分来年もさんざんなでしょう↑

来年ぐらいはいい文化祭にしていきたいですw

しゃくでば！ 灼遊記

「さあ美鶴、早く次のところへ行くぞ？」

そういつてシエラ法師様は美鶴に呼びかけました。

「ま、待ってくれしゃくう……。」

法師様、疲れたしゃくよお……。」

如意棒を顎に備えた美鶴（孫悟空）はふう、とつらそうです。

「情けないですねえ……。」

どうしてそんなに休んでばかりなんですか？」

降妖杖（三日月型の武器）をもった蒼（沙悟浄）は美鶴をせせら笑いました。

「つらいものはつらいんしゃくよお……。」

「ほら、立て美鶴」

シエラ法師様はなにやら呪文を唱え始めました。
すると……

「しゃああああああ……！！
い、痛いしゃく……！！」

美鶴のシルクハットが縮み、美鶴の頭をぎりぎりと締め付けるでは
ありませんか。

「分かった、分かったしゃくよお!!
波音、力をかすしゃく!!」

はー、やれやれ。

俺（猪八戒）は釘（すき『鍬』みたいな武器）を地面において立ち上がりました。

「ありがとうしゃく、波音」

「ん」

一行は砂漠を歩いていきます。
もう日が暮れそうです。

「足が痛いしゃくう!!
助けて欲しいしゃくう!!」

「うるさいですよ、美鶴。
静かにしてくださいよ」

蒼はまったく、と髪をかき分けて言いました。

「波音、助けてあげろ」

「え、なんで俺が……」

「逆らうのか?」

「いえ……」

俺はシエラ法師様には逆らえせん。

しぶしぶ美鶴を助けようとした、そのときでした。

「金目の物を置いていけー！」

近くの石の脇から屈強そうな男が二十名ほど現れました。

「蒼、やってしまいなさい」

シエラ法師様はその男を見もせずに蒼に命令されました。

「了解です、シエラ姉様」

蒼は武器を男達に向けました。

「たかが小娘一人、なめるんじゃないぞーあああああ！？」

日本語でok状態です。

蒼はにやりと笑うとくるりと武器を一回転させました。

「な、なんだ……急に空が暗く——」

男達は上を見上げて言葉を失いました。

そこには超巨大な戦艦が浮いていたからです。

次の瞬間閃光が走り、男達は全員消失しました。

「さ、行きましょうシエラ姉様」

・

それから二日たちました。

シエラ法師様たちはある村人から金閣と銀閣の退治を頼まれました。シエラ法師様はそれを軽々と承諾すると金閣、銀閣の済む洞窟に向かいました。

「たのもー」

俺の言葉に反応するように扉が開くと中から二メートルはある怪物が現れました。

「なんだ、貴様らは？」

怪物は唸るような声で俺達を眺めます。

「しゃーっしゃっしゃー！

死ぬしゃくよお！」

美鶴の顎如意棒が唸ります。

金閣はそれを掴んでポイツと放り投げました。

「しゃあああああああ」

美鶴は洞窟の壁にぶつかりのびてしまいました。

「なんのようだ？」

何もなかったかのように金閣は俺達に問い直しました。

銀閣も横で頷きます。

「村人から退治を頼まれた。
だから——」

シエラ法師様は右手のレーザーで金閣を吹き飛ばしました。

「なっ——!?!」

戸惑う銀閣の首にシエラ法師様は刃を突き立てると

「やめ……もう悪さはしな——!」

銀閣の体をばらばらに分解してしまいました。

・
・
・

「ありがとうございます。
これでようやく平和に過ごせます」

村人Aがシエラ法師様にお礼を言います。

「いやいや、当然のことをしたまで。
では……」

姿が遠くなってゆくシエラ法師様の後姿を村人達はありがたや、と
拝みました。

「ところで、シエラ法師様の一行の人数が減ってはおらぬか？」

ふと村人の誰かがそんなことを口にしました。

「なにやら金閣に食われてしまったらしい。

悲しそうな顔をしていらっしまった……」

「しゃあああああああああああ……！！

ほっていかれたしゃあああああああくあああ……！！」

続くかも

しゃくでば！ 灼遊記（後書き）

もちろん続きません。

たまには文章を変えてみるのもいいかなーっと思っただいです。

しゃくでば！ マジ本気。

・

「しゃあああん！！！」

そんなのありしゃくかあああああ！？！？！？」

「赤甲羅型通常弾頭ミサイルはバナナ型チャフをあらかじめ車の後ろにセットしておくんだ。

そうすりゃー防げる」

「棘付青羽甲羅型爆炎拡散弾頭ミサイルはどうすりゃいいしゃくか！？」

「あー、それは運だな。

正直避けれる方がすごい」

「もう一回しゃくよ！！！」

「おk」

・ ・ ・

「しゃあああああああん！！！」

そんなあああああああん！！！！！」

「あえて星型無敵装甲を最後まで発動させないってのも手だぞ。
八位にわざと落ちてそこから星型無敵装甲をゲットするだろ？
んでー……みたいな？」

「も、もう一回しゃくー!!」

・ ・ ・

「しゃあああああああああああ!!!!!!」

「落ち着け。」

とりあえずテクニクを磨け。

いきなり水にダイビングするドライバーがどこにいる」

「そ、そうしゃくね!!」

ま、まあ今のは本気じゃなかっただけしゃくからあ？」

「はいはい」

・ ・ ・

「しゃあああああああん!!!!!!」

あの茸型急加速ロケットブースターがうざすぎるしゃくよおお！
!!!」

「直線を使わないからだろ。」

アホか」

「緑甲羅型ロケット弾ってどうやってよければいいんしゃくか!?!」

「それはドライビングテクニクの問題じゃね？」

まあそろそろ完走できるようになってきてるし大丈夫だろ」

・ ・ ・

「ま、まあ今の波音の走りは七〇点しゃくね？」

次からはヴおくが百点の走りを見せてやるしゃくよ」

「ほいほい」

・ ・ ・

「ま、まだ本気じゃないしゃくよ。

大体波音の実力はつかめたしゃく。

次からが本番しゃく」

.....。

・ ・ ・

「このっ、ずるいしゃくよ!!」

「いてっ!

この野郎、なにすんだ!!」

「ゴール直前で丸型手榴弾なげてくるなんて反則しゃく!!」

「うるせえ、それがこのゲームなんだ!

ヴァリオカートは戦争ゲーなんだよ!!」

「もー許さないしゃくよ!

そもそもどうしてヴおくばかりを狙って赤甲羅型通常弾頭ミサイルをぶっ放すしゃく!?!」

「楽しいからに決まってるだろアホか!!」

「それがむかつくんしゃくっ!!」

「このっ、また殴りやがったな!

いいだろ、次の場所で勝負決めようぜ!」

・ ・ ・

「美鶴死ね!!」

「ぐふっ、だっえ、じゃぐあ!

負けだくながっただんじゃぶもん!!!!」

「だからって人のコントローラーに手を出してくんなー!!
リアルファイトしたいのか、この野郎!」

「も、もう波音なんて知らないしゃくもん!!
ふーんだ!!」

「帰りざまにチップス沢山張ってんじゃねー!!
コーラ口つけて飲むな!!」

「もう帰るしゃく!!
ぶーだ!!!」

「たたくもあ……」。

美鶴は怒りながら部屋から出て行った。
友情崩壊ゲームって本当にあるもんだなあ。

オチなし。

美鶴の言い訳。

「まあヴおく本気出してなかったしゃくし?」

「そのキャラで勝てんとおかしいしゃく」

「波音の実力分かったしゃく。
次から勝ちにいくしゃく」

「僕は本気じゃないしゃく！
だから負けてもどーでもいいしゃく！」

「ヴおくが勝つたらお前が可哀想だからわざと負けてやってるだけ
しゃく！」

もうむかついたから本気出すしゃく！」

他にも多数あり。

つづかない〜

しゃくでば！ マジ本気。（後書き）

なんか漢字ばかりで難しいですが……。
大丈夫ですよ。

ええ。

よく読めばどれがどれか……分かるはずですよw

しゃくでば！ 人類絶滅の日

「と、いうわけでえ、しゃく。」

あまりのネタのなさに時事ネタに乗っかってみる次第しゃくっ

何がと、いうわけでえなんか知らんが。

「今日は十月二十八日。」

なんかマヤ暦がどーのこーので今日人類が滅ぶらしい」

俺は何やらわくわくしている美鶴に話しかけた。
こいつ、お祭り気分なんだろうなあ。

「えっ？人類が滅ぶんしゃくか？」

「えっ？

知らないでわくてかしてたの？」

「しゃくしゃく」

はあー……。

胃が痛い。

「波音、本当に人類絶滅しゃく……か？」

「えっ、うん。まあ」

多分だけど。

「ならこんなことしている場合じゃないしゃくよお!？」
まだ僕やりたいことがたあーつくさんあるんしゃくっ!」

ほう。

「例えば？」

「た、例えしゃくか？
しゃふっふっふ……」

美鶴汁が顎から分泌されている。

前も言っただと思うがこの美鶴汁は美鶴がえっちなことを考えると出てくるのだ。

やだ、臭い。

よし殴ろう。

「じゃぐっ」

「それ以外だ、それ以外。
やりたいこと!」

「ほっぺたが痛いしゃくう」。

そうしゃくねえ……。

一度でいいから僕が貯めに貯めたお金を全部おやつに替えて……
それで……」

そういえばバイトしてたなあ、こいつ。

あれからまだ続けてるし、結構お金貯まってるんじゃないか？

「ちなみにいくらあるんだ？」

「ざっと一万円しゃく」

おお!!

「いいやん!

やってまえ、やってまえ!」

「よーっし!

やるしゃくっ!

やってやるしゃくよ!

もともとは二万円のViiを買うために貯めていたしゃくが使っちゃうしゃくっ」

美鶴は俺の家から飛び出していった。

・
・
・

「か、買ってきたしゃく……はあはあ」

「お疲れ」

出て行って一時間後。

手に大量のおやつを持って美鶴は帰ってきた。
チヨコやら飴やらいろいろある。

「そしてこれを……一気に食っちゃく!
しゃむぐむぐ……」

包装を破り、中のおやつを口いっぱい詰め込む。

「波音も食べるしゃく？」

「いや……。」

俺はいい……。」

腹壊しそうだ。

あまり甘いのが好きじゃないしな。

「そうしゃくかあ。」

甘くておいていーしゃく。

チョコおいていーしゃく。

飴おいていーしゃく。

しゃーしゃしゃっ」

なんかむかつく……。」

黙って食いやがれこの大ばか者。

「しゃむしゃむ……。」

あ、何か俺も腹へってきたなあ。
というか地球本当に滅びるのか？

・
・
・

そして十二時間ぐらいが過ぎた。

「げっぷ……。」

もったべれないじゃぐ……」

「そりゃ全部食う必要はなかっただろっに全部食ったからだろっが」

ゴミ箱からあふれ出たゴミ。

包装のビニールが足の踏み場もないぐらいに散乱している。
俺の家なのに。

「ん？」

ぼーん、ぼーんと携帯が小さく震える。
深夜十二時を過ぎたのだ。

「げえっぷ。」

まだ地球は滅びないじゃくかあ？
いーつまで待たせるじゃく？」

あー。

「美鶴、非常に言いにくいんだが……」

「じゃく？」

こいつが口開くと超甘い臭いする。
しゃべるなよ、もう。

「もうな。」

二十八日終わった。

つまり――」

大きく息を吸った。

「人類は滅ばなかった」

「な、なんだってーしゃくあああ！――！」

あふたーすとーり

「なあ、波音」

？

どうした、シエラ。

「どうして美鶴あんなに落ち込んでんの？」

「ああ。

あんまり触らんほうがいいぞ」

「分かってるけど……」

「一万円もつかってヴおくはおやつを……。

おやつに一万円も……。

ヴおくは一体どれほどバカなんしゃくかあ……」

もっと早いところ言ってやればよかったかな……。

しゃくでば！ 人類絶滅の日（後書き）

やれやれ。

今日は地球滅びそうにないですねえ。

滅びられたくはないんですが少しがっかり……↑おい

他にも色々オチ考えていたのでここで紹介しようかな。

いや、次、次の更新に回します。

それでは、ありがとうございました。

しゃくでば！ シャクネットミッル

「はい、こちら。

新しいTVしゃくう」

そういつて美鶴は隣においてあるテレビをぱんと叩いた。

「このプレズメス一二型が今ならたったの四万円しゃく！
どうしゃく？

お買い得だと思わないしゃくか？」

「ごそごそと台の下からテープレコーダーを取りだす。
いや、違う。

あれはDVDプレイヤーだ！

「それに今ならなんとこの最新型！

SONNEYのブルーレイ再生機もついてくるしゃく！
それでもお値段は変わらずたったの四万円しゃく！！
テレビの前の皆、どうしゃく？

お買い得だと思わないしゃくか？

そうしゃくよね。

思っしゃくよね。

お電話は090-○○○○-1111にお願いするしゃくね！」

そういつて美鶴は隣に立っている俺にぱちんとウィンクした。
GJな紹介だったぞ美鶴。

「それじゃあ次の商品に移りたいしゃく！
次の商品はこちらっしゃくよ！」

いつの間にやらTVは消えて変わりに一枚のぬのに覆われた台座が出てくる。

「アイスフルメーカーしゃく！」

これはどんなのかっていうとしゃくねえ……「ごほん」

スタジオが暗闇にどつぱり浸かり、セットが容易される。

俺はパジャマに着替え、美鶴は台所に立った。

ライトが点灯。

場所は朝、俺が起きてきた瞬間という場面になっているはずだ。

「ふあー、おはよう美鶴」

わざとらしく欠伸をして寝起きをアピール。

「おはようしゃく、マイケル」

誰だよ。

「もう少しそこに座って待っていてくれしゃく。」

もうすぐ出来上がるしゃくから」

「何がだい？」

俺は立ち上がり美鶴の手元を台所と通して眺める。

「ほら、アイスクリームしゃくよ？」

美鶴特製コクアアイスしゃく！」

俺は「へえー！」とハイテンションに返事をして
スプーンで一口すくって口に入れた。

「うまい！

なんだい、このおいしさは！？」

わざとらしくおののいてみせる。

「H A H A H A、おいしかったしゃくよね？
これしゃくよ、これ！」

そういつて美鶴は戸棚からカップのようなものを取り出した。

「なんだい美鶴、これは？」

「マイケル、まあ見てるしゃくよ。
これはアイスマンジャガーっていうナイスな代物しゃくよ。
これはこうやって……」

そういつと美鶴はコクアコーラをアイスマンジャガーのポットの中
に入れた。

「スイッチを入れるだけ。
どうしゃく？」

「OH！
本当にそんなに簡単であーんなにベリーナイスなアイスが出来る
って言うのかい？
H A H A H A H A、そんな便利な道具があるわけないだろう？
そんな道具があつたら二〇一二年に地球は滅びないよ？」

美鶴はにやつと笑うとスイッチを入れた。
予定通りである。

「これでもう完成するしゃくよ？」

テレビの前の奥様、あなたが洗濯物をしているうちにアイスクリームが出来ているしゃく。

どうしゃく一台」

「おいおい、それはまだ早いつてもんだぜ？
とりあえず食わせてくれよ」

「Yeah！」

そつくるのを待っていたしゃくよ！」

「Yes！」

うまいのを頼むぜAh？」

美鶴はアイス略の中からコクアコーラアイスを取り出した。
俺はさつきも食べたそれをまたさぞうまげに食う。

「What!？」

これめっちゃくちやうまいぜよ、美鶴！」

「そうだろう、そうだろう？」

そりやうまいのを作っていたしゃくからね？」

「他にいろいろ作れたりするのかい？」

「そつくると思っていたしゃくよ？」

そう、これは中に入れるジュースによってアイスが出来るんしゃく。

だからアイスの可能性はジュースの数だけあるってことしゃくよ！」

どうだ、この白熱の演技。

これを見た人はついつい買っちゃまうだろう。

「そいつあすげえ！！」

なんてハイテクなマシーンなんだ、こいつあ！？

俺も欲しくなってきたぜ、美鶴！」

「oh、マイク！

そうだろ、こいつは本当にイカスマシーンだろう！？」

しゃくがないぞ美鶴。

で、俺はマイケルだろ。

誰だ、マイク。

「H m m……でもパンを焼いているうちに出来るマシーンだ。相当高いんじゃないのかい？」

俺はまたアイスクリームを口に入れつつ聞いた。

「答えはNOしゃくよ、マイケル。なんとこのマシーン機。

たったの五千二百円しゃく！」

「Oh , really! ?

めっちゃくちゃ安いじゃないか！」

顔がキモイが圧倒的だった」

「じゃ……？」

「じゃああああああああああああああ………」

「おちよわし、おちなし」

しゃくでは！ シャクネットミツル（後書き）

どうです？

みなさんも、アイスマンジャガー。

おいしいアイスをいつでも！

しゃくでば！ 人類滅亡の日 【The Another End】

人類滅亡の日。

結局来なかった……と思いきや。

どうやら今日、十一日もやばいらしい。

そんなしゃくでばの世界のもう一つの終わりを見てみよう。

（前回の人類滅亡の日の別編です）

前回までの牛筋。

人類最後の日らしい。

で、美鶴はおやつが一万円分食うことを思いつく。

俺は呆れながらもそうしたら？と、アドバイスするのだった。（本当かよ）

467

「で、おやつを買ってきたしゃくう」

美鶴はほれ、と俺にビニール袋を見せつけた。

本当に買ってきたよ、こいつ。

一万円相当。

バカじゃないのか？

「まじでやるのか？」

「当然しゃく。」

人類がどう終わろうが僕はこれを食べきってみせるしゃくっ！

しゃむっ！！

しゃむぐむぐしゃむぐぐぐっ！！

ヴォラックサンドウアーがおいしいしゃくっ！！

しゃむっ！！

しゃむぐぐぐぐっ！！！！」

えーと。

吸引力の変わらないただ一つの顎。

「しゃぐぐぐぐっ！！

ずぶっじゃががららんむぐいしゃ！！

すゃごそっそっつつっ！！！！」

なんて音だよ。

普通じゃありえない音だぞ、それ。

どういうことなんだよ。

「そおれにしてもお！！

今は何時なんしゃくがあああっんおお！！！！」

今か。

「夜の七時つてところか……。

それにしても明るいな。

一体なんでこんなに明るいんだ……？」

俺は窓から外をちらっと見た。

「うあああああああ！！！！！」

絶叫した。

小さいながらも隕石が燃えながら落ちてきていたのだ。

そりゃ明るいわ。

——じゃなくて。

「おい、美鶴！

逃げるぞ！！」

「いつやあしゃくつ！！」

俺は美鶴の首筋を掴んだ。

だが美鶴はおやつをむぐむぐ頬張ってその場から動こうとしない。

「バカ！！

しにてえのか、ボケ！！」

なんで、国は言わなかった！

この街は見捨てられたってのか！？

「おやつはヴおくのものしゃくつ！！

ずえーったいに波音には渡さないしゃくつ！！！！」

ああ、もう！！

俺は美鶴の首根っこを掴んで窓に目を無理やり持っていた。

「じゃ………？」

美鶴はポロリと手からチョコを手放す。

「しゃ、しゃああああ……！」

逃げるしゃくよお、波音……！」

言われんでも……！」

車はあるか……？」

そうだ、シエラは……？」

そんなことを今気にする暇はない。

最終兵器でもあんなものに立ち向かえるわけがないんだ。
早く逃げないと死ぬ。

「な、なんしゃくかあ、あれ……？」

美鶴は恐怖で窓から動けなかったのだろう。

隕石よりも大きな船がこの街を守るように空に浮いているのを見つけた。

「超空要塞戦艦ネメシエル……！」

蒼さんでもあれは無理だろう……！」

俺もすぐにその光景を目にして悲鳴を上げる。

そのネメシエルの隣を二つの小さな粒が飛んでいるのが見えた。

「シエラとメイナも……！」

「しゃ……」。

が、がんばるしゃくよお、三人ともお……！」

ヴおくはまだ蒼のちっぱい（ちいさいおっぱい）に触ってないし
シエラのデカぱい（おっきいおっぱい）にもメイナのにも触っ

てないしゃくおお!!

この三人を両手にはべらせてハーレムを築きあげたりとかもしてないしゃくう!!

それに、それに!!

嗚呼、沢山ありすぎてえへへへしゃく」

このタイミングでそれをカミングアウトっすか。

さすがっす、美鶴。

美鶴汁臭いから殴っていいか。

そんな俺達を無視してだんだんと輝きを増してゆき、落ちてくる隕石。

その隕石に向かってネメシエルが艦首を向けた。

甲板上の装甲が展開され、それだけで普通の戦艦の大きさを超える主砲が露出する。

シエラとメイナもお互いの手をつなぎあい、一つの巨大な砲身になると

ネメシエルの主砲にくつついた。

隕石よりもまぶしい光がそこから発せられてゆく。

「がんばれえええ!!

ここでしゃくでばが終わってたまるかああああ!!

ここは俺の本編でのストレス発散なんじゃヴおけええええええええ!!

「そ、そうだったんしゃくかあ!?

ひどいしゃくよお!!」

「うるせええ!!

本編は今色々としリアスなんだよおお!!」

陽天楼、ネメシエルの別名が現すとおり、夜だというのに一つの太陽がその場に出現したようだった。その光は急速に縮まったかと思うと

「しゃっ!？」

目を潰すほどの巨大な光柱となって隕石を飲み込んだ。思わず目を覆う。

まぶしすぎて目が開けられない。

ようやくその光も収まったかと思うと

「や、やったしゃくよお、波音!波音!」

美鶴が俺の背中をばしばしと叩いた。

俺も目を開けて空を見る。

そこにあつたはずの隕石はなくなっていた。

「俺達、助かった……のか？」

「うっおおおおおおしゃくおおお!……!」

感涙極まってますな。

俺も涙で前が見えないよ。

人類はこうして守られたのであつた。

めでたし、めでたし。

「ああ!!」

せっかくおやつを一万円分かつたしゃくよお!?

無駄遣いしちゃったしゃく……。――

またバイトで貯金しゃく……。――

「まあそう落ち込むなって
生きてる。
それでいいじゃない」

つづくかもお。

おまけ

「で、誰がちつぱいですか、クソ顎」

と、蒼。

「へー、そんなHなこと考えていたんだねえ？」

と、メイナ。

「——死ね」

と、シエラ。

三人はいつの間にもやら美鶴の背後に立っていた。
あの美鶴のカミングアウトを聞いていたというのか。
すげえ余裕だ。

しゃくでば！ 人類滅亡の日 【The Another End】（後書き）

ありがとうございました。

いやぁこんなエンドを考えていたのです。

実際こっちの方がよかったかなあ……と思わないでもないです。

まあもう一つのしゃくでば、人類滅亡の日、として

楽しんでいただければ幸いです。

しゃくでば！ 蒼の危険

「波音さん、波音さん！」

家のドアがバンバン叩かれた。

せつかくの日曜日だというのに誰だろう。

玄関の扉を開けた。

「おやおや、蒼さんじゃん。どうしたんだ？」

息を切らせ走ってここまで来たようである蒼は頬を赤く染め苦しもうだった。

「た、助けてください！」

「へ？」

蒼さんが俺に助けを？

「とりあえず中に入んな？」

・ ・ ・

「実は……ネメシエルを操れなくなっただんです」

へ？

「ネメシエルってあの戦艦だよな？」

あの一六二四メートル、二千五百万トンの？

「……はい」

「いつから？」

今はシエラもメイナも、詩乃もみんなして日曜日なのに学校に泊まり込みの勉強会中で誰もいない。

「今朝からです……」

時計は午後二時。

「本当に動かないの？」

再度念のため聞く。

「はい。何回やっても何回やっても何回やっても何回やっても……ダメだったんです」

「そおんな事があるんしゃくか？
とんだ災難しゃくねえ、蒼オ？」

出たー。

流石、主人公。

出るときも突然だな。

「あ……クソ顎……」

美鶴はくちやくちやと俺の冷蔵庫中にあつたケーキを食べていた。クリームが顔中にくつつき美鶴の顔は真っ白だ。

「なんでそうなった？」

ケーキぐらい綺麗に食えんのか。

「食つてたらこうなつたしゃく。そんなことより、蒼お？」

蒼さんは首をかしげた。

「何ですか、クソ顎？」

「そのクソ顎っていうのやめた方がいいと思つしゃくよお？」

にやける美鶴。

なんか調子にのつてる顔だ。

「へ、ど、どうしてですか？」

「わーからないしゃくかあ？」

今の蒼はヴオクには勝てないからしゃくよお？」

ぎろんと怪しい目つきで蒼を挑発する美鶴。

「う……」

確かに蒼さんの体や力を考えれば美鶴に勝てるのかどうかすら……。

「で、でも私が負けるわけがありません！
クソ顎なんかに負けてたまるかですよ！」

「ならやってみるしゃくかあ？」

あー、暴れるなら家の外で頼むぜ。

・
・
・

「しゃ……しゃ……」ピクピク

「えー……」

結論から言つとあっさり美鶴が負けた。

蒼さんがえいっとばかりに突き出したパンチが顎に当たったのだ。

「しゃ、しょおんなあ……しゃく……」

「勝っちゃいました……」

「まあそれはさておき」

地面でびくんびくん波打っている美鶴を無視して蒼との話に戻る。
外だけ。

「原因が分からんな。
なんでネメシエルが動かせないのかも」

「私このままじゃ……核としてクビになっちゃいますよ……。
ベル力軍からも追い出されて……うう……」

半泣きになっている蒼。

「ん？」

蒼一体何を頭につけているんしゃくか？」

いつも以上に早く復活した美鶴が蒼の頭についた何かを取った。

「へ？」

何がついていたんですか？」

「これしゃくよ、これ。

アルミホイルしゃく」

アルミ……？

「アルミですか……！？」

わ、わ、ありがとうございます、クソ顎！

これで……」

蒼は目をつぶった。

急に空が暗くなり見上げた。

押しつぶされるように低い高度をネメシエルが浮いている。

「やったっ！」

アルミホイル……ね。

「どうしゃく？」

ヴォクのおかげだったしゃくよね？」

「あ、クソ顎さん。

最後にこれだけ試してもいいですか？」

威張る美鶴に蒼が願うする。

「んー？

当然しゃくよお。

なーんでもばっちこいしゃく！」

「ありがとうございます。

では……」

ゴンゴン……とネメシエルの砲塔が動いた。

「発射っ」

「しゃ！？」

オレンジ色の光が目をつぶらせたかと思うと美鶴はもうそこには…

…いなかった。

いや、いるけど。

黒こげで。

「やった、完璧に元に戻りましたっ」

「しゃくう……」。

何でいっつも最後はこうなるしゃくかあ……？」

運命だからな。

つづくかも

しゃくでは！ 蒼の危険（後書き）

あまりいいネタが浮かばなかった＆なんか美鶴いじめたかったから
こうなった（笑）
ごめんね、美鶴。

受験で更新金曜日にできなくてすいませんでしたっ！

しゃくでば！ スーパーミツルブラザー？

「ん……？」

「しゃ……く？」

俺と美鶴は目を覚ました。

地面に横たわっていたため、お互い顔が斜めに見える。

「おい、なんだよ？」

俺達どうしちゃったんだ？」

俺は起き上がって空を見上げた。

「なんだ、あの雲？」

ドットを打ったように平面。

「ん、なんしゃくかぁ、この地面は？」

美鶴が地面を見て首をかしげている。

俺も見ただ。

平面だ。

「て、美鶴おまえも平面かいっ！」

「は、波音も平面しゃくよぉ！？」

げ。

・ ・ ・

つまり……。

これはあれか。

考えた。

某赤い帽子の人が跳ねたりしてゴール目指す……的なの？

「と、とりあえず、先に進んでみようぜ？」

「しゃくう……」

キモイから近づいてくるな、おばか。

「は、波音……」

ちよつとまで。

平面と平面だから落ちる心配はいらないんだろつが……。
俺の予想だとこのブロックをちよいと叩けば……。

「おらつらつ」

「何やってるんしゃくかあ？」

「ん？」

いや、あのブロック叩けんかなあつて」

「ヴオくに任せるしゃくよおっ！ー！」

「ん？」

「じゃあ、頼むわ」

はりきつてんなあ。

「そおいやあつー！」

「しゃつこおおううー！！！」

美鶴は勢いよくとんだ！

そして見事にブロックを叩いた！

何か変なによこによこつて音がした！

「うわっ、何しゃくかあ、これ」

ブロックの上から落ちてきたものをみて美鶴はうえーっ舌を出した。

確かに……。

これは……キモイな。

きのこつていうよりかは……何？

「気持ち悪いしゃく」

美鶴の顔がそのまんま出てきたよう……。――。

「ばいっしゃく」

「おおおいー！！」

アホかあああー！！

俺は美鶴きのこを追いかけるべくダッシュした。
待ちやがれ！

「よっしゃ、きゃっ……」

崖。

「バカ美鶴ああああ！！！」

てろり。

軽快な音楽が響いたかと思うと目の前が真っ暗になった。

・ ・ ・

「波音、波音大丈夫しゃくかあ？」

う……。

「美鶴か……？」

ああ、なんとか……」

平面——だよな。

夢じゃないってことか。

「さっきのやつ、もう投げんなよ。
もしかしたらいいやつなのかもしれん」

俺は美鶴の手を借りて立ち上がった。

さっきの美鶴きのこをゲット。
ゲームだったらこれを食べば！
食べ……ば。

——食うの？

これ？

美鶴の顔きのこ？

「おい、美鶴」

さっき俺が落ちた崖を覗き込んでいる美鶴の肩を叩いた。

「なんしゃく？」

振り向いた瞬間に美鶴きのこを口に叩き込んでやる。

「食えッ！

そして飲み込むがいいっ！」

「しゃむぐむぐ……。

ごくしゃく。

しゃあ！？

こ、これはいったいなんしゃくかあ！？！？
体の奥底から力がわいてくるしゃくよあ！？？」

おお。

でっかくなってる！

美鶴でっかい！！

「よし、美鶴。

これで効果は分かった。

先に進むぞ」

・ ・ ・

「ねえ、ねえしゃく」

「ん？」

美鶴が顎で突付いてきた。
何だよ。

「一体全体どうしてこんな所にきちゃったんしゃくかねえ？」

「知らん、俺が聞きたいわ」

お。

前からのそのそと黒っぱい何かがやってきた。

「おい、美鶴。」

ちよつとアレ当たってみてくれ」

「しゃく？」

なんしゃくかあ、あのしょうゆごまだれみたいなきのこは。
別にいいしゃくけど……」

美鶴が俺の二倍ぐらいの身長があるせいで話しかけるたびに上を向かにゃならん。
首が痛い。

「しゃあああああああああああ！！！
なんしゃくかあああああああ！？！？！？
なんか生暖かいしゃあああああああっ！！！！！」

おうおう。
当たったか。

「あれ？」

美鶴は小さくならない。
全然変わらない。

「よし！」

なら俺だって。

——行けるっ！！

ででっ
♪

「なんでだよおおおおおおお
てろってろってろってん。」

っく。

しゃくでば！ スーパーミツルブラザーズ？（後書き）

なぜか続きます。

マリオは個人的にもすごく好きなゲームです。

どうしてマリオは靴の裏は例外なのか。

ぶつかっても平気なのかを、今度考えて見たいです。

しゃくでば！ スーパーミッスルブラザー？

前回までの牛筋

なにやらよーわからん世界や！

「あ……うおう……」

「あ、起きたしゃくか？

大丈夫しゃく？」

近くに顔がでかい美鶴がいた。

でも平面だ。

ああ、そうか……。

確か……よく解らないやつに触れて……。

「とにかく二次元の世界から三次元の世界に戻ろうぜ、美鶴。
残機とかはないようだし……」

「今度はうゝおくが先に行くしゃくね？」

頼りないが任せるのはこいつしかないつ。

「頼む」

もちろん地雷撤去的な意味で……だ。

・ ・ ・

「あ、波音、波音！
前から亀さんが歩いて来たしゃくよ？」

亀ね、亀。

大丈夫、雑魚だ。

「美鶴、踏むがよい」

「わかったしゃくつ！」

ここでやられる……なんてことはないよな？
あつ美鶴、よし！

「あるえ、消えないしゃくね？
もう一回踏んでみるしゃくう」

ちよ、待て！
美鶴の踏んだ甲羅は滑らかに回りながら……。
ででっ

「ばかやろおおお！」

ぐふう……。

・

・

「起きるしゃくっ」

「う……がは……」

腹を押さえつつ痛みを堪えて立ち上がる。

「まあ、大丈夫っぽいしゃくね？
さあ先に進むしゃくう」

何で俺ばかり……。

・

しばらく穴に気を付けつつ先に進むとようやくゴールの旗が見えてきた。

これで帰れる……。

ようやくだ、よーやくだ。

「えいつの、ちよろろんしゃくっ」

それにしても――。

「ひゅーははーっしゃくおー！」

『しゃく〜ん』っていうジャンプの音、どうにかならんのか？

雑魚がつぶれるときも『しゃぶちっ』といった感じで……。

そういえば俺がジャンプしたときの音ってあまりよく聞いてなかったな。

どれ……。

俺はその場でジャンプしてみた。

『はの〜ん』

いやだあああつ。

がつくりすると共に一度穴に飛び込んだ。

・ ・ ・

「これしゃくか？」

「ああ、それだ。

それにしがみつくことによってゴール、お家に帰れる」

目の前には一本の棒。

それに美鶴がしがみつく！

旗が降ろされて……また軽快な音楽が流れたかと思うと
花火が背後に七つ上がった。

「よし、建物の中に入ろうぜ」

「しゃくしゃく」

建物の中は真っ暗闇だった。

そして頭を何かで殴られたような衝撃がしたかと思うと……。俺達はがっくりと地面に崩れ落ちた。

・ ・ ・

「う……しゃく」

「ん？」

帰れたんだよ……な？」

俺と美鶴はまた何かよく分からないところで目を覚ました。

ここは？

ぴちゅん、ぴちゅんと地面に水滴がぶつかる音が静かに響く。あわてて自分の上を見上げた。

白い文字で表されたこのステージの名前。

『 1 - 2 』

つづかない

しゃくでば！ スーパーミッルブラザーズ？（後書き）

小さなブラックジョークでした（そうか？

この後、波音たちはがんばってラスボス倒します。
そしてシエラを助けてお家に帰ったのでした。

しゃくでば！ 嫌がらせ

「ねえ、ねえ、波音、波音しゃく」

んだよ……。

「……………」

「しゃくしゃく」

何なのさ。

言うなら早く言えや。

「うゝ おく思つたしゃくよ」

何を。

早く言え。

「しゃく、思つたしゃく」

「おう、おう……？」

「うゝ おく、帰つたらきちんとしていい子になりたいしゃく」

はあ。

何かと思つたらそんなことか。

「いいんじゃない？」

しばらくの沈黙。

「波音、波音しゃく」

いらっ。

何？

まだ何か言いたいことがあるのか？

「うゝ おく思っ たしゃくよお」

「ほう。

なにをだ？」

本当は無視したかったが無視するとうるさいからなあ。

仕方なしに聞いてやる。

しゃーなしやな。

「僕、帰ったらきちんとしていい子になりたいしゃく」

「さっきも言っ たよな、それ。

何で改めて言い直したんだ？」

「大事なことだったからしゃく」

「……はあ」

またしばらくの沈黙。

ああ、手が痛くなってきた。

「ねえ、波音、波音しゃくしゃく」

「なんだ……」

半ば諦め気味である。

こいつは何を言っても聞かないんだ。

「僕また思ったしゃくよ。

家に帰ったら冷蔵庫のプリンを食べたいしゃく」

……。

「確かに……な」

疲れた。

まだか？

まだなのか？

「なあなあしゃく」

「……………」

「なあなあしゃくしゃく」

「……………」

「なあなあしゃく!!」

うるさい。

ため息を吐きながら美鶴の顔を見た。

「なんだよ？」

「やつと僕を見てくれたしゃくね？」

それはいいんしゃく。

脇に置いておくしゃく」

ホモか。

「早く言え」

「うゝ おく達いつまでこうしてればいいんしゃくかねえ？」

そう言つて美鶴は下を見た。

「……………さあな」

俺も一緒に下を見る。

ぱつくりと口を開けた、崖は底が見えない。

風なんかはなくて体が冷える恐れはないが……………。

岩肌に捕まっている手が痛い。

美鶴が悪ふざけをして俺の背中を小さく押すからだ。

お陰でネメシエルの甲板から落ちてしまった。

とつさに掴んだものが美鶴の足だったなんて……………。

ついてないぜ。

「ごめんしゃくよお、波音……………」

「お前が変な思い付きで俺にちよっかいかけてこなかったら今ごろは太平洋でピクニックだったのにな。」

「……しゃくう……」

「おらっ、落ちろ」

俺は美鶴の手をたたいた。

「しゃくっ!？」

だからごめんしゃくつてえっ!！」

おまけ。

「よーやく来てくれたか……」

俺は下を見た。

巨大な戦艦が浮いている。

『まったく、何やってるんですか？
二人して』

蒼さんの声が崖に響いた。
すまぬ。

たすかってよかったあ……。

「しゃくしゃくしゃく……」

泣くな。

助かってよかったからって泣くな。
歡喜すんな。

「よーし！

今から太平洋へれつつごおおしゃくうつ
」

ネメシエルが火を噴いた。
美鶴が消えた。

「……そりゃそうだな。
お前のせいだしな、元はといえば……」

「しゃくうつ……」

消えてすぐに復活する。
さすがギャグキャラだ。

しゃくでは！ 嫌がらせ（後書き）

いろいろと状況不明なのはしゃくではだからです！

しゃくでば！ なん……だと？

「ケリをつけようぜ、美鶴……」

「いいしゃくよ……？」

いい加減どっちが強いかを決めるしゃく」

美鶴はすらりと剣を抜いた。

「つて、なんしゃくかこれはあ！？」

茸だった。

「なんでこのタイミングで茸なんだ……？
やるじゃないか」

「ふふつ、実はこれは波音を油断させる策略しゃくよっ——！
これで貴様を倒してやるしゃくっ——！」

ほう。

おもしろい。

面白いぞしゃくばやまあ！

「俺も貴様をこれでぶったおす！」

そっいつて俺は柄からパスタを抜いた。

「勝負だ！」

「しゃああああつ！」

茸と Pasta がぶつかり合う！

飛び散る火花もとい、胞子と小麦粉！

俺も美鶴もお互い一步も譲らないっ！

頭と頭をぶつけ合いひくことを知らないっ！

「やるじゃねえか……おい？」

「しゃっしゃっしゃ……。」

波音に負けてからヴおくは更に精進したんしゃくよ?。」

「ふはははは！」

ならその自信を今ここで撃ちぬいてやろう!。」

そう言って俺は Pasta を縦に持ち直した。

「な、何をするんしゃく?。」

「封印、解!。」

Pasta から強烈な光が発生した。

天井を射抜くばかりの光が美鶴と俺を包み込む。

「ふふふふ……。」

「な、なん……だとしやく。」

俺の手にあるのはほかほかに茹で上がった Pasta。

「剣から鞭へと変形する武器なんて見たことも聞いたこともないしやくよおっ——！」

俺は笑いながら美鶴に一撃を食らわせた。

「じゃぐっ!？」

美鶴はもろにそれを右からくらい倒れる。

「何て威力しゃくかあっ——！」

茸の剣にもついでに当たったのだろう。

茸はへにやりと折れ曲がっていた。

「くっ、剣が……！」

仕方ないしゃくねっ——!!

僕も本気で行かせてもらうしゃくよっ!

封印式・解!」

「なんだとっ!？」

くそっ。

俺の目を射抜く強烈な光。

赤と共に殺気を纏い美鶴の手に集約していく——!

この力、まさか……!

「ポセイドンマッシュルーマー!!」

巨大な剣茸となった美鶴の剣は輝いていた。
ちいっ……!!

「行くぞ、美鶴！」

「しゃああああああああ！！！！」

俺達は二人にやりと笑い、手を振り下ろした――！

「うるさい」

シエラ！？

次の瞬間俺達二人は頭を上にはずすと床に倒れていた。
最終兵器めつ――！

「何するんだよ！

せつかくいい展開だったのに！」

「そうしゃくよ！」

「なにがいい展開。

波音はゆでた Pasta 持ち出しし美鶴は串にさしたしいたけ持ち出すし。

「何考えてるの？」

しゅん……。

「ごめんなさい。

Pasta 返します」

「しゃくう……。

しいたけ返すしゃくよお……」

「 よろしい。」

じゃあ調理実習再開ってことで」

おまけ

「このパスタうめえ。
俺すげくね？」

「この茸うまいしゃく。
ヴおくすごいしゃくね」

「「ああ!？」」

「うるさいっ!」

しゃくでは！ なん……だと？（後書き）

うわあああ！

ありがとございましたー！

とりあえず書きたかっただけです。
ふへへ、さーせん。

しゃくでば！ なぜ

俺は美鶴に言った。

「なぜ」

と。

美鶴は黙っていた。

もう一度俺は言った。

「なぜ」

と。

美鶴は返事をしない。

美鶴……。

なんでだよ。

「なぜ」

美鶴はベットで寝ている。

安らかに……。

白いベットの中で美鶴は寝ている……。

「なぜだよ……美鶴」

なぜだろう。

俺は涙が止まらなかった。

こいつは昔からこうだった。

いつもバカなことをやって……。

食べ物の恨みは恐ろしいのだ。

しゃくでば！ なぜ（後書き）

恐ろしいのです。

しゃくでば！ 教え諭す

俺の名前は永久波音。

のんびりと高校生活を送る男だ。
今日ものんびりと……。

「うわっ！？」

「い、ごめんなさいっしゃく！」

なんだ美鶴か。

角で朝ぶつかるのかなんて王道だよ。

「ん？」

美鶴、何でいつもにまして顔が……？

「な、なあ。」

美鶴、どうしてそんなに顔が赤いんだ？」

俺は地面に倒れた美鶴に話しかけた。

鋼鉄のように赤く固い美鶴は返事もしない。

「おい、なんで返事しないんだ？」

再度問う俺の後ろから声が聞えた。

「は、波音……。」

そっちは消火器しゃく……。

ヴおくはこつち……」

へ？

あわてて後ろを振り向く。

「うわっ、美鶴!？」

「なんでそんなにおどくんしゃくか!？
ヴおくは元からこつちしゃくよ!」

……すまん。

「とりあえず学校行こうぜ。」

朝っぱらからこけるなんてついてない……」

制服を払ってゴミを落とした。

「そうじゃふね」(そうしゃくね)

「おい、何やってんだ」

「ふあにつふえ。」

しょうふあきをふはえてふんしゃくよ
「しゃくよ」

(何って。

消火器を咥えてるん

なぜに。

今まで以上に行動が謎過ぎるこいつ。

「一回いいから外せ、口。」

何を狙ってるんだ、今度は」

「ふは……」。

んむ、しゃく。

実は昨日読んだマンガにしゃくね。

パンを加えたきゃわいいおにゃのこが走ってて……」

「もういい、分かった。

それはいいんだ、俺も分かるから。

問題は何でおめーが消火器を咥えて走ってるんだってこと」

俺は消火器を足で蹴った。

中身入ってるのかこれ。

「いやーパンがなかったしゃくから……」

「パンの代わりに消火器がなと思うか？」

「もちろんのろんしゃ「ならねーよ」

なるかボケ。

頭に茸でも群生してるのか。

「もういい、学校行くぞ」

「りよふふあいしゃ「咥えるのやめろ」

・ ・ ・

「というか、お前の狙いは何？
一体何がしたくてそういうことしたの？」

学校の教室にて美鶴に再度聞く。

お前って言葉は使う主義じゃないけどもう美鶴だしどーでもいい。

「それは……そのしゃくね……」

もじもじして美鶴汁をだらだら。
あのね。

「もういい、分かった。
おそろくこうだろ？」

運命のおにゃのこに会うために……ってことだろ？」

ふー……。

「ぶつぶーしゃく」

「何でやねん」

「そのおにゃのこに会ってあーんなことや
こーんなことをするのが目的っていうことが抜けているじゃあ
！！」

はのんぱーんち。

美鶴は顔に直撃を食らって仰向けに椅子から落ちた。

「そこは言わんでもいい。
みんな分かってるから」

それで……なんだ。

「で、ぶつかったのがたまたま俺だったからよかったものの……。小学生とか小さい子だったらお前どうするつもりだったんだ？ 下手すりゃ泣かれるぞ」

俺は机の上においてあるペンを右手に持って美鶴に聞いた。ただした。ここでこいつを修正しておかなきゃもっとやばいことするだろ。

「もちろんそのまま恋人としてじゃごう！」

「——続けるぞ」

美鶴の顎に突き刺したペンを抜いて続きを話す。

「お前はもう高校生なワケだ。

何があつたか知らんがマンガに影響を受けすぎるのはいいかげんにしとけ。

「つたく、そもそも俺の気持ちのいい朝を壊すなどと愚行だ」

「しゃくう……」。

「愚行って何しゃく？」

辞書引け。

国語辞典を美鶴の前に突きつける。

「愚行……愚行。

——しゃくつ。

「しゃっしゃっしゃ……」

美鶴汁がまた分泌され始めた。
あーもう！

「チエストアー！！」

「しゃがああっ！！！！」

案の定こいつサ行見てやがった。
この愚か者。

「今の行為が愚行って言うんだよ。
分かったか」

「しゃく……」

美鶴は俺がチョップしたことにより凹んだシルクハットをいじる。
ったく……。

・ ・ ・

その次の日の朝。

「なんで、僕が？」

「いいから、一緒に行こうぜ。
メイナも」

俺は二人をさそつて朝学校に行くことにした。

美鶴は昨日の俺のお説教で多少なり懲りただろう。
そして例の角を曲がった。

「つと、ごめんなさいしゃぐシエラあああ!?!?!」

消火器が地面に落ちて音をたてた。

美鶴はすごい勢いでシエラにぶつかったかと思うとがたがたと震えだす。

「ほう……?」

一体誰かと思えば……。

美鶴じゃないか……。

死にたいんだよね?」

「じゃ………」

しゃあああああああああああああああああああ!?!?!

!?!?!?!?!

つづくかもあ

しゃくでば！ 教え諭す（後書き）

みなさんも消火器を啜えて走るなんて危ないことしないでください
ね！

あれ、人に当たったらマジで危ないですから。
消火器、重いし。

では、読んでいただきありがとうございました。

しゃくでば！ たただだしゃべるだけ

「なあ美鶴」

「しゃく？」

夕日が綺麗な帰り道。

川の土手に座って俺は美鶴に話しかけた。

「どうかしたしゃくか？」

あー、もしかしてう。こもらしちゃったしゃく？」

「ちげーよ、死ね」

「じゃあおし。こしゃくか？」

「それもちげーよ」

「じゃあ「しつこい」

俺は美鶴の言葉をぴしゃりと遮ると川を眺めた。

きらきらと夕日を浴びて小魚が跳ねる。

午後五時の綺麗な夕暮れ。

「じゃあいったいなんなんしゃくか？」

まじめなお話だったらヴォク聞かないしゃくよ？」

ぷい、とシルクハットごと頭を逸らす美鶴。

「いや……な。」

こうやって長いことお前と一緒にいるけどな……」

俺は静かに息を吸い込み空を見た。

ほわほわと白い雲が夕日でピンクに染まっている。

赤に沈みかけた街はあちこちから料理の煙を出して帰宅ラッシュの車を迎え入れていた。

「しゃく？」

ほめ言葉しゃくか？

どうなんしゃく？」

「お前と一緒にいるけどな……」

「しゃくしゃく」

「お前ほどわけ分からん男もえんなあ、と思つて」

「しゃくしゃく。」

そつしゃくよ、僕は……え？」

美鶴はしきりに頷いていたが唐突に我に返った。

「ヴおくしゃくか？」

ヴおくが意味が分からないんしゃくか？」

「おつ」

俺はこくんと返事した。

「お前ほど意味の分からん奴もいないだろ。語尾にしゃくつけてるし、アホだし。」

顎長いしうツと惜しいし髪の毛切れクズって感じだしそれでいてなんか主人公だけど俺よりも目だつてないしシルクハットキモイし、美鶴汁出すし顎長いし

かーちゃん綺麗だけどなんか毎回ボコボコにされてるし拳句の果てに出刃先輩とかについていくし

タイトルしゃくでばなのに最近あまり活躍してないし
そんで夏、海行くとき何あれ。

お前スク水で行くつもりだっただろうが、蒼さんまじびびってたぞ。

んで、あれだ。

他にもあるぞ言わせる」

「ちょ、ちょ、待つしゃく！」

そんなにヴおくって波音に色々と思われていたしゃくか!？」

「おうよ、あんちゃん」

美鶴はがつくりと肩を落とした。

さつき跳ねた魚がまた跳ねたみたいで水面が揺らぐ。

俺は一つの石を取ると水面に向かって放り投げた。

「いち、にー……あちゃーしゃくね」

三回——か。

自己ベスト更新だ。

水切り、って案外単純そうに見えて難しい。

平たい石をとらなきゃならないからな。

「じゃあ僕もやってみるしゃくよ」

「やってみ、やってみ」

美鶴に適当に返答してまた空を見た。

さつきよりも光量の落ちた空は端っことから黒が迫っていた。
この時間ももうすぐに終わり、夜が来る。

「えーい、しゃくつ」

美鶴の投げた石は何度か跳ね——ないね。
ないね、ねー。
ないね。

「も、もう一度しゃくつ！」

「好きにしろ」

夜になると星が出てまた綺麗な空になるが
俺はこの夕暮れ時の静かな時間が一番好きだった。
どうでもいい話だろ。

「えーいしゃくつ！」

「きゃんっ！」

え。

美鶴が投げた石は草原に飛び込んだ。
そこからわんころの痛そうな声が……。

「がうがうがう!!!」

「じゃあああああああああん!!!」

間違いなくお前が悪い。

美鶴の顎はわんこにがぶがぶ噛み付かれていた。恐らく肉つき骨棒にでも間違えているのだろう。

「助けてくれしゃくよおおおお!!」

「断る」

まああながち間違いじゃないしな……。

さて、そろそろお家に帰るとしよう。

「あ、波音だ!」

「おう、シエラ、メイナ、それに蒼さんまで」

「こんばんわです。」

……で、あのクソ顎は何を？」

蒼が不思議そうに見つめる先は犬を威嚇する美鶴の姿があった。

「ん？」

動物愛護だとさ」

俺は鞆を手に持つとシエラたちの輪に加わった。晩御飯は何だろうか。

少し楽しみだ。

「助けしてくれしゃああああああああ………」

「がうッがががああうああああああ……!!!!」

しゃくでば！ たただだしゃべるだけ（後書き）

あながち間違いじゃないですね。
骨付き肉。

でも……食べたくなえなあ。

しゃくでば！　くりすます

「そーんなわけで……！」

クリスマスとやらを楽しむしゃくう！」

もう遅い。

美鶴、もう遅いのだ。

あきらめろ。

クリスマスは当の昔に終わってる。

「クリスマス……」

「美鶴……」

二五日がクリスマスだと知らなかった男……。

美鶴。

そう、彼はその日もひとりだったのだ。

「クリスマス……しゃく……」

涙が余計に哀愁を誘う。

クリスマスか……。

俺は何してたっけなあ。

ゲームして飯食って普通に寝た記憶しかない。

アイルさん？

ああ……。

「く、くりす……しゃくすっ」

泣くなよ。
な。

「そーんなわけで、波音！」

なんだよ。

今回はそう巻き込むパターンか。

「ケーキ買ってこいしゃく！」

「金」

「しゃく？」

「金」

俺はずい、と手を突き出した。
金を寄越せクソ野郎。

「えっと……。」

はい、しゃく」

俺の手の上にちりんと乗せられる硬貨たち。

えっと……合計一二〇円。

「いつてらっしゃい」「かえるかあああああああ」

とび蹴りいいいいい！！

美鶴の体を突き飛ばす。

アホか！

「どこに一二〇円で買えるケーキがあるんだよ！

おい！

言ってみろよ、おい！」

「えー、スーパーに行けば……」

「ない！」

世間知らずな男め。

なぜかケーキは高いのだよ。

「でもみつる（ちっちゃいほう）はクリスマスに買ってたしゃく
よ？」

ケーキ、一二〇円で」

ちっちゃいほうのみつるひっさしぶりに出てきたな。
から揚げと顎の融合体。
ぶっちゃけ存在忘れてたし。

「それはアレだろ。

偶然だろ、ちなみに店の名前は？」

「鬼灯ケーキ製造所しゃく」

鬼灯財閥の傘下じゃねーか！

「……詩乃いただろ？」

「しゃくしゃく」

そりゃ一二〇円で買えるわ……。

財閥の娘だぜ、アイツ。

あんなアホでドジで……。

何で俺みたいな一般人と関り持つてるのが不思議なぐらいのお嬢様だぜ、アイツ。

「まあ、とりあえずケーキはない。
あきらめろ」

「いんやあしゃくう……!!」

じたばたとだだをこねる美鶴。

お前高校生か、本当に！

「じゃあもう知らん！」

俺はもういいや、と思ってな。

道端をごろごろする美鶴をほったらかして帰宅したんだよ。

もういいやん、だって。
だるいし。

おまけ

「しゃくう……」。

みんなの目が痛いしやく……」

美鶴は俺がいないのに気がつくまで約二十分かったようだ。
アホやな、マジで。

しゃくでは！ くりすます（後書き）

ありがとうございます。

明日はセンター試験。

頑張ってきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2021p/>

しゃくでば！

2012年1月13日22時55分発行